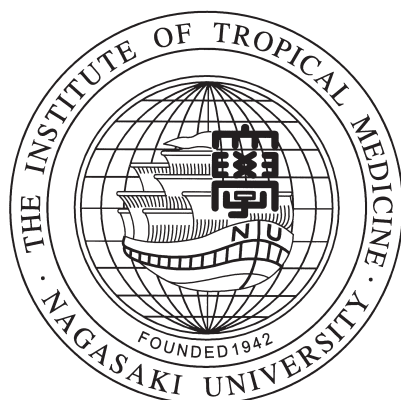


長崎大学熱帯医学研究所

年 次 要 覧

平成18年度
(2006)



長崎大学熱帯医学研究所

平成21年(2009) 7 月

長崎大学熱帯医学研究所

総 合 目 標

熱帯地域に存在する複雑多様な自然・社会環境が、熱帯病をはじめとする錯綜した健康問題を引き起こし続けている。国際交流の進展が著しい今日、これらの問題は世界的視野に立って解決されなければならない。

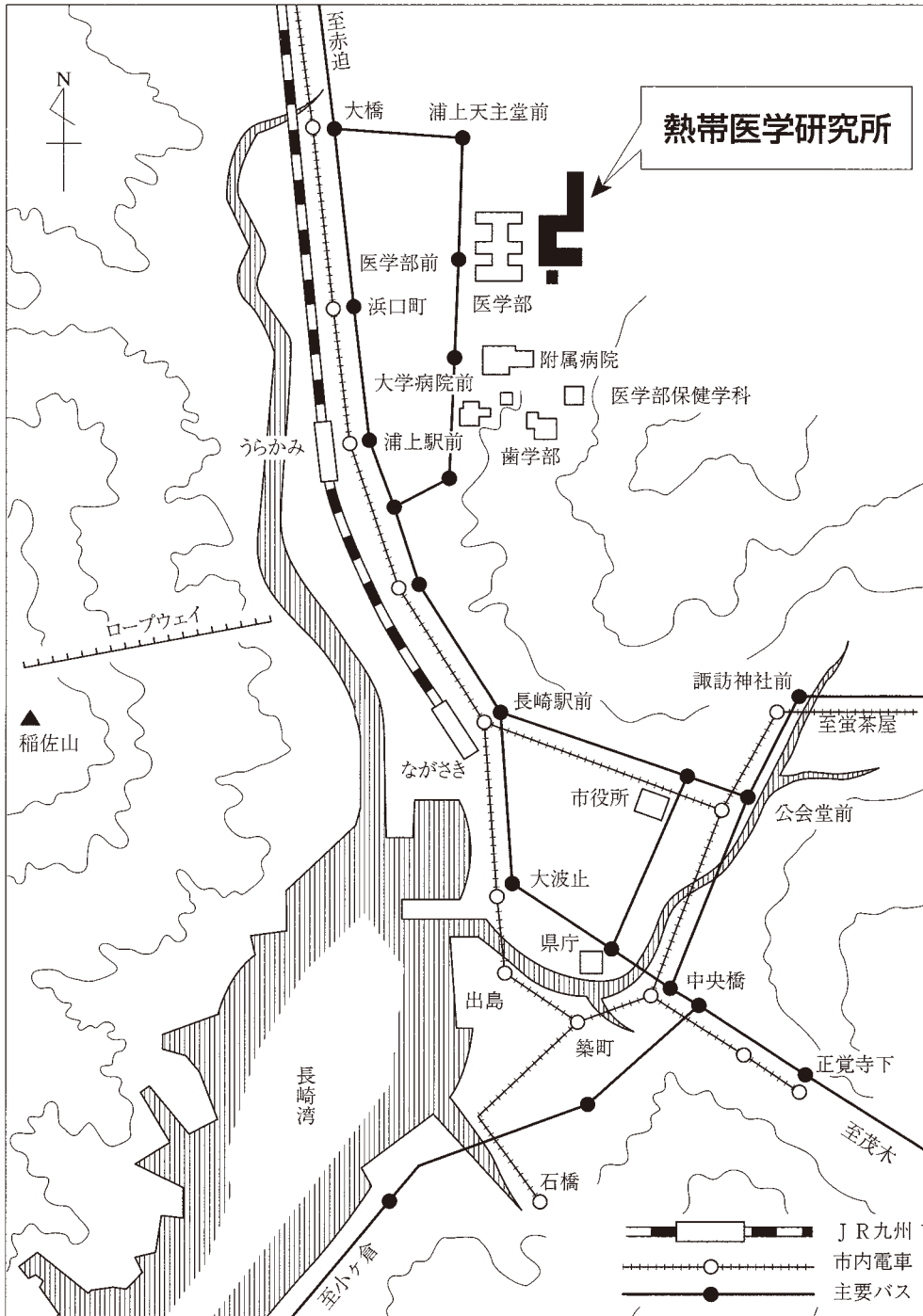
長崎大学熱帯医学研究所は、上述の認識に基づき、熱帯病の中でも最も重要な領域を占める感染症を主とした疾病と、これに随伴する健康に関する諸問題を克服することを目指し、関連機関と協力して以下の項目の達成を図るものである。

1. 熱帯医学及び国際保健における先導的研究
2. 研究成果の応用による熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献
3. 上記に係る研究者と専門家の育成



研 究 所 全 景

長崎大学熱帯医学研究所位置図



所在地 長崎市坂本1丁目12-4(〒852-8523)
電話 095-819-7800 (総合案内)
敷地面積 3,305㎡
建物面積 延8,425㎡

序

長崎大学熱帯医学研究所は、国立大学法人長崎大学の附置研究所で、創立昭和17年の歴史ある全国共同利用研究所である。

熱帯医学に関する学理及び応用研究を目的としており、研究所のミッションを平成11年度に設定し、「先端研究，社会貢献，人材育成」を3本の柱として教育研究に励んでいる。その組織は16分野の講座制で、教授11，准教授講師8，助教助手16の定員内教員のほか、事務職員8，および技術職員2を擁している。定員外として外部資金などによる有期教員6，有期職員2，非常勤職員45名が雇用され、さらに医歯薬学総合研究科の大学院生約60名が在籍している。

本年次要覧には、本年度の研究所の全活動をデータベースとして収録している。研究所全体としての活動，各分野の活動，付属施設の活動について，研究，教育，社会貢献の各項目について簡潔かつ詳細にまとめられている。我々の目指すところはすでに述べたように研究所のミッションを100%果たすことにある。先端研究の目安はあくまで発表論文の質と量および獲得研究費であり，教育の目安は教育システムの高度化と集まる学生の質と修士あるいは博士論文の質により自己評価している。また社会貢献は国内における貢献および世界保健における貢献に大別して評価している。

年次要覧にこれらのすべてを評価する情報が網羅されることを意図しているが、出来栄はいかかなものであろうか。読者の方々の忌憚のないご叱責が今後の研究所の発展に必須であると考えている。

なお平成18年度に特記すべきものとして挙げられるのは以下のものである。

1. 世界保健ニーズに応える医薬品開発研究のためのディプロマコースの初めての開催(10月2日から11月8日)
2. 平山壽哉教授の日本細菌学会「浅川賞」受賞
3. 医歯薬学総合研究科大学院熱帯医学修士課程の開始

平成21年7月1日

熱帯医学研究所 所長 平 山 謙 二

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧 平成18年度（2006）

目 次

総合目標

長崎大学熱帯医学研究所位置図

序

1	沿革	1
2	組織及び規模	
2. 1	組織	3
2. 2	職員	3
2. 3	経費	11
2. 4	敷地と建物	11
3	共同利用研究	
3. 1	共同研究	12
3. 2	研究集会	16
4	研究活動	
4. 1	分子構造解析分野	20
4. 2	病原因子機能解析分野	21
4. 3	感染細胞修飾機構分野	22
4. 4	寄生行動制御分野	24
4. 5	分子疫学分野－外国人客員	25
4. 6	暑熱順化機構分野	26
4. 7	炎症細胞機構分野	27
4. 8	病変発現機序分野	28
4. 9	感染症予防治療分野（熱研内科）	29
4. 10	エイズ・感染防御分野	30
4. 11	生物環境分野	31
4. 12	社会環境分野	34
4. 13	疾病生態分野	37
5	附属施設	
5. 1	熱帯性病原体感染動物実験施設	39

5. 2	熱帯感染症研究センター	42
5. 3	共同研究室	43
6	特別事業費による事業	
6. 1	熱帯医学研修課程	45
6. 2	ケニアプロジェクト拠点	48
6. 3	ベトナムプロジェクト拠点	50
6. 4	フィジープロジェクト拠点	52
7	外部資金による研究	
7. 1	文部科学省科学研究費補助金（平成18年度）	55
7. 2	厚生労働省科学研究費補助金（平成18年度）	56
7. 3	受託研究費等（平成18年度）	57
8	海外活動	58
9	外国人研究者の受け入れ	
9. 1	熱帯医学研究コース	66
9. 2	平成18年度に受け入れた外国人研究者	68
10	研究成果の発表状況	
10. 1	研究業績	71
10. 2	学会発表演題	84
10. 3	国際会議における研究発表	100
10. 4	報告書等印刷物	105
11	講演会	
11. 1	熱帯医学研究所における所外講師による講演	108
11. 2	熱帯医学研究所教員による講演	110
12	主要な研究設備品	117
13	刊行物	118

1 沿革

昭和17年 3 月	長崎医科大学附属東亜風土病研究所設立	昭和55年 3 月	本館の第二次増築竣工
昭和20年 8 月	原爆投下により研究所建物及び研究資料消失	昭和58年 4 月	国際協力事業団（JICA）の集団研修コース「熱帯医学研究コース」開設
昭和21年 4 月	長崎医科大学風土病研究所に改称	昭和59年 4 月	原虫学部門の増設
昭和21年 5 月	諫早市に移転し，研究活動再開	昭和60年 8 月	本館の第三次増築竣工
昭和24年 5 月	新制長崎大学に附置され，長崎大学附置風土病研究所に改称	昭和62年 4 月	病害動物学部門の増設
昭和32年 7 月	諫早大水害により，施設，機器，研究資料等に壊滅的な被害	平成元年 4 月	熱帯医学研究所は共同利用研究所に改組
昭和34年 3 月	長崎市興善町の元長崎大学医学部附属病院外来患者診療所跡に移転	平成 3 年 4 月	感染生化学部門の増設
昭和36年 3 月	長崎市坂本町に新庁舎竣工	平成 6 年 3 月	本館の第四次増築竣工
昭和36年 4 月	新庁舎に移転	平成 6 年 4 月	大部門制に改組（3大部門12研究分野）
昭和39年 4 月	疫学部門の増設	平成 7 年 4 月	世界の最先端の学術研究を推進する卓越した研究拠点（COE）の研究所に指定
昭和40年 4 月	寄生虫学部門の増設	平成 8 年 4 月	病原体解析部門に分子疫学分野（外国人客員分野）の新設
昭和41年 4 月	ウイルス学部門の増設	平成 9 年 4 月	附属熱帯医学資料室の廃止・転換に伴い，附属熱帯病資料情報センターの新設
昭和42年 2 月	本館の第一次増築竣工	平成13年 4 月	附属熱帯病資料情報センターの廃止・転換に伴い，附属熱帯感染症研究センターの新設
昭和42年 6 月	風土病研究所が熱帯医学研究所に改称	平成15年 3 月	本館の第五次増築（熱帯性病原体集中研究管理棟）竣工
昭和42年 6 月	熱帯医学研究所内科として，医学部附属病院に設置	平成17年 9 月	ナイロビ研究拠点 設置
昭和49年 4 月	附属熱帯医学資料室設置	平成18年 3 月	本館の改修工事竣工
昭和49年 4 月	病原細菌学部門の増設		
昭和53年 3 月	感染動物隔離実験棟竣工		
昭和53年 4 月	防疫部門（客員部門）の新設		
昭和53年 4 月	熱帯医学研修課程の新設		
昭和54年 4 月	感染動物隔離実験棟が熱帯性病原体感染動物実験施設に昇格		

歴 代 所 長

(長崎医科大学附属東亜風土病研究所)

角	尾	晋	自	昭和17年 (1942)	5 月 4 日
			至	昭和20年 (1945)	8 月22日
古	屋	宏	自	昭和20年 (1945)	12月22日
野		平	至	昭和23年 (1948)	1 月23日
高	瀬	清	自	昭和23年 (1948)	1 月24日
			至	昭和23年 (1948)	8 月31日
登	倉	登	自	昭和23年 (1948)	9 月 1 日
			至	昭和24年 (1949)	5 月30日

(長崎大学風土病研究所)

登	倉	登	自	昭和24年 (1949)	5 月31日
			至	昭和33年 (1958)	8 月31日
大	森	南 三 郎	自	昭和33年 (1958)	9 月 1 日
			至	昭和38年 (1963)	11月30日
福	見	秀 雄	自	昭和38年 (1963)	12月 1 日
			至	昭和42年 (1967)	5 月31日

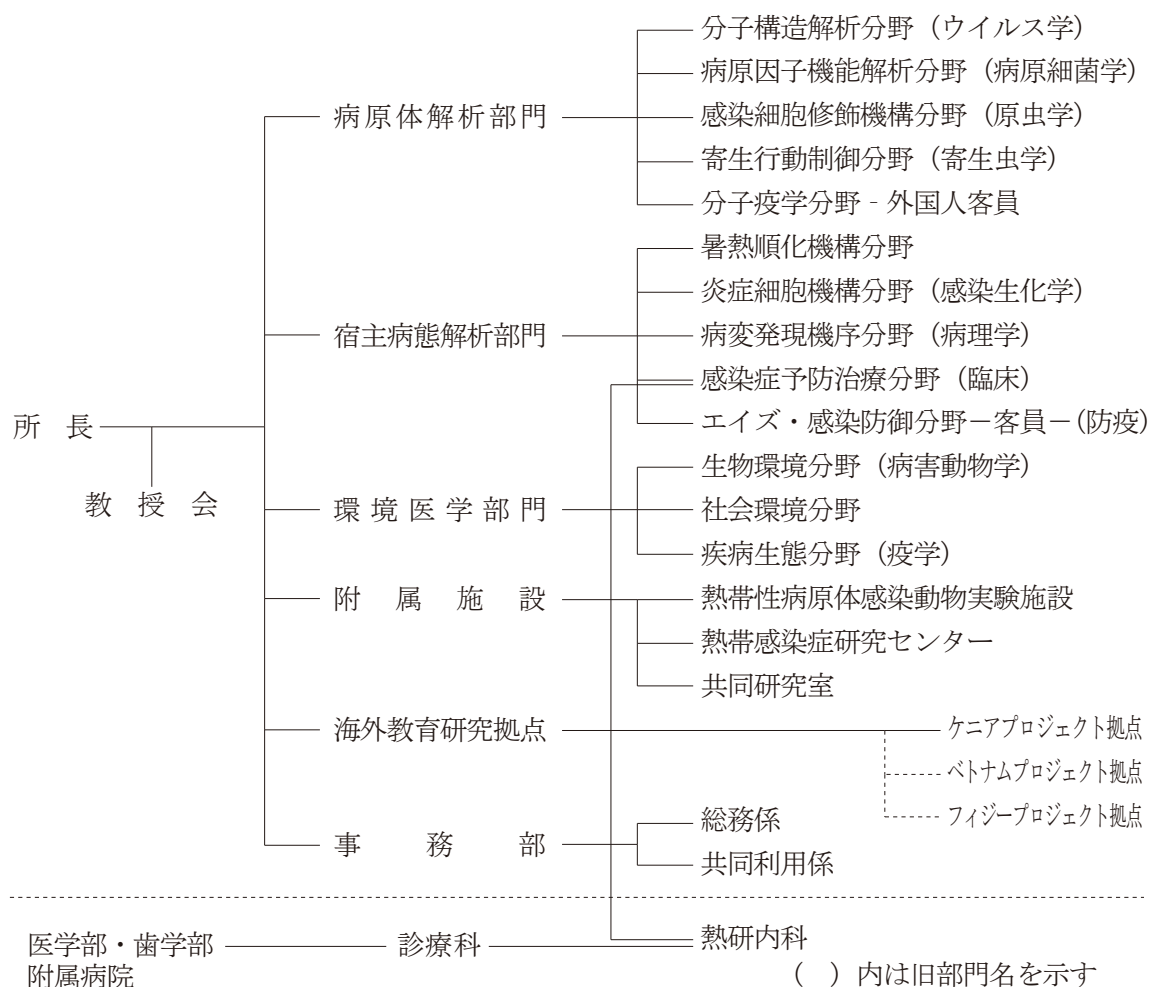
(長崎大学熱帯医学研究所)

福	見	秀 雄	自	昭和42年 (1967)	6 月 1 日
			至	昭和44年 (1969)	11月30日
片	峰	大 助	自	昭和44年 (1969)	12月 1 日
			至	昭和48年 (1973)	11月30日
林		薫	自	昭和48年 (1973)	12月 1 日
			至	昭和52年 (1977)	11月30日
内	藤	達 郎	自	昭和52年 (1977)	12月 1 日
			至	昭和54年 (1979)	11月30日
片	峰	大 助	自	昭和54年 (1979)	12月 1 日
			至	昭和56年 (1981)	4 月 1 日
松	本	慶 藏	自	昭和56年 (1981)	4 月 2 日
			至	平成 3 年 (1991)	4 月 1 日
板	倉	英 吉	自	平成 3 年 (1991)	4 月 2 日
			至	平成 5 年 (1993)	4 月 1 日
小	坂	光 男	自	平成 5 年 (1993)	4 月 2 日
			至	平成 9 年 (1997)	4 月 1 日
五 十 嵐		章	自	平成 9 年 (1997)	4 月 2 日
			至	平成13年 (2001)	3 月31日
青	木	克 己	自	平成13年 (2001)	4 月 1 日
			至	平成19年 (2007)	3 月31日
平	山	謙 二	自	平成19年 (2007)	4 月 1 日
			至	現	在

2 組織及び規模

2.1 組織

平成19年5月1日



2.2 職員

平成19年5月1日

1) 定員内職員

※ () は有期雇用職員で外数

区 分	教 員						そ の 他 の 職 員	合 計
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	計		
現 員	(4) 11	(1) 5	3	(1) 13	3	(6) 35	(2) 8	(8) 43

2) その他の職員

非常勤講師 34名 外国人研究員 (客員教授) 1名 客員教授 1名

客員准教授 1名 COE研究員 6名 COE技術員 1名

プロジェクト研究員 1名 科学研究費補助金技術支援員 1名 産学官連携研究員 3名

研究支援推進員 7名 研究機関研究員 1名 事務補佐員及び技能補佐員 29名

3) 教職員・大学院学生等氏名

平成19年5月1日 現在

所 長	(命)教授	医学博士	平山謙二
副 所 長	(命)教授	医学博士	高木正洋
分子構造解析分野 (ウイルス学)	教授	医学博士	森田公一
	(兼)教授		長谷部太
	(兼)准教授		マリア デル カルメン パルケット
	助 教	獣医学博士	井上真吾
	(兼)助 教		久保亨
	(兼)助教(有期雇用)		余 福 勲
	C O E 研究員	医学博士	デビ ベティ エルナワチ
	技能補佐員		城 臺 和 美
	研究支援推進員		山 口 知 美
	大 学 院 生		木 下 一 美
病原因子機能解析分野 (病原細菌学)	大 学 院 生		ギィエルモ ポサダス ヘッラ
	大 学 院 生		片 岡 周 子
	大 学 院 生		ディン テュアン デュク
	教授	農学博士	平山壽哉
	講 師	理学博士	和田昭裕
	助 教	医学博士	江原雅彦
	技術職員		岩見守
感染細胞修飾機構分野 (原虫学)	技術支援員		前田香代
	C O E 技術員		田村久美
	大 学 院 生		久 恒 順 三
	教授	医学博士	金子修
	講 師	薬学博士	上村春樹
	助 教	医学博士	中澤秀介
	技能補佐員		木下美紀
寄生行動制御分野 (寄生虫学)	大 学 院 生		キショール パンディー
	大 学 院 生		紗羅知 明子クリスティーナ
	教授	医学博士	青木克己
	助 教	医学博士	渡部幹次
	助 教	医学博士	三井義則
	技術専門員		三浦光政
	技能補佐員		富永佐登美

	研究支援推進員			林	田	昌	子
	大 学 院 生			大	木	智	春
	大 学 院 生			草	場	照	代
	大 学 院 生			阿	部	眞	由美
分 子 疫 学 分 野	外国人研究員 (客員教授) 事務補佐員			キ	ウ	ジ	ン
				小	松		要
暑熱順化機構分野	(兼)准 教 授	医 学 博 士		大	渡		伸
炎症細胞機構分野 (感染生化学)	教 授	医 学 博 士		中	村	三 千	男
	准 教 授	医 学 博 士		栗	林		太
	助 教	医 学 博 士		藤	井	仁	人
	技能補佐員			田	中	香	苗
病変発現機序分野 (病理学)	准 教 授	医 学 博 士		鳥	山		寛
	助 教	医 理 学 博 士		千	馬	正	敬
	技能補佐員			中	村	優	子
感染症予防治療分野 (臨床)	教 授	医 学 博 士		有	吉	紅	也
	准 教 授	医 学 博 士		森	本	浩 之	輔
	助 教	医 学 博 士		宮	城		啓
	助 手			渡	邊	貴 和	雄
	助教(有期雇用)	熱 帯 医 学 修 士		中	岡	大	士
	C O E 研究員			齊	藤	麻 理	子
	C O E 研究員			西	村		生
	技能補佐員			馬	込	美	紀
	技能補佐員			藤	野	加 奈	子
	技能補佐員			陳			蒙
	事務補佐員			野	川	理	加
	大 学 院 生			土	屋	菜	歩
	大 学 院 生			森		正	彦
	大 学 院 生			大	池	貴	行
	大 学 院 生			鋤	崎	利	貴
	大 学 院 生			興	座	嘉	康
	大 学 院 生			ブ	テ	イ	ト
	大 学 院 生			加	地	千	春
	大 学 院 生			吉	居	廣	朗
	大 学 院 生			大	間	敬	太

診療科 (熱研内科)	大学院生	大学院生	田口奈々	絵司
	(兼)助教	(兼)助教	山本レイミン	ト基
	吉鈴	木		
	有森	吉本	紅浩	也輔
	土橋	佳麗	之子	
	黒木	朗	喜	
	古寺	真由	美	
	田中	健貴	之弘	
エイズ・感染防御分野	医	医	貴嘉	郎
	医	医	晃	嗣
	医	医	こ	ずえ
	事務補佐員			
	客員教授	医学博士	山佐久高川	本藤保木田
	客員准教授	医学博士	大竹上鶴酒	直裕嘉正
	助教	医学博士	橋中野川	和宏俊千淳
	教授	医学博士	谷川	麻衣子
生物環境分野 (病害動物学)	講師	農学博士	トウラン	ブフォン
	C O E 研究員		前杉都	芳正
	産学官連携研究員			
	事務補佐員			
	研究支援推進員			
	事務補佐員			
	大学院生			
	大学院生			
社会環境分野	大学院生			
	大学院生			
	大学院生			
	大学院生			
	教授	医学博士	溝後依牛中	田藤
	助教	工学博士		健健
	助教	工学博士		梨栄
	研究支援推進員			
診療科 (熱研内科)	技能補佐員			
	事務補佐員			
	研究支援推進員			
	助教	工学博士		
	助教	工学博士		
	教授	医学博士		
	教授	医学博士		
	教授	医学博士		

	大 学 院 生		峰 松 和 夫
疾 病 生 態 分 野 (疫 学)	教 授	医 学 博 士	平 山 謙 二
	(兼)教授(有期)	医 学 博 士	安 波 道 郎
	准 教 授	医 学 博 士	大 渡 伸
	(兼)講 師	医 学 博 士	菊 池 三 穂 子
	助 教	学 術 博 士	グエン フィ ティエン
	産学官連携研究員		黄 明 国
	C O E 研究員		奥 田 尚 子
	技 能 補 佐 員		早 嶋 順 子
	技 能 補 佐 員		堀 江 仁 美
	事 務 補 佐 員		岡 本 麻 貴 子
	大 学 院 生		ドウッダウ ソンタムワット
	大 学 院 生		高 木 明 子
	大 学 院 生		エクラス ハメドアデル ハーフィズ アブドゥ
熱帯性病原体感染動物 実 験 施 設	大 学 院 生		グエン ティ フォン ラン
	大 学 院 生		山 崎 朗 子
	大 学 院 生		ヘレッシベ ギデオン コフィ
	大 学 院 生		エデルロイザ セレグレ メンドウーサ
	大 学 院 生		デル プェルト ロダス ラモナ フロレンシア
	施設長(命)教授	医 学 博 士	中 村 三 千 男
	助 手	医 科 学 修 士	柳 哲 雄
	技 能 補 佐 員		川 嶋 順 子
熱帯感染症研究センター	センター長(命)教授	保 健 学 博 士	門 司 和 彦
	教 授	医 学 博 士	嶋 田 雅 暁
	教授(有期雇用)	獣 医 学 博 士	堀 尾 政 博
	准 教 授	医 学 博 士	本 田 純 久
	准教授(有期雇用)	保 健 学 博 士	西 浦 博
	(兼)准教授(有期雇用)		松 山 章 子
	助 教	医 学 博 士	砂 原 俊 彦
	C O E 研究員		橋 爪 真 弘
	研究機関研究員		竹 内 昌 平
	研究支援推進員		崎 谷 恭 子
	研究支援推進員		荒 木 一 生
	技 能 補 佐 員		須 田 清 美
	事 務 補 佐 員		清 水 洋 治

	事務補佐員		駒	澤	暁	子
	大学院生		浜	田	芳	樹
	大学院生		大	野	晃	生
	大学院生		中	尾	優	子
	大学院生		阿	部	朋	子
	大学院生		中	尾	理恵	子
	大学院生		Magafu Mgaywa Damas			
	大学院生		駒	澤	大	佐
	大学院生		野	村	亜由	美
	大学院生		畑	岸	悦	子
	大学院生		氏	家	無	限
共同研究室	室長(命)教授	医学博士	森	田	公	一
	助手		一ノ瀬	昭	多	豊
	研究支援推進員		千	葉	賀	子
ケニア拠点	拠点リーダー(命)教授	医学博士	嶋	田	雅	暁
	教授(有期雇用)	医学博士	一	瀬	休	生
	教授(有期雇用)	理学博士	皆	川		昇
	教授(有期雇用)	医学博士	金	子		聰
	教授(有期雇用)	獣医学博士	堀	尾	政	博
	准教授(有期)	保健学博士	西	浦		博
	事務職員		本	田	志	保
	プロジェクト研究員	農学博士	二	見	恭	子
ベトナム拠点	拠点リーダー(命)教授	医学博士	森	田	公	一
	教授(有期雇用)		山	城		哲
	(兼)教授(有期雇用)		長	谷	部	太
	教授(有期雇用)		野	内	英	樹
	助教(有期雇用)		比	嘉	由紀	子
	助教(有期雇用)		鈴	木		基
	事務職員		古	矢	佳	男
	産学官連携研究員		上	地	玄一	郎
フィジー拠点	拠点リーダー(命)教授	医学博士	森	田	公	一
	(兼)教授(有期雇用)		神	谷	保	彦
	准教授(有期雇用)		塚	越	達	彦
	技術職員		笹	川	健	造
	事務職員		大	澤		裕

非常勤講師	大分大学・教授	牧 野 芳 大
	埼玉医科大学・講師	名 和 優
	琉球大学・教授	森 直 樹
	長崎県環境保健研究センター・専門研究員	吾 郷 昌 信
	大阪大学・教授	本 田 武 司
	国立感染症研究所・副所長	渡 邊 治 雄
	京都大学・教授	光 山 正 雄
	大阪府立大学・教授	倉 園 久 生
	おおり医院・院長	大 利 昌 久
	三和中央病院・部長	坂 本 信
	長崎大学医歯薬学総合研究科・教授	由 井 克 之
	清原龍内科・院長	清 原 龍 夫
	赤司医院・院長	前 川 知 之
	東京都立墨東病院・部長	大 西 健 児
	大阪大学・教授	大 石 和 徳
	亀田総合病院・部長	岩 田 健 太 郎
	長崎シーボルト大学・教授	四 童 子 好 廣
	久留米医科大学・教授	渡 邊 浩
	国際医療福祉大学・教授	楽 得 康 之
		田 崎 昇
	国際連合児童基金・アドバイザー	國 井 修
	東京医科歯科大学・教授	太 田 伸 生
	国立国際医療センター研究所・部長	狩 野 繁 之
	スウェーデンカロリンスカ研究所・准教授	金 子 明
	筑波大学・教授	我 妻 ゆ き 子
	群馬大学・准教授	中 澤 港
	外務省経済協力局開発計画課・課長補佐	山 本 太 郎
	英国ケンブリッジ大学・教授	CGN. Mascie-Taylor
		鈴 木 博
	タイ国立衛生研究所・所長	Pathom Sawanpanyalert
	青山学院大学・教授	飯 島 渉
	Blue ecology research・所長	大 場 保
	総合地球環境学研究所・教授	門 司 和 彦
	(株)トータルメディア開発研究所・総合プロデューサー	高 橋 裕
事務部	事務長	陣 野 勝 久
	総務係長	林 田 武 信
事務職員	事務職員	
	事務職員	

幹	直	村	山	員	職	務	事	任	主	務	總
織	佳	友	長	員	職	務	事	任	主	務	總
子	文	口	橋	員	職	務	事	任	主	務	總
祐		井	金	員	職	務	事	任	主	務	總
保	志	田	本	員	職	務	事	任	主	務	總
子	純	永	末	員	補	務	事	任	主	務	總
香	明	尾	松	員	補	務	事	任	主	務	總
子	日	内	竹	員	補	務	事	任	主	務	總
こ	智	野	之	員	補	務	事	任	主	務	總
世	ま	田	平	員	補	務	事	任	主	務	總
子	悦	水	内	員	補	務	事	任	主	務	總
光	久	口	清	員	補	務	事	任	主	務	總
子	英	本	野	員	職	務	事	任	主	務	總
き	由	下	松	員	補	務	事	任	主	務	總
	み		山	員	補	務	事	任	主	務	總
	ゆ			員	補	務	事	任	主	務	總
	き			員	補	務	事	任	主	務	總

2. 3 経 費

年度別歳出決算額

年度 \ 区分	人 件 費	物 件 費	合 計
平成9年	431,756,359 円	294,963,427 円	726,719,786 円
〃 10年	473,414,781	412,687,773	886,102,554
〃 11年	471,498,613	307,109,233	778,607,846
〃 12年	450,088,155	307,804,552	757,892,707
〃 13年	448,975,931	443,188,323	892,164,254
〃 14年	436,287,495	446,435,378	882,722,873
〃 15年	436,856,514	329,800,442	766,656,956
〃 16年	566,026,173	352,687,470	918,713,643
〃 17年	513,548,151	483,922,022	997,470,173
〃 18年	511,113,217	468,421,412	979,534,629

2. 4 敷地と建物

所在地 長崎市坂本1丁目12-4

敷 地 長崎大学医学部構内 3,305m²

建 物

建 物 名 称	構 造	建面積(m ²)	延面積(m ²)	備 考
本 館	鉄筋コンクリート 3階，一部4階建	1,763	6,454	昭和36. 3 建築 昭和42. 2 増築 昭和55. 3 増築 昭和60. 8 増築 平成6. 3 増築 平成18. 3 改修
熱帯性病原体 集中研究管理棟	鉄筋コンクリート 4階 建	329	1,328	平成15. 3 建築
熱帯性病原体 感染動物実験 施設	鉄筋コンクリート 3階 建	190	490	昭和53. 3 建築 昭和63. 3 増築
薬 品 庫	ブ ロ ッ ク 建	20	20	昭和47. 3 建築
保 管 庫	プレハブハウス	133	133	平成16. 3 建築
計		2,435	8,425	

3 共同利用研究

3. 1 共同研究 (◎は研究代表者)

1. 熱帯感染症に対する宿主感受性を決定する遺伝子多型の解析

長崎大・熱研	◎平山 謙二, 青木 克己, 神原 廣二, 嶋田 雅暁, 森田 公一
長崎大・国際連携戦略本部	安波 道郎, 菊池 三穂子
東京医科歯科大	大田 伸生
愛知医科大	木村 英作
独協医科大・医	松田 肇
東京大・大学院医学系	北 潔
国立国際医療センター研	狩野 繁之
カロリンスカ研	金子 明
ホーチミン市パスツール研	Vu Thi Que Huong

2. 結核とエイズ問題についてアジアとアフリカの事例を基にした比較研究

長崎大・国際連携戦略本部	◎野内 英樹
結核研	石川 信克, Jintana Ngamvithayapong, 村上 邦仁子, Saiyud Moolphate
エイズ予防財団	島尾 忠男
ロンドン大学熱帯医学校	Brian Greenwood, Alice Greenwood
リバプール大・熱帯医学校	Bertie Squire
タイ保健省チェンライ病院	Pacharee Kantipong
長崎大・熱研	有吉 紅也, 門司 和彦, 土屋 菜歩

3. 東南アジアにおける地域サーベイランスシステムネットワークの構築

長崎大・熱研	◎金田 英子, 門司 和彦, 金子 聡, 本田 純久, 砂原 俊彦
筑波大学	我妻 ゆき子
バングラデシュ国際下痢症研	David Sack
ハノイ医科大	Nguyen Tin Kim Chuc
国際協力医学研究振興財団	我妻 堯

4. デングウイルス感染阻害物質の検索

長崎大・熱研	◎森田 公一, 井上 真吾, EGM Mathenge
静岡県立大・薬	鈴木 康夫, 左 一八
長崎大・国際連携戦略本部	長谷部 太

5. ヘリコバクター・ピロリのVacA毒素のp38MAPK活性化とCOX-2発現機序

長崎大・熱研	◎平山 壽哉
長崎大・工	畠山 智充
千葉大・医学研究院	野田 公俊
大阪府立大・生命環境科	倉園 久生

6. 住血原虫の機能と病態

長崎大・熱研	◎神原 廣二, 上村 春樹, 中澤 秀介, 柳 哲雄
徳島大・総合科学	大橋 眞
愛媛大・無細胞生命センター	坪井 敬文
藤田保健衛生大・医	前野 芳正
久留米大・医	福岡 利英, 井上 雅広

7. 腸管内原虫の種多様性とその疫学

長崎大・熱研	◎神原 廣二, 上村 春樹, 中澤 秀介, 柳 哲雄
神戸大・医	宇賀 昭二
奈良女子大・理	吉川 尚男
大阪市立大・大学院医	寺本 勲
金沢大・大学院医	井関 基弘, 所 正治
東海大・医	橘 裕司

8. 住血吸虫症流行地に生息する淡水産貝類のミラシジウムの誘引力

長崎大・熱研	◎青木 克己
鹿児島大・多島圏研センター	野田 伸一
高知大・医	吾妻 健
動物衛生研	辻 尚利
愛知医科大	木村 英作

9. 脂肪性肝炎の国際比較

長崎大・熱研	◎鳥山 寛, 千馬 正敬
長崎大・病院	市川 辰樹
長崎大・大学院医歯薬	濱崎 圭輔, 中尾 一彦

10. 熱帯地におけるHIV感染症の臨床科学研究

長崎大・熱研	◎有吉 紅也
--------	--------

11. レトロウイルスエンベロップ蛋白質による膜融合におけるADAM12の関与

長崎大・熱研	◎久保 嘉直
理化学研	天沼 宏

12. 現場を想定した疾病媒介蚊防除技術, 効果判定, モニタリングの再検討 (Phase II)

長崎大・熱研	◎高木 正洋, 川田 均, 都野 展子
国立感染研	津田 良夫
名古屋女子短大	杉山 章

13. 熱帯医学・国際保健から見たミレニアム開発目標 (MDGs) 対策

長崎大・熱研	◎溝田 勉, 谷村 晋
国連人口基金	池上 清子
国連児童基金	浦元 義照
岡山大	山本 秀樹
九州大・医学研究院	信友 浩一
実践女子大	石井 明
国立保健医療科学院	長谷川 敏彦
関西福祉科学大	南 哲
チューレン大	楽得 康之

14. 感染症の対策・予防と社会環境要因の解析

長崎大・熱研	◎溝田 勉, 後藤 健介
大阪国際大	山本 勇次
女子栄養大	佐久間 充
チューレン大	楽得 康之

大阪教育大学	藤田 大輔
東京足立保健所	坂野 晶司
ロンドン大	関根 一貴

15. ミニブタを用いたヒト住血吸虫症モデルの確立と応用

長崎大・熱研	◎平山 謙二, 菊池 三穂子
福岡大・医	石井 一成
琉球大・遺伝子センター	新川 武
独協医科大・医	千種 雄一, 林 尚子
順天堂大・医	奈良 武司
産業医科大・医	金澤 保
江蘇省寄生虫病研	Yu Chuanxin

16. 健康開発と社会人類学・医療人類学

長崎大・国際連携戦略本部	◎松山 章子
長崎大・熱研	門司 和彦, 溝田 勉, 金田 英子, 後藤 健介, 駒澤 大佐
国立民族学博物館	岸上 伸啓, 白川 千尋
外務省経済協力局	山本 太郎
大阪大	池田 満穂
千葉大	武井 秀夫
国際協力機構	杉田 映理
京都大	尾崎 啓子
アジア経済研	佐藤 寛

17. Great Ape Security

京都大・霊長類研	◎Michael A. Huffman, 藤田 志歩
長崎大・熱研	嶋田 雅暁, 門司 和彦
Johns Hopkins Univ.	Nathan D. Wolfe
京都大・アジアアフリカ研究科	山越 言
マレーシア・サワラク州農業局	Hatta Ramlee
Virginia-Maryland Regional College	Taranjit Kaur

18. アジア・オセアニアの人口・健康・栄養転換の統合的研究

東京大	◎梅崎 昌裕, 山内 太郎
長崎大・熱研	門司 和彦, 本田 純久, 金田 英子, 駒澤 大佐, 竹内 昌平
福岡県立大	夏原 和美
新潟医療福祉大	村山 伸子
佐賀大	稲岡 司
関西学院大	安高 雄治

3. 2 研究集会

1. 医学研究における倫理に関する国際セミナー

開催日：平成18年7月24日～26日

場 所：長崎大学熱帯医学研究所

代表者：疾病生態分野 平山 謙二

発表者：(1) 医学研究の倫理とは。その歴史的背景と原理

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

(2) 研究への参加の意思決定：インフォームドコンセント

東京大学 助 手 松井 健志

(3) リスクと利益の評価

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

(4) 小児あるいは社会的な弱者を対象にした研究の倫理

国立成育医療センター 室 長 中村 秀文

(5) 誘導と搾取

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

(6) アメリカの民間IRBの紹介

韓国ウルサン大学 助教授 Young-Mo Koo

(7) 日本の治験システムと倫理審査委員会

昭和大学 教 授 内田 英二

(8) 薬理遺伝学と倫理

東京大学 教 授 津谷 喜一郎

(9) コミュニティー基盤研究と倫理

長崎大学・熱研

教 授 平山 謙二

(10) 国際共同研究における倫理問題，標準的な治療，研究が終わった後の利益

ベルゲン大学

教 授 Reidar K. Lie

(11) 倫理審査のやり方 擬似IRB演習

ベルゲン大学

教 授 Reidar K. Lie

2. HIV感染症の世界的予防治療戦略

開催日：平成19年 3 月22日～ 3 月23日

場 所：長崎大学医学部ポンペ会館

代表者：感染症予防治療分野 有吉 紅也

発表者：タイ国立衛生研究所

研究員 Archawin Rojanawiwat

タイ国立衛生研究所

研究員 Nuanjun Wichukcinda

タイ国保健省ランパン病院

部 長 Panita Pathipvanichi

タイ国保健省チェンライ総合病院

部 長 Pacharee Kantipong

タイ国保健省ナコンピン県病院内科

部 長 Prattana Leenasirimakul

国立感染症研究所エイズ研究センター

センター長 山本 直樹

国立感染症研究所

室 長 佐藤 裕徳

国立感染症研究所

室 長 横田 恭子

近畿大学医学部

教 授 宮澤 正顯

大阪大学微生物病研究所

教 授 塩田 達雄

長崎大学・医歯薬

教 授 森内 浩幸

長崎大学・熱研

大学院生 土屋 菜歩

3. 社会環境の変化と感染症および対策における技術協力の可能性

開催日：平成19年 1 月30日～ 1 月31日

場 所：長崎大学熱帯医学研究所

発表者：(1) 危機管理の位相と安全戦略ー地球，国，自治体，地域，市民ー

(財)国際交通安全学会 専務理事 石附 弘

(2) 危機管理の着眼点と技術協力ー品質の歴史と進化の視点からー

前・長崎国際大学 同時通訳者，翻訳家 山田 聖剛

(3) 停電と感染症

長崎大学大学院生産科学研究科 教 授 後藤 恵之輔

- (4) 振動のふしぎー人間安全保障の危機管理の礎としてー
慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科 教授 武藤 佳恭
- (5) 長崎県の病院分布状況から考える感染症危機管理
長崎大学医学部 学生 原田 直樹
- (6) 人間の安全保障と感染症を途上国への国際協力を通して考える
長崎大学医学部 学生 茅野 龍馬
- (7) 東ティモールにおける日本の援助ーODA民間モニターレポートー
長崎大学熱帯医学研究所非常勤講師／長崎市平和推進室
顧問 田崎 昇
- (8) 地域の『内発的開発力』に依拠した生物リスクの問題解決
ーエキノコックス症を例にしてー
酪農学園大学環境システム学部生命環境学科 教授 神谷 正男
- (9) 東南アジア諸国における学校危機管理と安全教育
大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター 教授 藤田 大輔
- (10) Comparative study on surveillance system of HIV/AIDS and tuberculosis,
problematic issues for utilization in Guinea and Japan
JICA研修員 Lamine BANGOURA
- (11) A comparative study of control and prevention of HIV/AIDS and tuberculosis in Ja-
pan and Mozambique
JICA研修員 Olga Maria da Conceicao Nelson AMIEL
- (12) 最近の米国における感染症の危機管理
米国Tulane大学医療センター教授, 国際医療福祉大学教授 樂得 康之

4. 健康危機管理における感染症数理モデルの有用性の検討

開催日：平成18年10月13日

場 所：長崎ブリックホール

代表者：西浦 博

発表者：(1) 日本におけるヒトT細胞白血病ウイルス I 型キャリア分布と古代人口動態の

関係：数理疫学モデルによる考察

大分大学

江島 伸興

(2) 数理疫学における年齢構造化個体群ダイナミクス

東京大学

稲葉 寿

(3) 季節変動を考慮した感染症動態と麻疹の2年周期ー進化論的な観点から

加茂 将史

(4) スケールフリー・ネットワーク上の病原体競争に関する数理モデル

増田 直紀 他

(5) 症候期年齢に対する天然痘感染症の逆計算法による最尤推定

西浦 博

(6) IBMを用いての通勤電車のリスク評価：新型インフルエンザ対策への応用

大日 康史 他

(7) 天然痘バイオテロの流行規模及び必要ワクチン量推定の試み

徳永 章二

4 研究活動

4. 1 分子構造解析分野

I. 熱帯ウイルス病の疫学およびウイルス学研究

- 1) 東南アジアと大洋州におけるチクングンヤ熱ウイルス感染の血清学的疫学調査として、2001～2005年にフィジー、フィリピン、インドネシア、バングラデシュ、およびスリランカで Dengue 熱患者および疑い例患者から採取した305体の血清標本をIgM捕捉ELISA法、ならびにIgG間接ELISA法で実験室診断した。その結果、CHIK IgM陽性反応が15例(4.9%)、そしてCHIK IgG陽性反応が41例(13.2%)あった。IgM陽性反応の割合が最も高かったのはフィリピンの11.1%であり、最も低かったのはバングラデシュの0%であった。IgG陽性反応はインドネシアの25.0%が最も高く、次いでフィリピンの14.3%であった。フィジーはIgG陽性反応が最も低く4.9%という結果であったが、再検査を行ったところ、標本採取の少し前に流行したRRVウイルスの抗体に交叉反応したものであることが確認され、フィジーにチクングンヤウイルスが存在しないという従来知見と一致する結果となった。
- 2) 過去の研究により、日本脳炎ウイルスのE蛋白エピトープが中和において重要な標的であることがわかっており、エンベロープ蛋白質の領域1および2の合流地点にまたがる箇所がエピトープ503(Ep503)と特定されている。中和メカニズムをさらに理解するために、日本脳炎ウイルスのpH依存性を持つ立体配座特異的な構造的エピトープの検証を行ったところ、日本脳炎ウイルスのEp503を標的とする、中和モノクローナル抗体503(mAb503)は酸性度が強まるにつれ日本脳炎ウイルスのエピトープとの相互作用が弱まるという性質を持つことが判明した。

II. アルボウイルスの分子生物学的研究

日本学術振興会補助金による、ベトナム国立衛生疫学研究所(NIHE)との共同研究の一環で、ベトナムにおいてフィールドで採取した蚊および急性脳炎患者から、日本脳炎ウイルスではない、急性脳炎と関連するアルボウイルスを分離し同定することを試みた。2001～2003年に採取した蚊サンプルから球体のエンベロープを持つRNAウイルスを分離し、C6/36蚊細胞で培養した。シークエンスしたところ、このウイルスの殆どの遺伝子配列は、GenBankに登録されているいずれのウイルスの遺伝子配列とも一致しない結果となった。このウイルスをNam Dinhウイルス(NDiV)と命名し、現在、3' NDiV遺伝子の解析を進めている。

III. アルボウイルスその他のウイルス感染の実験室診断法開発

- 1) ベトナムのSARS患者との濃厚接触があったボランティアサンプルを用いて、SARSコロナウイルスの不顕性感染の簡便で信頼性の高いスクリーニング法を開発した。
- 2) 大腸菌に発現された組み換えニパウイルスヌクレオカプシド蛋白を使ったニパウイルス感染の血清学的診断法を開発した。
- 3) RT-LAMP検査法を利用した鳥インフルエンザA型ウイルス/H5の検出法を開発した。

IV. デングウイルスの分子疫学研究

2002年にバングラデシュで起きたデング熱アウトブレイクの分子疫学研究を行った。C6/36細胞で分離した8つのデングウイルス分離株についてエンベロープの遺伝子配列を解析した。本研究において分離したすべての株はゲノタイプ2に分類され、タイで分離された株と近縁であることが明らかになった。

V. アルボウイルスその他のウイルス病に対する治療および予防法の開発

ワクチニアウイルスに対する事前免疫を与えたウサギでも効果的に中和抗体を導くSARS-CoVスパイク蛋白発現ワクチニアウイルスを遺伝子組み換え技術を用いて作成した。

VI. WHO協力センターとしての活動

2005年3月に始まった、独立行政法人国際協力機構(JICA)の大洋州諸国の予防接種強化事業である、「Japanese support to the Pacific Immunization Programme Strengthening (J-PIPS)」における技術実施機関としてWHOと協力しており、このプロジェクトにおいて当研究分野の森田公一教授はチーフ・アドバイザーを勤め、定期的に現地を訪れてプロジェクトの進行に積極的に関与した。

4. 2 病原因子機能解析分野

I. ヘリコバクター・ピロリ感染の病因と病態学的研究

ヘリコバクター・ピロリが産生する空胞化毒素VacAの胃粘膜障害機序を明らかにする。そのために、「VacA毒素がその受容体である膜型チロシンフォスファターゼ(RPTP)に結合することによって惹起される空胞形成及び細胞死にいたる細胞内シグナル伝達の流れを明らかにする」ことを目指し、VacA毒素受容体の構造と機能および毒性発現についての詳細を解析することを目指している。

COX-2は炎症及び発癌に関わる重要な酵素であるが、17年度の初期研究によりVacAを作

用させた細胞ではCOX-2の発現がATF-2転写因子を活性化することにより促すことを明らかにした。そこで18年度は、VacAの毒性を理解する上で重要なVacAと宿主転写因子との関連を知る分子基盤を具体的に示すために、VacAがいかなる機構でCOX-2発現を促すかを詳細に解明することを計画した。

その結果、

- 1) VacAはp38MAPキナーゼの活性化は転写因子ATF-2のリン酸化を引き起こし、COX-2の発現を促した。このCOX-2の発現促進によりプロスタグランディンE₂ (PGE₂) の産生が亢進することが判明した。しかも、これら一連の生体反応が、p38MAPキナーゼのドミナントネガティブな遺伝子を発現させた細胞およびATF-2siRNAを導入した細胞では著明に抑制され、PGE₂プロモーター領域にあるCREサイトが転写に重要な機能を持つことを証明した (Hisatsune J, *et al.* Infect. Immun. 2007)。かかる事実はVacAが胃粘膜上皮にアポトーシスを引き起こすだけではなく、一方において胃粘膜修復の因子としてPGE₂の産生を惹起する「相反する機能」を持っていることを示唆していた。他の施設との共同研究によりVacAの細胞内への移行が、本菌のもう一つの病原因子であるCagAをタイプIV分泌機構で細胞内へ注入された細胞において抑制されている事実 (投稿中) を考慮すると、VacAによるPGE₂の産生亢進は、本菌が生息、接触する場を提供している細胞の死滅を防ぎ、持続感染を可能にしている機能とも思われた。
- 2) 平成17年度の以下の成果は、18年度行われた幾つかの追加実験成果を加えて2つの論文として発表された。すなわち1) VacAはlipid raft以外の細胞膜上に存在するRPTP β に結合し、温度依存的にlipid raftに集積した後に細胞内へ移行する。空胞形成及びp38MAPキナーゼの活性化には細胞膜lipid raftにあるGPI-anchored proteinの未知の機能が重要であり、lipid raftへの集積が必須であるが、p38MAPキナーゼの活性化にはVacAの細胞内への移行は必要ないことが分かった (Nakayama M, *et al.* Infect. Immun. 2006)。2) VacAのミトコンドリア障害については、VacAが細胞質内のBaxおよびミトコンドリア膜上のBakを活性化し、それによってチトクロームの遊離とアポトーシスの誘導が惹起されること (Yamasaki E. *et al.* J. Biol. Chem. 2006) を報告した。

4. 3 感染細胞修飾機構分野

I. マラリアに関する研究

三日熱マラリア原虫のmsp-1遺伝子の進化過程を明らかにするため、新たにタイでヒト感染から分離された猿マラリア原虫 *Plasmodium knowlesi* のそれと比較研究し、同時に新たにア

フリカからの分離株を加えた42の三日熱マラリア原虫株の多様性についても比較研究した(Mol Biochem Parasitol 146: 105-8, 2006)。タイ国分離の124の熱帯熱マラリア原虫に加えて他地域からの10の分離株についてSporozoite Threonine-Asparagine-Rich Protein遺伝子の多様性を追求し、この遺伝子も宿主の免疫プレッシャーを受け、実質的選択が行われていることが判明した。2001年から2004年にかけて当分野を中心として行われたインドネシアにおけるマラリアコントロール活動を住民のアンケート調査により評価した(The Southeast Asian Journal of Tropical Medicine and Public Health 38: 213-22, 2007)。

中澤は、マラリア原虫の薬剤治療によるreduction rateを検討した。また、マウスマラリアの系においてオステオポンチンがTh1を介して免疫に関与していることを見出した(Infect. Immun. 74: 2423-2427, 2006)。さらに、オステオポンチンがTh1を介して熱帯熱マラリア感染に対する免疫にも関与していることを見出し報告した(Acta Tropica 98: 305-310, 2006)。

II. トリパノソーマに関する研究

Trypanosoma cruzi は、種々の哺乳動物細胞に侵入して増殖する。侵入直後の原虫は寄生胞膜に包まれているが、アマスティゴート型として増殖する時には寄生胞膜から出て直接細胞質中に存在しなくてはならない。媒介昆虫の排泄物に出てくるメタサイクリック型原虫と哺乳動物細胞から得られるトリポマスティゴート型のトランスシアリダーゼ活性を比較すると、メタサイクリック型では非常に低い活性を示すのみである。また、メタサイクリック型における細胞侵入は、トリポマスティゴート型に比較すると寄生胞膜からのエスケープが遅くなることが報告されている。このトランスシアリダーゼ活性の違いが、寄生胞膜からのエスケープの時間の違いの原因ではないかと考え、トランスシアリダーゼを高発現するように遺伝子導入したメタサイクリック型原虫を用いて細胞侵入、寄生胞膜からのエスケープにかかる時間を調べこの仮説を証明した。シアル酸を発現しない細胞への侵入においては差が認められず、トランスシアリダーゼによってPV膜上のシアル酸を除去されることが重要であることを示した(Cell Microbiol 8: 1888-1898, 2006)。

III. アメーバ症に関する研究

フィリピン、マニラ市にある精神発達遅延者収容施設において113名の患者の赤痢アメーバ保有率と分離されたアメーバ株の遺伝的多様性が調査された(Parasitol Res 98: 106-110, 2006)。ネパールカトマンズ市のアカゲザルから分離された赤痢アメーバ株について、いくつかの遺伝子配列およびその病原性が分析され、まったく新しいタイプの赤痢アメーバであることが確かめられた(Mol Biochem Parasitol 153: 107-114, 2007)。

4. 4 寄生行動制御分野

熱帯地域で猛威を振るっている糸状虫症，住血吸虫症，土壌伝播線虫症の研究を行なっている。平成18年度の研究成果を下記する。

I. 糸状虫症に関する研究

1) 抗糸状虫剤Diethylcarbamazine(DEC)治療に伴うミクロフィラリアの臓器間移動

Brugia pahangi 感染スナネズミにDECを投与すると，30分後にはミクロフィラリアは末梢血中より消失するが，3時間後には再び末梢血中に出現する。DEC投与後，末梢血中にミクロフィラリアがみられなくなる時間帯に，ミクロフィラリアがどの臓器に移動しているかを知るために，感染スナネズミにDECを投与後，一定時間に剖検し，各臓器中のミクロフィラリア数を調べた。一方，血中および各臓器中のDEC濃度をガスクロマトグラフィー法により測定した。

DEC投与前にはミクロフィラリアは肺に専ら検出されたが，DEC投与後30分すると，筋肉中に多くのミクロフィラリアが検出された。DEC投与後3時間すると，筋肉中のミクロフィラリアは減少し，肺で増加した。

このミクロフィラリアの移動は臓器中のDECの濃度を反映していた（DEC投与後30分後の筋肉中のDEC濃度は肺に比し低く，3時間後は逆転する）。(J.Parasitol., 2006)

2) 糸状虫感染幼虫の皮膚への感染様式の研究

糸状虫感染幼虫は蚊の吸血により生じた傷口より侵入することは知られているが，蚊の吸血時に皮膚表面に吻より脱出した幼虫がどのようにして傷口まで達し，侵入するか不明であった。当分野では，感染幼虫が血清に対して走化性運動を示すことを報告し(Gunawardena et al., 2003)，走化性運動が幼虫の皮膚への侵入機序の中で重要な役割を果たしていることを明らかにした。

本年度，血清中の感染幼虫(*B.pahangi*)を誘引する物質の検討を行なった結果，ナトリウムイオンが感染幼虫を誘引する物質であることを明らかにした。

II. 住血吸虫症に関する研究

1) 新しい住血吸虫対策法としての罔貝の研究

住血吸虫症の対策法はいくつかあるが，アフリカにおいては，これらの対策法の機能は種々の要因により発揮されていない。そこでアフリカの住血吸虫症対策には現地の風土，風俗，習慣等に影響を受けない新しい対策法の開発が必要である。

寄生虫学分野では，新しい対策法の候補の一つとして，罔貝の研究を続けている。罔貝

は中間宿主へ侵入するミラシジウムを減少させるので、そこに住む人々の風俗習慣に影響を受けず、アフリカでは効果的対策法となることが期待されている。

図貝として活用するには、貝にミラシジウムが侵入することが不可欠であるので、貝へのミラシジウムの侵入の第一段階としての貝分泌物へのミラシジウムの反応(走化性運動)を調べる必要がある。平成18年度は長崎に生息する淡水産貝の分泌液に対する *Schistosoma mansoni* ミラシジウムの走化性を調べた。

ミラシジウムの走化性は矩形のガラス管にミラシジウムを遊泳させ、その一端に貝分泌液を注入し、そこへのミラシジウムの集合で判定した。

長崎で採集した淡水産貝は下記の5種である。

- (1)*Stenothyra japonica*, (2)*Assiminea hiradoensis*, (3)*Angustassiminea castanea*,
(4)*Gyraulus tokyoensis*, (5)*Physella acuta*

ミラシジウムの中間宿主である *Biomphalaria glabrata* の分泌物に対する走化性運動は強い。上記6種の中で *Physella acuta* は *B. glabrata* と同様、強い走化性を示した。他4種の走化性は中～弱であった。

Ⅲ. 土壌伝播線虫症に関する研究

1) 開発途上国における土壌伝播線虫対策

1998年、故橋本龍太郎首相により、日本のイニシアチブによる国際寄生虫対策が開始された(橋本イニシアチブ)。

橋本イニシアチブには熱帯医学研究所の数名の研究者が参加し、アジア・アフリカでの寄生虫対策の推進に貢献した。橋本イニシアチブで世界3ヶ所に設置された寄生虫対策教育研究センターの一つ、タイのAsian Centre of International Parasite Control (ACIPAC)で実施された活動がまとめられ、発表された。(Trends in Parasitology, Vol.23, 2006)

Ⅳ. その他の研究

当教室では、酵素・免疫法を応用した抗寄生虫薬の高感度かつ迅速な血中濃度測定法を開発してきた(DiethylcarbamazineとIvermectin)。本年度より、酵素免疫法を応用した抗マラリア薬アルテミシンの血中濃度測定法の開発に着手した。

4. 5 分子疫学分野－外国人客員

I. ミャンマーにおけるデングウイルスの分子疫学研究

Upper Myanmarにおいて繰り返し流行を起こすデングウイルスの分子疫学を解明するために、2006年にデング熱でMandalay Children Hospitalに入院した患者から採取した110本の血清標本から、C6/36蚊細胞系を用いてデングウイルスの分離を試みた。さらに、感染した培養液をRT-PCR検査しデングウイルスの遺伝子配列を検出した。その結果、MandalayおよびUpper Myanmarから3種類の新しいデングウイルス株を初めて同定した。これらは、血清型3のデングウイルス株1種類と、血清型4の株2種類であった。系統発生解析の結果、血清型3の株は遺伝子型IIに属し、血清型4の株は2種類とも遺伝子型Iに属することが分かった。遺伝子配列からタイやバングラデシュのような近隣諸国に存在するウイルスとの近縁性が示された。

4. 6 暑熱順化機構分野

熱帯地環境で、特に生体影響が強い環境因子の暑熱および紫外線について研究している。

I. ヒトの暑熱耐性と温暖化対策に関する研究

恒温動物であるヒトは体温が一定範囲に維持されている。暑い環境でも作業活動が低下しない（能力適応）および生存可能（抵抗適応）なヒトは、暑熱耐性が高いと評価される。この暑熱耐性は、皮膚血管拡張や発汗による熱放散能力の向上により体温上昇を抑制する調節型適応と、体内環境を変化させる従属型適応がある。ヒトは調節型適応が主体となる。

人工気候室で温度負荷を加え、皮膚血流量を反映する皮膚温変化や発汗などの熱放散反応を指標とする、温帯住民と熱帯住民の比較実験から暑熱耐性に有意差が認められた。また、適正な温度負荷を繰り返す事で、暑熱耐性を向上させる事が出来る。

2003年のヨーロッパは猛暑に見舞われ、52,000人が熱中症で死亡した。しかし、この年の年平均気温は0.8℃上昇であった。しかし、地球温暖化で今世紀中に年平均気温が2～3.5℃上昇すると予測されている。温暖化抑制対策が十分に行われても2℃の温度上昇は避けられない状況で、熱中症による犠牲を軽減するために、温室効果ガス発生抑制と共に、ヒトの暑熱耐性向上が不可欠となる。

しかし、2005年の熱帯医学研究所改修で、この研究には基本装置である2基の人工気候室(温度・湿度・照度の制御可能)が廃棄処分された。研究の必要性がピークの時に、実験遂行が困難な状況である。

II. 紫外線暴露が熱帯病感染におよぼす影響

マウスへのマンソン住血吸虫感染実験において、

- 1) 人工紫外線(UV-B)照射群では、紫外線非照射群と比較し、皮膚から侵入した感染幼虫数・生体で生存していた回収成虫数が有意に高い値が認められた。
- 2) 太陽紫外線でも同様の影響があるのか研究を行っている。

現在、住血吸虫症だけでも、熱帯地では約2.5億の患者が苦しんでいる。この研究は、感染症に対する紫外線影響を解明して、疾病感染の抑制に貢献する。特に、紫外線が強い熱帯地における感染症対策を目的としている。

Ⅲ. 水棲病害微生物の音響水圧による駆除

マンソン住血吸虫のセルカリアとミラシジウムに超音波振動による駆除法を実験している。水中の圧振動は減衰が少なく、その影響範囲は大気中に比べ広く効果も高い。

マンソン住血吸虫の感染幼虫（セルカリア）に対し、28, 45, 100 KHzの水中音響を15, 30, 60, 180 sec負荷した。セルカリアは、水中音響負荷による障害のほとんどは、頭部と尾部間の断烈であった。強度の障害では、原形を止めない影響を受けていた。

駆除効果は周波数によって異なり、負荷周波数による駆除効果に有意差が認められた。

中音響の影響について検証を行っている。

4. 7 炎症細胞機構分野

I. 新規G/TミスマッチDNA結合タンパク質の同定（藤井仁人・中村三千男）

独自にその存在を見いだした新規G/TミスマッチDNA結合タンパク質の同定を試みた。まずDNA結合担体によるアフィニティ精製を試みたが困難を伴った。SDS変性条件下でのサウスウェスタン法により検出できることから、単体でG/TミスマッチDNA結合能があるので、 λ -ファージライブラリーからの発現クローニングを開始した。（文責：藤井）

II. Nonsense-mediated altered splicingの解析（栗林太）

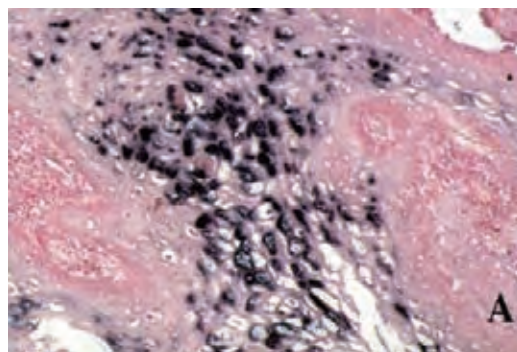
好中球がスーパーオキシド (O_2^-) を生成できないために細菌感染を繰り返す慢性肉芽腫症 (CGD) は、NADPHオキシダーゼ構成蛋白質の遺伝子異常による疾患である。このNADPHオキシダーゼ蛋白質複合体の中でgp91^{phox}だけはX染色体にコードされCGDの多数をしめる。遺伝子異常の1種にNon-sense mutationによるpre-mature stopがある。Pre-mature stopが存在する遺伝子から転写翻訳される異常蛋白質の発現を防ぐ生体防御機構の1つにmRNAレベルでのNonsense-mediated Altered Splicing (NAS)が存在する。NASによりpre-mature stopが生じたmutationを含むexonを取り除かれる。1つのexonが除かれることにより、翻訳された蛋白質は完全

長ではないものの、機能がある程度保持される可能性がある。CGDにおけるNASを発見したので、その詳しい解析を行った。

4. 8 病変発現機序分野

I. タイ国におけるヒト・パピローマウイルス感染症に関する研究

陰茎癌の発病率の頻度の最も高い地域は、アジア、アフリカとラテンアメリカである。ヒト・パピローマウイルス (HPV) 感染と陰茎癌との関連性に関するタイ国における報告はなされていない。本研究では、タイ国北部で陰茎癌とHPVの有病率の関係を決定し、HPVのジェノタイプを検索し同定した。陰茎組織（悪性腫瘍65症例、前癌1症例および良性腫瘍22症例）の88の症例の病理組織標本を用いて、HPV感染と陰茎癌の関連性を決定するために研究を行った。インサイト・ハイブリダイゼーション (ISH) 法は、HPV-DNAの組織内におけるウイルスの局在を検索するために用いられた。HPV-DNAの検出のためにPCRの手法を用いた。さらに、DNA塩基配列を検索して、HPVのジェノタイプを決定した。HPV-DNAは陰茎癌の症例で、ISHとPCRを使用して、それぞれ53.8%と81.5%検出された。発癌のためのハイリスクなHPV-16は、陰茎癌に伴う最も一般的なHPVのジェノタイプであると報告されている。本研究では、1症例のみが見出された。次に一般的なハイリスクのHPVのジェノタイプは、HPV-18で (32.3%のシングル感染と23.1%の多重感染) 55.4%見出された。続いて、ローリスクHPV-6で (24.6%のシングル感染と18.5%の多重感染) の43.1%が多く見出された。この研究において、陰茎癌がHPV-DNAと非常に相関しているとわかった。具体的には、ローリスクのHPV-6とハイリスクのHPV-18の感染は、タイ国北部地域における特徴的なHPVジェノタイプであった。(文献：Senba M, Kumatori A, Fujita S, Jutavijittum P, Yousukh A, Moriuchi T, Nakamura T, Toriyama K.: The prevalence of human papillomavirus genotypes in penile cancers from northern Thailand. J Med Virol. 2006 Oct;78(10):1341-1346.)



陰茎癌の組織中に存在しているヒト・パピローマウイルス（黒色）、インサイト・ハイブリダイゼーション法。

Ⅱ．タイ国におけるB型肝炎ウイルスのジェノタイプに関する研究

異なった民族の地理的移動がさまざまなB型肝炎ウイルス（HBV）ジェノタイプの分布により推察可能となる。ジェノタイプにより病原性および治療法などにも差がある。通常は、タイ国でのHBVのジェノタイプの感染は、CとBのジェノタイプがあり、Cが主要なジェノタイプとして報告されていて、比較的良好な予後を示す。しかしながら、HBV遺伝子タイピングの報告が、タイ国北部でなされていなかった。我々は、1998年から2000年間、216人のHBs抗原陽性血清サンプル（164人の男性と52人の女性（16-52歳））は、タイ国北部の4つの行政区で、志願した供血者から採取された。A-Fジェノタイプを特定するPCRとジェノタイプに特有のプライマーを用いて行った。本研究では、ジェノタイプCが、タイ国北部において、（89.3%）で非常に優性であることがわかった。タイ国の他の地域の報告では、（50-65%）であった。ジェノタイプB（7.4%）、BとCの重感染症（1.9%）およびジェノタイプA（0.5%）であった。（文献：Jutavijittum P, Jiviriyawat Y, Yousukh A, Kunachiwa W, Toriyama K.: Genotypes of hepatitis B virus among voluntary blood donors in northern Thailand. *Hepatol Res.* 2006 Aug;35(4):263-266.）

4. 9 感染症予防治療分野（熱研内科）

当分野においては、呼吸器感染症およびエイズにおける起炎微生物の伝播様式を解明し、その予防戦略の構築をめざして、臨床および動物実験による研究を展開している。

I. 呼吸器感染症に関する研究

当分野は、肺炎球菌は国内においても、熱帯地においても重要な呼吸器起炎微生物であることを示してきた{Yoshimine et al., 2001, *Am J Trop Med Hyg*, 64, 172-7}。日本国内の市中肺炎において起炎菌となった肺炎球菌を20施設から114株を集め、この血清型と薬剤耐性遺伝子について検討した。この結果約88.6%と高率に*pbp* 遺伝子変異を認めた。また、血清型は多くが23価莢膜抗原ワクチンに含まれているものであり、その効果が期待できると結論づけた{Oishi et al., 2006, *Respirology*, 11, 429-36}{Qin et al., 2006, *Epidemiol Infect*, 134, 1188-94}。また、国内で唯一使用可能な23価肺炎球菌莢膜抗原ワクチンの効果について、ハイリスク群である慢性呼吸器疾患の患者84人において4つの血清型の血清中IgGの経時的変化を用いて検討した。その結果対象者の約3割がlow-responderであり、またresponderにおいてもワクチン投与によるIgG抗体価は、肺炎球菌の血清型によっては、2年後までにワクチン接種前の値まで低下する傾向にあり、このような患者における再接種の必要性が示唆された{Chen et al., 2007, *Clin Vaccine Immunol*, 14, 139-45}。

呼吸器感染症の予防として、もう一つの主要な起炎菌の一つである、インフルエンザ桿菌については、3種のnon-typable株の死菌を経気道的に投与し、株特異的な免疫誘導をマウスモデルを用いて証明した{Koyama et al., 2007, Tohoku J Exp Med, 211, 63-74}。また、nontypeable *Haemophilis influenzae* (NTHi)の粘膜免疫の形成に関する研究では、その外膜蛋白を繰り返しマウスの気道内に投与することで成熟dendritic cells (DCs)を肺内リンパ節に誘導した。これによって気管支肺胞洗浄中のIgAを増加させ、マウス感染実験での菌のクリアランスを改善させることに成功した{Kurita et al., 2006, Vaccine, 24, 5896-903}。

また、当教室員の海外における研究活動では、アポトーシス細胞の貪食除去に着目した炎症終息機構の研究で、statinがそれを増加させること、またATP binding cassette transporter 7がアポトーシス細胞の貪食に重要であることを見いだした{Morimoto et al., 2006, J Immunol, 176, 7657-65}{Jehle et al., 2006, J Cell Biol, 174, 547-56}。また、ナイジェリアの小児結核の診断法において、従来よりその感度と特異性の低さが指摘されてきた皮内テストと比較して、QunantiFERON Gold (結核菌抗原刺激によるリンパ球のIFN- γ 産生を測定する方法)の有用性を確認した{Nakaoka et al., 2006, Emerg Infect Dis, 12, 1383-8}。

II. HIV・エイズ研究

当分野ではタイ国立衛生研究所との共同研究として、北タイにあるランパン病院にてHIV感染者およびその配偶者を対象にしたコホート研究を立ち上げ継続維持している。これまで同コホートに参加した1000名以上のHIV感染者およびエイズ患者より臨床検体および臨床情報を収集し臨床疫学研究を遂行している。平成18年度は、非結核抗酸菌と類鼻疽に重複感染したHIV感染者の症例が報告された(Pumpradit et al., Asian Pac J Allergy Immunol. 2006 Dec;24(4):239-43)

4. 10 エイズ・感染防御分野

当分野では、ヒト免疫不全症ウイルス1型(HIV-1)の感染に影響する新規因子の同定を行っている。平成18年度の研究内容は以下の通りである。

I. CD4非依存性HIV-1感染に必須な宿主細胞因子

多くのHIV-1は、CD4およびケモカインリセプター(CXCR4またはCCR5)を認識して感染する。しかし、CD4を必要とせずケモカインリセプターのみを認識し感染するHIV-1が存在する。他の多くのレトロウイルスは、ケモカインリセプターのような多重膜貫通型の蛋白質のみを認識し感染すること、サル免疫不全症ウイルスの場合、CD4を必要としない株が多く見つかるこ

とから、このようなCD4非依存性HIV-1は、CD4依存性HIV-1の先祖型と考えられている。

我々は、CXCR4のみを認識し感染するHIV-1 mNDK株を用い研究を行っている。HIV-1 mNDK株を様々な細胞に接種し、それら細胞の感染感受性を解析した。結果、HeLa細胞がHIV-1 mNDK株に対して感染耐性であることがわかった。抗CXCR4抗体を用いたFACSにより、HeLa細胞はHIV-1 mNDK株の感染受容体であるCXCR4を発現していた。HIV-1 mNDK株に感染感受性の293T細胞とHeLa細胞とのハイブリドーマ細胞は、感染感受性であった。これらの結果は、HeLa細胞が、HIV-1 mNDK株感染に必須な未知の細胞因子を欠損していることを示している。この成果を第54回日本ウイルス学会において発表した。

II. geranylgeranoic acid (GGA)によるHIV-1感染抑制

HIV-1は、ウイルス膜と細胞膜の膜融合によって細胞内に侵入する。そのため細胞膜脂質組成の変化が、HIV-1感染に影響すると考えられる。ビタミンA類自体であるfenretinideは、細胞膜脂質の1種類であるセラミドを増加させることによってHIV-1感染を抑制することが報告された。しかし、fenretinideは、肝臓繊維化や夜盲症などの副作用のため臨床応用は難しい。そこで、このような副作用のないビタミンA類自体であるGGAのHIV-1感染に及ぼす影響を解析した。その結果、GGAは、fenretinideと同様にHIV-1感染を抑制することがわかった。この成果を特許申請し、第54回日本ウイルス学会において発表した。

4. 11 生物環境分野

当分野は、蚊を中心とした病害昆虫の生理、生態、防除及び分類と、昆虫媒介性疾患の疫学について、臨地研究を重視した基礎的及び応用的研究を行っている。

I. ベトナムにおけるデング熱媒介蚊の浸襲実態の精査

媒介蚊の分布域拡大に伴い地球規模で拡がりつつあるデング熱に有効な防除手段は今のところ媒介蚊対策のみであり、媒介蚊の生態学的基礎研究は必須である。ベトナムにおいて、主要発生源のひとつである古タイヤの集積状態と媒介蚊の発生頻度や密度を、全土に亘って調べる計画を立て、H18年度は北部の調査を実施した。北部で採集されたシマカ幼虫は、すべてヒトスジシマカであった。即ち、94地点からサンプリングした193個の有水タイヤの内188個で幼虫が採集され、165個のタイヤからヒトスジシマカが採集された。オオカ、チビカ、ハマダラカ、イエカ3種、合計7種を得た。最近10年のベトナムの発展に伴う自動車の普及と古タイヤの増加は、北部ベトナムにおけるネッタシマカとヒトスジシマカの置き換わり現象と大いに関係

しているのではないかと考えた。また、古タイヤの集積は地域を問わずみられる事から、この調査法がデング熱媒介蚊の分布調査法の世界標準として適用可能であることが示唆された。周辺の環境情報を地理情報と共にデータベース化し、全土の調査を終えた時点で、デング熱を媒介しているネッタイシマカとヒトスジシマカの精細な生態マップを完成させる。

II. 感染症媒介蚊の化学的防除における環境負荷を小さくするための技術開発

殺虫剤による化学的防除は、環境負荷が深刻でない限り捨てられない有力な感染症媒介蚊防除アプローチである。環境への負荷は、散布する殺虫剤量に依存する。そこで最少散布量で良好な殺虫効果を挙げ得る技術の開発をめざし基礎的な実験研究を行った。これまでに殺虫エアゾールの場合、粒子径制御が虫体への付着量および効力に影響を与えることを報告しているが、H18年度は、粒子径の異なるエアゾールにおいて、直撃試験によりイエバエ、またはチャバネゴキブリ虫体への付着量を変動させた場合の効力を比較した。その結果、粒子径の大きいエアゾールでは、小さいものと比較して、同一噴射時間での試験では付着量が高いため効力も高くなったが、付着量が同一となるように噴射時間を調節した試験では、粒子径の小さいエアゾールの方が高い効力となった。これらの結果から、付着量が同一の場合、小粒子が多数(虫体へ満遍なく)付着した方が、大粒子が少数(虫体へまばらに)付着するより効力が高く、粒子径の大きいエアゾールでは効力に関与しない場所への付着量が多いと考えられた。また、虫体表面上には感受性の高い部位が存在し、虫体へ満遍なく付着させることでその部位への付着確率が高まったと考えられた。従って、虫体への付着量のみでなく、虫体上の粒子付着部位も殺虫エアゾールの効力に大きく影響を与えることが示唆された。

III. ミジンコによるデング熱媒介蚊の生物学的防除： *Mesocyclops* 6種の比較実験

蚊幼虫を捕食するミジンコの仲間(橈脚目(コペポード)の *Mesocyclops* 属)をデング熱媒介蚊の天敵として効果的に導入するために、ベトナムで普通に見られ、デング熱媒介蚊防除に使用されている *Mesocyclops* 属の5種と、日本の *Megacyclops viridis* 雌の増殖能力と生存期間について比較研究を行い、生物学的防除に用いる候補としての適性を評価した。その結果、どの種の雌も多回交尾することが確かめられた。更に多回交尾がすべての供試種の増殖能力を高めること、さらに *M. aspericornis* においては、増殖期間をも延長することがわかった。雌の生存期間は種によって様々であったが、*M. aspericornis* が最も長く、次いで *Megacyclops viridis* , *M. woutersi* , *M. pehpeiensis* , *M. ogunus* , *M. thermocyclopoides* の順であった。30日間の乾燥条件下での保存後、既交尾の *M. aspericornis* 雌は、通常飼育の雌よりは産卵数の減少が見られたものの、新たな交尾を必要とせずに増殖を開始した。また、30日間の保存条件は次世代の増殖能力に影響を及ぼさなかった。これらの結果から、*M. aspericornis* や *M. pehpeiensis* , *M. wout-*

ersi の増殖能力が総合的に評価して高く、導入天敵として有望であろうと考えた。

IV. ベトナムにおけるマラリア媒介蚊の分類、生理・生態及び遺伝

マラリアを媒介するハマダラカには形態のみでの種同定が不可能な同胞種が多く存在し分類や効果的な防除対策を難しくしている。ベトナムにおける主要マラリア媒介蚊である *An.leucosphyrus* グループについて、分子生物学、遺伝学からのアプローチを含めた精細な種の実態解明と、種間の生理・生態的属性の再吟味、及び系統進化の考察を開始した。ベトナム南部 Binh Phuoc 省 Dong Phu District のハマダラカ相を把握するために、代表的な繁殖環境から幼虫の網羅的な採集を行った。採集した幼虫は室内環境で成虫まで飼育し、羽化個体の 1) 幼虫および 2) 蛹の脱皮殻、3) 成虫の一連の標本シリーズを作成した。標本を詳細に検討したところ、*Anopheles agyropus*, *An.campestris*, *An.nitidus*, *An.philippinensis*, *An.vagus* ならびに、東南アジアにおける最も重要なマラリア媒介種のひとつである *An.dirus* を含む *dirus* complex が確認された。いままで、分子生物学的解析により、ベトナムには、*dirus* complex のうち、狭義の *A.dirus* (*A.dirus* A) のみが分布するとされていた (Manguin et al. 2002, Trung et al. 2004)。しかし最新の文献 (Sallum et al. 2005, Rattanakul et al. 2006) に従い、今回採集された雌成虫標本を調べると、Raparar subgroup の *An.macarthuri* と同定される標本が複数個体確認された (ロンドン自然史博物館の R. E. Harbaach 博士にも確認済み)。このことから、ベトナムにおける *Leucosphyrus* Group の分子生物学的・形態分類学的洗い直しが必要であることが明らかになった。

V. 日本でウエストナイル熱を媒介するイエカ類の生態学的研究

近年、ウエストナイルウイルスの日本への侵入が警戒されている。本ウイルスは鳥類と蚊の間で感染環が維持されるため、鳥嗜好性のある蚊が重要なベクターとなり得るが、その調査法は確立されておらず、どの種類の蚊が流行に関与するかは明らかでない。そこで、1) ニワトリバイトトラップの開発、2) チカイエカの地上における越冬ステージの検討、3) 吸血活動を引き起こす低温限界温度の解明、を試みた。1) では、生きたニワトリをプラスチックプレートの上に固定し、その上部をナイロンケージで覆い、プレートとネット間に隙間を開け、蚊が侵入できるようにした鳥嗜好性を証明できるトラップを試作、2 月に医学部キャンパス内に設置した。チカイエカおよびトラフカクイカが採集され、人嗜好性が強いと考えられていたチカイエカが、冬季に野外で鳥から吸血することが証明された。また、吸血嗜好性の判っていなかったトラフカクイカも鳥嗜好性であることが裏付けられた。この方法によりウエストナイルウイルスのブリッジベクターの特定が可能となった。2) では、地上におけるチカイエカの発生活消長を 11 月より 3 月にかけて調査した。オビトラップ、雨水マス、CDC 吸引式ドライアイストラップで幼虫、成虫の捕獲を試みた。卵塊は一度も発見されなかった。幼虫および蛹は雨水マスで

12月中旬まで採集されたが、それ以降は全く観察されなかった。しかし、成虫は冬期を通してドライアイストラップで採集された。チカイエカが冬期にウエストナイルウイルスの感染環を持続させる媒介蚊として重要な役割を果たすことが判明した。3)では、ニワトリトラップを19:00に設置して、21:30と0:00に蚊の数をカウントした。設置地点の気温条件を10分おきにデータロガーで記録し、気温の期間平均値と採集数の関係を検討したところ、低温限界温度は約8℃で、11℃を超えると飛来数が増えることが分かった。この値から、チカイエカが冬期に地上で活動する地域を推定することができ、また、ロシア沿海州などのウエストナイル浸淫地域から飛来した渡り鳥（冬鳥）を、チカイエカが吸血するリスクを検討できるようになった。

4. 12 社会環境分野

当分野では、熱帯地域を中心とする開発途上諸国・地域のさまざまな社会環境が、いかに保健・医療や民生福祉の問題に関わるか等について、社会科学および人文科学を含む学際的接近を図る試みを実施している。

また、開発途上国を対象とした国際協力の手法が、いかに研究所全体における各分野の有機的つながりに寄与し得るかについても種々の取り組みを行っている。とりわけ情報・資料の集積や活用および、それらに対する専門的解析や対応が中心的課題である。

I. 研究活動

当分野においては、地域保健・医療領域におけるPHCや国際保健の向上に資するさまざまな研究活動が試みられてきた。具体的には以下に掲げるようなテーマのもとに、基礎研究および応用研究が開始され、現在それぞれに関する種々のケーススタディを行っている。

- 1) 熱帯における疾病の出現頻度、範囲、組み合わせなどを規定する社会的背景に関する解析研究
- 2) 熱帯地域における人間社会環境による疾病への影響及び効果的予防法の究明
- 3) 「人間の安全保障」に関する栄養、経済コスト、教育、環境の視点からの尺度、標準化
- 4) 地域医療および国際保健事業の実施面からみた感染症対策に関する研究
- 5) 日本政府ODAにおける医療サービス事業の量的、質的特徴に関する研究
- 6) 熱帯医学に関する情報集積システムの開発（地域別、疾病別、行政形態別）
- 7) 危機管理を含む熱帯地域派遣者のための医学研修プログラムの改善に関する調査・検討
- 8) 熱帯アジアにおける感染症の疫学と行政対応の比較研究（SARSおよび鳥インフルエンザを例として）

9) 衛星データを用いたリモートセンシング，および簡易GIS手法による環境変動と感染症との関係に関する研究

特に，衛星データとGISによる疫学的，人文的調査・解析では，途上国のGISマッピングにおける高解像度衛星データの適用についての検討や，デング熱流行に影響を与える地域要因の検討を行うなど，新しい技術の保健医療分野への応用研究を積極的に行っている。

II. 共同研究

平成18年度における熱帯医学研究所共同研究事業による共同研究活動は，次のとおりである。

1) 熱帯医学・国際保健から見たミレニアム開発目標（MDGs）対策

21世紀の国連の役割に関する明確な方向性を提示採択された国連ミレニアム宣言と，1990年代に開催された主要な国際会議やサミットで採択された国際開発目標を統合し，一つの共通の枠組みとしてまとめられたミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）には，8つの目標と18のターゲットが掲げられている。これらの目標の中には第6の「HIV/AIDS, マラリアその他の疾病の蔓延防止」を始めとする多くの熱帯医学や国際保健の立場から取り組むべき課題が見出されるが，これまでのMDGsに対する評価は，経済的側面のみが強調され，医学や自然科学的見地からの際立った分析・評価がなされていなかった。このことから，本研究ではMDGsに盛られた感染症対策・予防への背景や，その詳細を明らかにして評価することを目的とした。

その結果，国際機関や我が国中央政府で働く現役職員の視点や，その他種々のデータを活用し，MDGsにおける感染症対策・予防の現状見直しに資することができた。このことで，国連機関においては，熱帯病への理解や感染症対策を論じる場合や意思決定に参画する場合には，説得できるコミュニケーション能力と医療臨床の現場からの必要性を結びつける専門性が具体的にどう必要かについて実証的に知ることができ，それを現役職員に提言した。

2) 感染症の対策・予防と社会環境要因の解析

学際的アプローチにより，新興・再興感染症およびその延長にある新疾病の出現に対し，コミュニティを中心とする人間集団と行政がどのように対応して，治療や予防対策を講じ，関わったかの事例を可能な限り集積し，マトリックスを作成した。具体的には，新たに出現，もしくは発生した感染症を，①病原体の同定が分子・細胞レベルで現に行われている段階のもの，②疫学分野で新出現の感染症に関し，病理レベルでの解明が進んでいる段階のもの，③治療・予防の効果に対してコミュニティや行政が対応しているもの，の3つのレベルに分類し，多くの事例を列举することで，どこに類似性や相違があるかを調べ，その背景についても検討した。

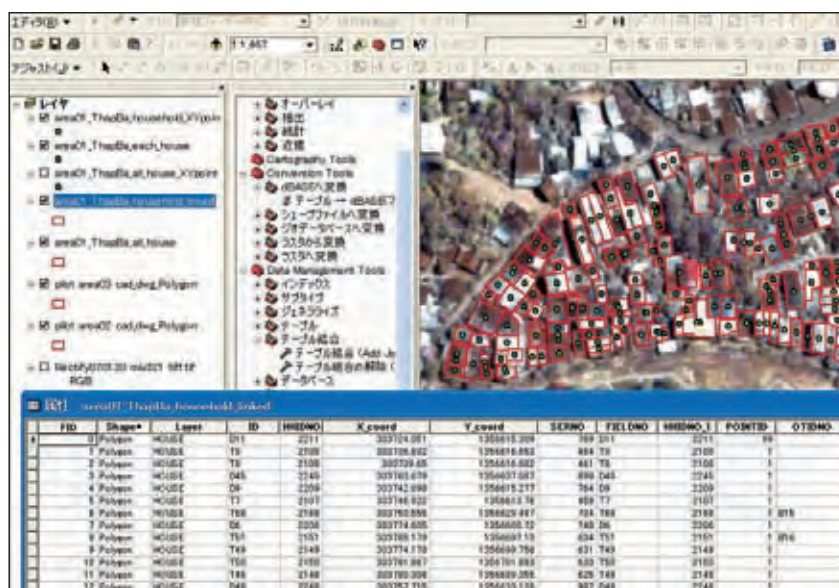
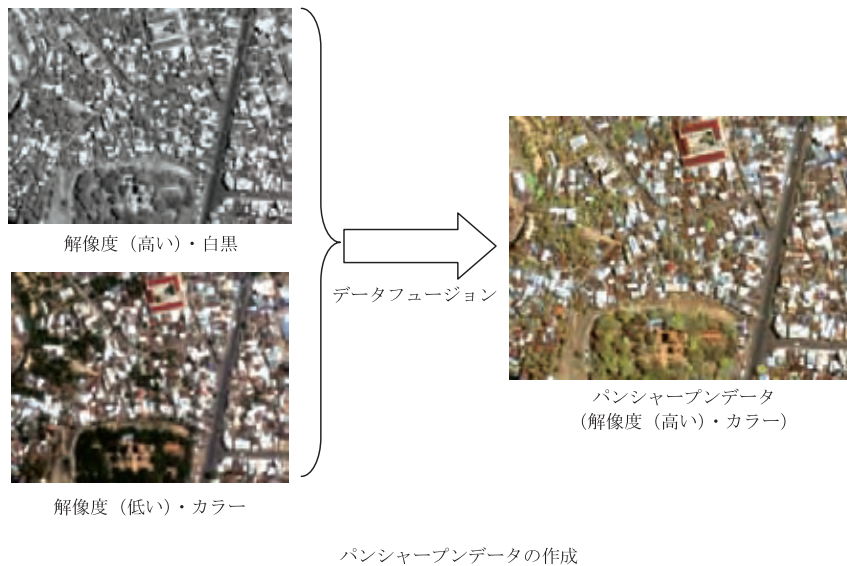
その結果，新興・再興感染症に対する予防・対策に関し，現行システムの問題点や改善点

を判明させることができたほか、経済先進国と開発途上国では全く異なる感染症に対する反応や予防対策は、実は共通点も多いということをケーススタディによって指摘できた。

Ⅲ. 研究集会

研究は成果を社会に還元してこそ意義があるものであるという理念のもと、熱帯医学研究所共同研究事業において、今年度は「社会環境の変化と感染症および対策における技術協力の可能性」というテーマで、研究者のみならず一般市民も含めて研究集会を開催した。

この研究集会では、緊急支援も含め高頻度で発生することが予想される感染症にどのような技術援助が可能か、あるいは必要か、参加者が経験した事例を紹介するとともに、シミュレーション、および検討を行った。



高解像衛星データからの GIS データ作成例

4. 13 疾病生態分野

I. 研究活動

住血吸虫症，マラリア，シャーガス病，デング熱の免疫遺伝学的な研究を各研究グループに分かれて推進した。

- 1) 住血吸虫症研究では江蘇省寄生虫病研究所のCuangxin Yu博士がシグナルトラップ法を用いて診断あるいはワクチン候補分子となりうるcDNAクローニングを行い、10種以上のクローンを得た。その構造解析により、住血吸虫に特有と思われるシグナル陽性の遺伝子群の存在を示した。江西省寄生虫研究所のHonggen Chen博士はCOE研究員として約1年滞在し、感染マウスの脾細胞よりB細胞ハイブリドーマを多数作成し、その中から成虫の消化管関連抗原 (Gut Associated Antigens) に反応する抗体を産生するハイブリドーマを8種樹立した。これらを組み合わせて血液中の循環抗原を検出するELISAシステムを完成した。これを用いれば活動性の住血吸虫症を診断することが可能であることを中国の流行地で採取した虫卵陽性あるいは陰性の患者血液で証明した。
- 2) マラリア研究ではCOE研究員の石井が無細胞系組み換えタンパク産生系を用いて理論的にGPIアンカータンパクであることが予想される遺伝子配列をもとにcDNAを調整し、実際の発現タンパクを得ることに成功した。このうちの数種は実際にガーナの流行地の患者血清と反応性を示した。また大阪工大の田辺教授との共同研究としてMSP-1遺伝子多型解析を行い、その多様性にアジア域内でも地域差の存在することが示された。
- 3) シャーガス病研究では、ボリビア，パラグアイとの共同研究を継続し，パラグアイの原住民における人類遺伝学的な研究の副産物として原研新川教授の発見した耳垢遺伝子のアジア型の頻度が予測以上の高頻度であることを報告した。この遺伝子はアポクリン腺分泌能と関連しており，今後感染症における役割についても解析する予定である。ボリビアの臨床グループ（西沢医院，日本病院外科，心臓病院，および熱帯病研究所CENETROP）との共同研究として3つの特徴的な病型の遺伝解析研究を進めているが，これらの患者の感染しているクルーストリパノソーマ原虫のDNAを患者の末梢血サンプルからPCR法により検出することができることがわかった（投稿準備中）。中南米では地域によって遺伝子型の異なる3つの系統の原虫が存在することが知られているが，これらのグループの原虫株を多数収集し，培養後そのタンパクをプロテオーム解析することにより，全体として30-50%ものゲノム多型を示すことがわかった（Jiang-Bing Mu, Toshio Sone et al.）。
- 4) デング熱研究では，ベトナムのパスツール研究所のウイルス部門，周辺の小児病院との共同研究として，大規模な患者－対照研究を続行し，2002年-2003年の流行と2004-2005年の流行では，ウイルスの血清型にあまり相違がないが2次感染の率が上昇していることが

わかった。健常対照群もふくめて約千名のDNAサンプルを用いて、候補遺伝子あるいはゲノムワイド遺伝子解析を行い、重症化に関連する遺伝子多型を数種検出した(投稿準備中)。

II. 教育活動

1) 医学研究における倫理に関する国際研修コース

平山とベルゲン大学のReidar K. Lie教授との共同主催で、3日間の研修コースを開催し、熱帯医学修士課程、熱帯医学研修課程、JICA研修生のほか、全国から多数の参加者を集めた。全国共同利用の研究集会としても開催した。

2) 世界保健ニーズに応える医薬品研究開発ディプロマコース

平山がコースディレクターとして開催した5週間のコースで、約30単位分の講義と実習を行った。外来講師約50名でそのうち20名は外国から招へいした。また国内講師は連携した東大薬学研究科や京大などから招へい、さらに製薬企業4社から各専門家に講義を依頼した。連携した中国、タイ、コロンビアの大学を中心に、ベトナム、マレーシア、台湾からも参加者があった。7つのモジュールについて試験を行い、合格したのち、最終的に長崎大学からディプロマを授与した。

III. 社会活動

1) 日本熱帯医学会の機関誌Tropical Medicine and Healthの編集長、事務局を運営した。米国の医学図書館へのPubMedへの掲載申請を8月に行ったが、掲載論文数に不足があるとして見送りとの返事を受けた。

2) 日米医学協力プログラムの寄生虫病部会の日本側部会長を拝命し、合同会議を東京で開催した。

3) 3日間の医学研究における倫理に関する国際研修コースを開講し、約60名の内外の参加者を集めた。

5 附属施設

5. 1 熱帯性病原体感染動物実験施設

本施設は熱帯性病原体に関する研究に必要な動物実験および病原体の株保存などを行うことを目的にして、主に本所の研究者が利用している。

周辺地域への騒音軽減のために施設内への空気の入入口（給気口）ならびに排出口（排気口）に防音用カバーを平成18年5月に取り付けた。また同じ目的のために8月に1階屋上の空調室外機2台を取り囲むように遮音壁を取り付けた。遮音壁を設置したことにより地上から1階屋上への屋外鉄製梯子段を撤去した。長期間使用していなかった1階機械室内の鉄製梯子を9月に整備して1階屋上へ屋内から上がることが可能となった。11月に地下重油槽ならびに配管の漏洩機密検査をおこなったが、問題はなかった。この検査は今年度から毎年おこなわれることになった。平成19年2月は重油槽ならびに配管の漏洩機密検査が今後容易におこなえるように重油槽の改修工事をおこなった。昭和62年に増設した3階の4室の天井ならびに廊下天井内に敷設された給気と排気両者のダクト内の清掃を建設以来はじめて平成18年11月に専門業者がおこなった。同時に301号P3室のホルマリン燻蒸もおこない、安全キャビネットほか室内のHEPAフィルターの交換をおこなった。なお4月には1階機械室と2階の飼養室ならびに1階屋上のHEPAフィルターとプレフィルターの定期的交換を実施した。麻薬及び向精神薬等取締法の改正（平成19年1月1日施行）により、ケタミン用麻薬保管庫を平成19年3月に施設内に設置した。

平成14年度に開始したナショナル・バイオ・リソース・プロジェクト（NBRP）第I期が本年度に終了した。業務は「病原性原虫の収集、株保存と分析、その提供」であった。

研究活動

I. 研究内容

平成18年度（2006）施設利用の分野別研究課題

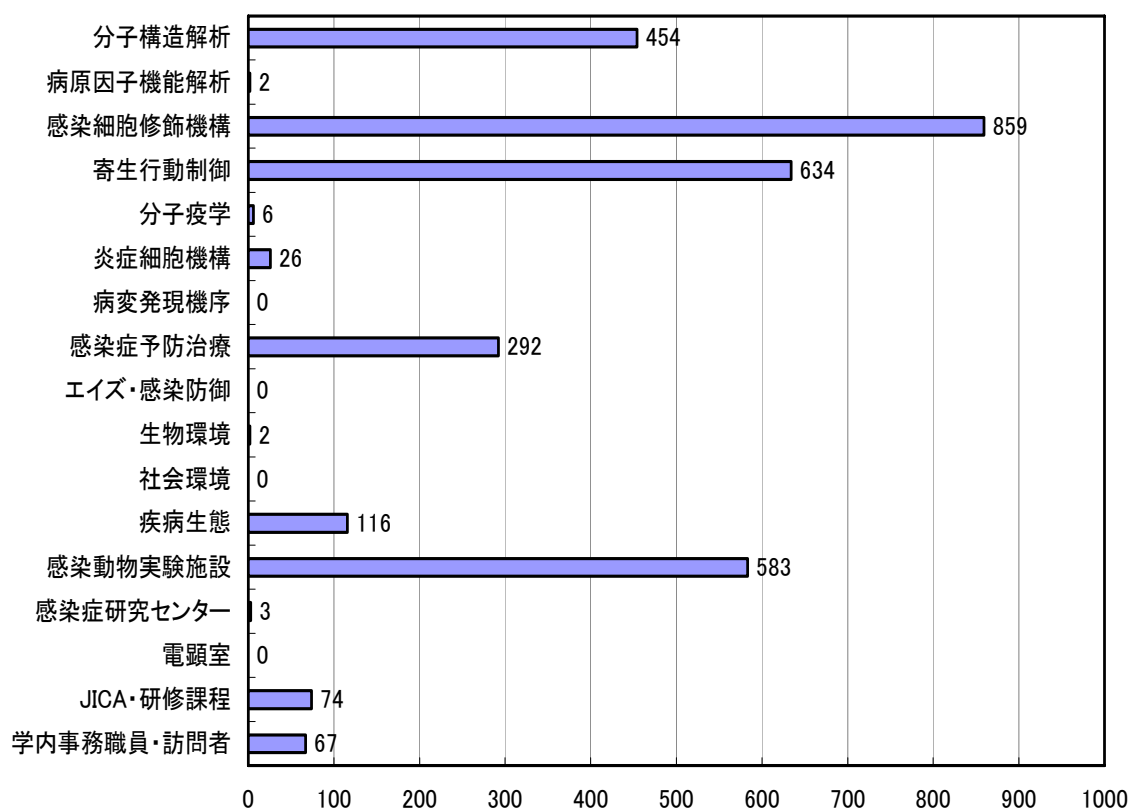
分 野 名	研 究 課 題
分子構造解析	フラビウィルスのキメラウィルスワクチン効力試験
病原因子機能解析	ウサギ腸管結紮ループ法による下痢活性の測定
感染細胞修飾機構	マラリアに対する感染防御機構の解析
寄生行動制御	糸状虫感染幼虫の血清への走化性運動発現機序 住血吸虫幼虫の遊泳侵入行動制御機序 糸状虫（ <i>Brugia pahangi</i> ）の仔虫、幼虫および親虫の凍結保存条件の検討
炎症細胞機構	マウスを用いたNADAPH オキシダーゼの解析
感染症予防治療	マウス肺炎モデルを用いた炎症終息機構の解析
疾病生態	日本住血吸虫症ワクチン開発におけるアジュバント効果の検討

Ⅱ 利用状況

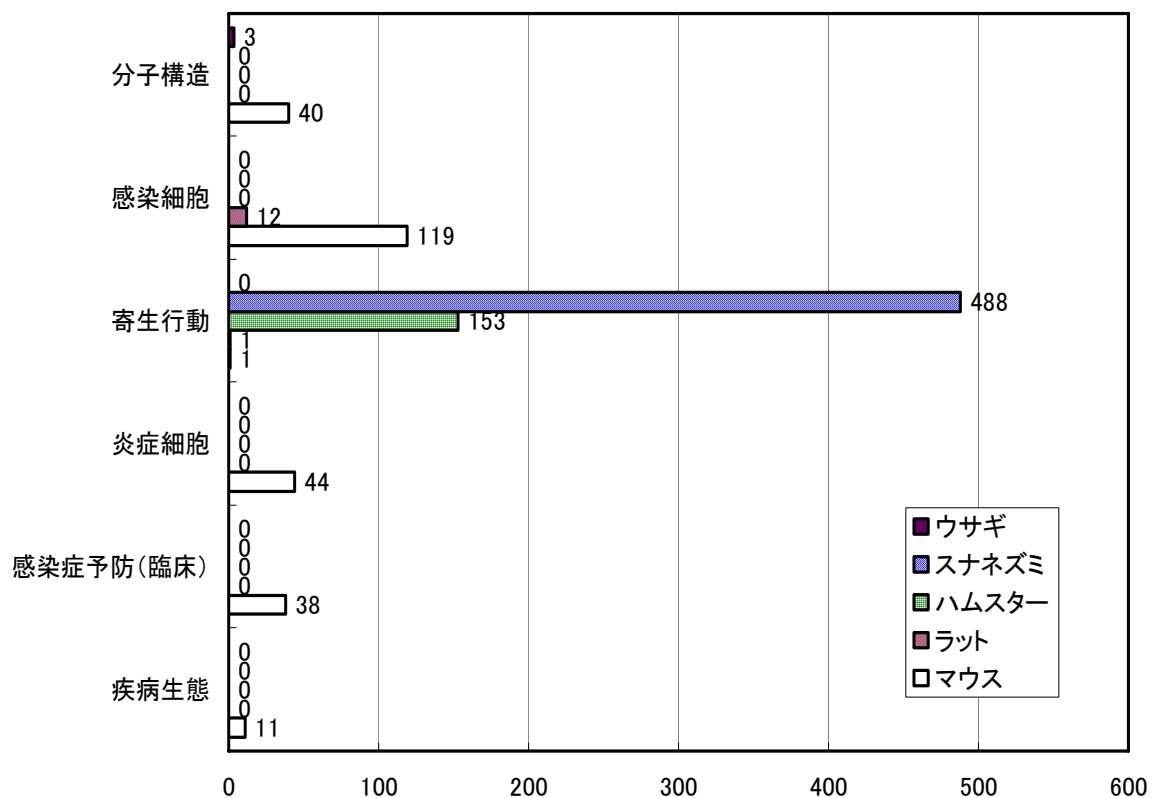
(1) 職務別利用者数（のべ数）

区 分	職 務	利用者数
研 究 者	教官・医員，研修医，技官（学内）	1,629
	大学院生，学部学生（学内）	549
	学外の研究者（学生を含む）	17
	小計	2,195
研究補助者	事務職員（学内）	1
	非常勤職員（学内）	925
	小計	926
合計		3,121
業者・訪問者		3
総計		3,124

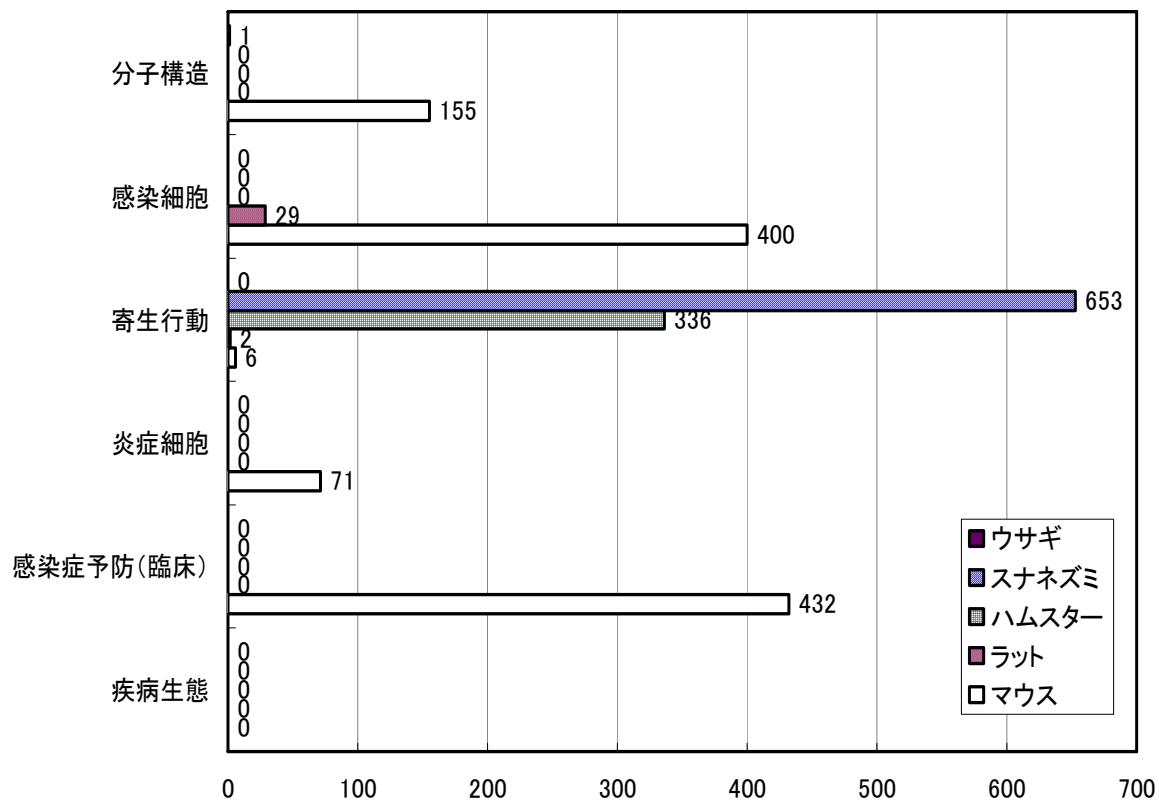
(2) 18年度分野別利用者数（のべ数）



(3) 18年度分野別1日あたりの動物種別飼養頭数



(4) 18年度分野別実験に供した動物種別頭数(実数)



5. 2 熱帯感染症研究センター

熱帯感染症研究センター (Research Center for Tropical Infectious Diseases, RECTID) は1974年に設置された熱帯医学資料室を前身とし、1997年の熱帯病資料情報センターへの改組を経て、2001年4月に新設された。熱帯感染症の流行は、熱帯地特有の自然条件から社会経済的条件まで、複雑な要因が絡み合っている。RECTIDは、新しい生態学的・疫学的・情報学的方法論を用いてこの複合要因を世界的な規模で解析し、成果を途上国における熱帯感染症の流行予測や予防制圧計画に還元することを使命とし、以下の三つの任務を遂行した。

I. 熱帯病に関する「博物館・資料館」としての機能

研究所の改築に伴い、展示室が3階から1階へ移転した。熱帯病に関する概説パネル、寄生虫、媒介昆虫、危険動物などの標本、貴重図書・映像資料の移設作業を行った。新展示室を「熱帯医学館」と命名した。「熱帯医学館」では、少人数に対する視聴覚コーナー、録画用スタジオ・セットを設け、高校生の学習などに利用されている。

移転作業終了後の5月より12月31日までの来館者数は274名であった。このうち課外授業で訪れた21名の高校生は、熱帯医学の講義を体験している。

II. 「熱帯病情報センター」としての機能（熱帯医学情報の整理・収集、分析、発信）

熱帯医学研究所のホームページの充実、また、全国共同利用研究施設としての共同研究・研究集会を通して、国内外のネットワーク化に努めた。さらに、過去の貴重な資料をPDF化し、公開する作業を行った。

（長崎大学学術研究成果リポジトリ：<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/>）

III. 「研究センター」としての機能（熱帯感染症に関する総合的研究推進の核）

RECTID自身が多様な人材を揃えて熱帯感染症の生態学と疫学を推進させ、さらに、国内外の研究者と協力して地球規模で熱帯病の研究と対策を推進するプロジェクトを構築し、推進、サポートした。

1. ケニア拠点の活動

（別項 → ケニア拠点）

2. その他の海外活動

ラオス、ベトナム、インドネシア等のアジア各国、タンザニア等の東アフリカを中心に、フィールド研究を展開しつつ、感染症伝播の生態疫学モデル構築、病原体宿主およびベクターの生態学的生物学的研究を行った。

(参考文献：Tropical Medicine and Health 43: 117-123; BMJ (British Medical Journal), doi: 10.1136/bmj.38693.465023.7c, など)

3. 複合要因の解析方法論の開発と応用

疫学・データ解析の専門家である本田助教授，西浦助教授が加わり，感染症伝播への数理モデルの応用など情報学的方法論の基盤を構築した。

(参考文献：Southeast Asian J Trop Med Public Health 37: 673-680; Public Health 120: 444-447, など)

5. 3 共同研究室

本研究所には多くの共同利用研究機器があり，その利用は所内に止まらず全国の共同研究者にも広く開放され，多彩な研究プロジェクトの推進に役立っている。共同研究室は大きく四つの部屋から成り立っている。一つは電子顕微鏡室，P3レベル室，細胞培養実験室それから分子生物実験室である。現在の主な機器・設備は透過電子顕微鏡・走査電子顕微鏡(日本電子株式会社)，超ミクロトーム (LEICA)，コンフォーカルレーザー顕微鏡 (LEICA DMIREZ)，フローサイトメーター (ベクトン)，画像解析システム (浜松フォトニクス)，DNAシーケンサー (Perkin Elmer)，DNA / RNA抽出機 (キアゲン)，全自動二次元蛋白分離システム (ベックマン)，二つのP3実験室である。従来よりの機器も含めて，広範囲な細胞生化学実験および組織化学実験が，多くの所内外研究者により毎日頻繁に活用されている。

I. 電子顕微鏡（走査および透過）を用いての主な共同研究

- * 新種ウイルスの細胞内解析 (C6/36 蚊のクローン細胞使用)
- * 新種ウイルスのネガティブ染色による解析
- * 新種ウイルスの感染細胞内増殖形態を解析
- * チクングニアウイルス感染細胞内増殖形態の解析
- * ウエストナイルウイルスの精製状態の検証，ネガティブ染色にて
- * JEVのpH変化に伴うスパイク蛋白の形態変化とウイルス抗体蛋白の結合をネガティブ染色で解析
- * 連鎖球菌の濾液による緑膿菌阻害の解析
- * ベーターノダウイルスの遺伝子操作によるコア欠落の微細構造観察をネガティブ染色で
- * 活性化好虫球の付着底面の形態解析を走査および透過電顕を用いて

Ⅱ．電子顕微鏡室での研究

ウイルス粒子、細菌の構造および分離した蛋白質や低分子酵素などの形態や微細構造を研究することは重要であるが、この目的を進めるには非常に高い解像力が必要であり、この目的に応用されている方法がネガティブ染色法と、電子顕微鏡観察である。ところが、この染色法に使用される酢酸ウラニル（国際規制物資・劣化ウラン）が、昨今の情勢によりIAEA（国際原子力機関）の敢行したBSS（国際基本安全基準）により、輸入および販売が急停止した。この為、酢酸ウランの保有が無い研究施設では、早急の代替え方法を取得する必要がある。

元来、このネガティブ染色法は、フェリチンの構造研究をしていたFarrant(1954)により始めて報告された。ついでHall(1959)が燐タングステン酸水溶液によりウイルス粒子のネガティブ染色像（コントラスト逆転像）を発表した。その後、より高い倍率と分解能での高性能電子顕微鏡を用いて観察できる酢酸ウラニル水溶液を用いたネガティブ染色法が開発された。この酢酸ウラニルは電子顕微鏡用超薄切片の染色においても重要な染色剤であった。

このような情勢に伴い医学生物学電子顕微鏡技術学会では、いち早く「酢酸ウラニル代替え染色法の開発」のプロジェクトを立ち上げた。我が電顕室では、当初からウイルスの微細構造解析に特別に電子顕微鏡観察用として、精製濃縮したウイルス試料液作製とネガティブ染色法による観察を行っているため、いち早く、このプロジェクトに参加し（17年度は細菌における開発を行った）、ワークショップと論文により研究成果を発表した。この開発したネガティブ染色法は、ウイルスにおいて小型、中型、大型と大きさに適応するよう、燐タングステン酸やモリブデン酸アンモニウム・六水和物に水酸化カリウムを添加調整した染色液である。これらの新開発により中型および大型ウイルスにおいては、従来より良好な電子顕微鏡像観察ができるようになった。小型ウイルスは現在タングステン酸アンモニウムを用いての開発が進行中である。

6 特別事業費による事業

6. 1 熱帯医学研修課程

I. はじめに

平成18年度(第29回)熱帯医学研修課程は、平成18年6月1日から8月31日までの3ヶ月間にわたり、定員15名で実施された。

昨年までと同様、学外の専門家12名、所外(学内)委員2名、所内委員12名に熱帯医学研修課程運営委員を委嘱した。運営委員会は、研修課程修了時の平成18年8月30日に本研究所において行われた。学外運営委員の出席は5名であった。研修生を含めた意見交換会および運営委員会ではコースの目的、選考基準、カリキュラム、試験、研修生の評価、キャリアパスについて討議された。

本年度の熱帯医学研修課程においては、カリキュラムの大幅改編が行われた平成17年度の形式を元に、さらに本年度から開始されている熱帯医学修士課程(Master course of Tropical Medicine: MTM)との連携をとれるようにしたのが特徴である。研修生による評価および運営委員会での討議事項を踏まえ、本年度熱帯医学研修課程実施状況について報告する。

II. 熱帯医学研修課程の目的

本研修課程における目的は1) 熱帯地で保健医療活動をするにあたって必要最小限の熱帯医学に関する基本的な知識や技術を、短期間で習得すること、2) 異質な個々人が、研修を通して相互理解を深め、熱帯地の保健医療活動に不可欠な(国際的な)共同作業の素養を培うことである。3ヶ月という限られた時間の、しかも多様な職種を対象とした研修としては適切な目的であると考えられる。しかしながら、1)における「必要最小限」の定義が不明確であり各分野に委任する形であったため、講義内容にばらつきがみられた。今後、シラバスの充実化を図ることで各科目における「必要最小限」を明確化し、コースを包括する必要があると考えられた。

III. 応募者・選考

本年度は定員15名に対し22名の応募があり、政府組織からの応募を除く一般応募のみの倍率は1.6倍であった。選考は、各教務委員が応募者に対して順位をつけ、全教務委員の結果を合わせ、順位の低い者からはずすという方法をとった。尚、順位付けに対する特別な基準は設けなかった。

IV. カリキュラム

平成17年度にカリキュラムの大幅な改編が行われ、それが好評であったことから、本年度のカリキュラムも基本的に昨年度のものを踏襲した。さらにMTMと組み合わせることによっていくつかの改善を加えた。具体的には以下の3点である。1) より臨床的な講義を求める者に対しMTMのClinical Case Discussionを選択受講できるようにした。また研修生が参加しやすいよう、それらを5時限目(17:00-18:30)に配置した。2) MTM学生による各国の症例紹介のセミナーを必須講義としてカリキュラムに組み込み、感染症を地理的な側面からも捉えられるようにした。3) MTM学生と学習部屋を一緒にする、交流会を設ける等、両者の接点を積極的に取り入れた。研修生からは個々の講義に対しては後述のように改善が求められるものもあったが、カリキュラム全般に対しては高い評価が得られた。

一方、特に所外講師に対しては1日でMTM(英語)、研修課程(日本語)の両方での講義を依頼することになり負担を増やす結果にはなったが、いずれの講師からも快諾が得られた。しかし今後は所外講師がより講義をしやすいような日程調整も必要である。

V. 試 験

各分野がそれぞれ「必要最小限」の範囲で問題を作成し、計50問出題した。平均正答率は70.3%であった。試験の目的は講義内容をひと通り復習する機会を設けることであり、研修生からもそれに対する賛同は得られたが、シラバスの内容と出題内容が異なる、勉強するポイントが分かりにくい、という意見もあった。

VI. 研修生による評価

コースへの速やかなフィードバックを主な目的として 1) 2) を、また来年度へのフィードバックを目的として 3) 4) を行った。

1) 各講義に対する評価(5項目、各5点満点、記名式):

評価表のコメントに対する講師からのレスポンスが求められた。また今後は職種のための記入で無記名にした方が良いという意見もあった。

2) コーディネーターによるチュートリアル(一人2回ずつ):

個別の意見を汲み上げる機能として、中立の立場の者の設置は必須であると思われる。

3) コース全体に対する個別アンケート、コース評価グループワーク(総合討論会への資料作成)

4) 総合討論会(教務委員と研修生による討議):

総合討論会でのまとめを以下に示す。

良い評価が得られた点

- ・カリキュラム全体のバランスおよび講義内容全般
- ・PDFによる講義内容の復習
- ・研修生によるセミナー，Clinical Case Discussion，英語に触れる機会
- ・ITおよび学習環境の充実，迅速な事務手続き，生活面でのサポート

改善が求められた点

- ・内容の重複する講義があった一方で，時間を増やしたほうが良い講義，ひとつの講義として独立させた方がよい内容があった
- ・研究内容に終始した講義は内容の検討が必要。実習では，目的が不明確なもの，指導者が少ないもの，内容が重複するものがあった
- ・Co-medicalを対象とした参考図書の充実により学習面でのサポート充実を図る
- ・同窓会員，長大生への聴講制度を設置すること。また来所が困難な同窓会員に対しても次年度以降の講義にアクセスしやすい環境（インターネットなど）を整えること

VII. 研修生のキャリアパス

研修修了生が将来の熱帯医学，国際保健分野で活躍に有利になるような支援策の例として以下のようなものがあげられた。1) 修了生のネットワーク形成の充実 2) JICA，その他NGOでの選考の際のポイントとして組み込まれるよう働きかける 3) コースの社会認知度を高めるための工夫（MSF, JICAとの公開講義など）

VIII. 学習環境の改善について

平成17年度に行った研究所の大改修に伴い，105号室に研修生控え室を整備した。控え室には個人用の勉強机，学内無線LAN，共用のプリンター，グループ討論用テーブル，参考図書書棚を設置し，研修生の自習のための便宜を図った。控え室は，MTM学生も使用したため，両者の交流を促進する役割も果たした。

IX. 本年度実施状況のまとめと次年度以降の検討課題・方針

- ・平成17年度に改善され本年度も継続された点，すなわちコーディネーター設置，カリキュラム構成，セミナー・試験・チュートリアルの実施については概ね高い評価が得られた。また今年度から開始されたMTMを講義面，生活面に積極的に組み込むことについても良い評価であった。これらについては改編を重ねながら今後も継続していくことが望まれる。
- ・シラバス内容を充実させ，「必要最小限」を明確化すること，さらにそれに基づいたカリキュラム編成が課題として挙げられた。シラバスはまずMTMのものを参考にすることから開始する。

- ・研修生の選考にあたっては，来年度も本年度の方法を踏襲する。
- ・研修生のキャリアパスについての早急な対応が望まれる。

（文責 齊藤麻理子）

6. 2 ケニアプロジェクト拠点

長崎大学ケニアプロジェクト拠点は，平成17年度(2005)からスタートした文部科学省特別教育研究経費による「連携融合事業：新興・再興感染症研究ネットワークの構築」を起爆剤として，ケニアに設置された海外研究教育活動拠点である。

平成17年度(2005)9月にKEMRI(Kenya Medical Research Institute)との間でMOUを締結し，翌年平成18年1月に正式に設置された。拠点長として嶋田雅暁教授が平成17年8月から，拠点研究者として9月から皆川昇教授，10月から金子聡教授が，事務職員として本田志保が10月から派遣された。

「連携融合事業」とは，「国際協力機構(JICA)との連携融合」事業であり，

1. 新興・再興感染症および熱帯病の研究高度化を目的に，
2. 熱帯地に研究教育拠点を構築し，
3. 現地研究者と共同で，
4. 長期・継続的かつ広範囲の調査研究，
5. 若手研究者の現地教育を実施する。
6. JICAとの連携により，開発援助の側面からも成果を現地住民へ還元する。

（参考文献：Tropical Medicine and Health 2007. 35 (2): 29-31.）

連携融合事業2年目にあたる平成18年度は，一瀬休生教授，二見恭子ポスドクも参加し，総合的な熱帯感染症研究を現場（ケニア）で実施するための本格的準備が開始された。人口静態動態サーベイランス(DSS: Demographic Surveillance System)地区の構築，生態学的観察システムの構築を西ケニアで，本格的研究室内実験施設の構築を主にナイロビで推進し，国内では堀尾政博教授がそのサポート体制を敷いた。

平成18年度に行われた活動は次の通り。

I. 疫学的，公衆衛生学的調査研究

DSS (Demographic Surveillance System : 人口静態動態調査システム) の構築を行うために、ナイロビにおいて、

- 1) コンピュータ・ラボの整備
- 2) PDAによる入力システム (ペーパーレス) の開発
- 3) サーバ整備 (ケニアおよび日本国内)
- 4) ネットワークを用いたデータ転送システムの開発
- 5) データベース管理システムの開発

を行う一方、

西ケニア、ニャンザ州、スバ地区において、

- 1) GPSを利用した家屋登録
- 2) 調査地域における調査員の募集・採用・教育
- 3) 調査地域におけるベースライン調査の開始
- 4) 調査地域における追跡調査の開始

を開始した。

(参考文献 : Tropical Medicine and Health 2007. 35 (2) : 37-40)



II. マラリア媒介蚊の生態学的生物学的研究

- 1) ナイロビにおける研究機材、施設等の整備継続
- 2) 蚊の飼育室の設置とマラリア媒介蚊2種 (*A. arabiensis* と *A. gambiae*) のコロニー作成
- 3) スバ地区ビタにある国際昆虫生理生態学センターのラボの整備
- 4) 自動気象観測装置の設置

を行う一方、研究活動として、

- 1) マラリア媒介蚊の繁殖地調査
- 2) 家屋内の媒介蚊調査
- 3) 媒介蚊の捕食者研究

を行った。

(参考文献 : Malaria Journal. 6 : 104, 2007; Tropical Medicine and Health 2007. 35 (2) : 41-45)



Ⅲ. 細菌性下痢症の研究

研究室内で病原体を扱う体制を整えるため、

- 1) 分子生物学的研究を行なえるラボ（モレキュラーラボ）、主に蛋白を扱うことを想定したラボ（バイオケミカルラボ）、種々の病原体処理を行なうことが出来るP2ラボの整備
- 2) 危険な病原体を扱うP3（バイオセイフティー）ラボの設置（輸出入作業、設置作業）を行った。

（参考文献：Tropical Medicine and Health 2007. 35 (2): 33-36)



6. 3 ベトナムプロジェクト拠点

17年度3月に正式に発足した長崎大学ベトナム拠点フレンドシップ研究室を礎に2年度目となる本年度は、拠点整備の拡充，研究活動の充実，および若手研究者育成のためのシステムの充実を目指した。06年8月には衆議院議員団のNIHE訪問に際し本プロジェクトの全容を説明した。07年2月には文部科学省および科学技術振興機構（JST）よりプロジェクト視察があり詳細な報告を行った。同3月には外務副大臣の訪問を受けプロジェクトが適切に実施されている事を詳細に説明した。06年8月には長崎大学医学部学生8人を受け入れプロジェクトの説明および実施場所を案内した。06年12月にはハノイ拠点を中心として第4回JSPS国際セミナーを開催し内外から参集した多くの科学者間で活発な討議が行われた。また長崎大学拠点を利用し

た国内外の共同研究参加者訪問は年間を通じて7回(延べ約50人)を数えた。本年度のプロジェクト運営会議は合計8回開催され長崎大学側、NIHE側から関係者が参加した。

研究活動

I. 動物由来新興・再興感染症研究班

鳥インフルエンザウイルス、ハンタウイルス、狂犬病ウイルス、ヘルペスBウイルス、ニパウイルスに関するフィールド調査を行い、鳥、コウモリ、ヒトなどの検体を採取した。一部についてその血清疫学解析、遺伝子解析を実施した。

II. 昆虫媒介性感染症研究班

古タイヤを対象としたデング熱媒介蚊浸襲現況の予備調査を実施した。またメトフルトリン樹脂製剤の吸血回避効果を評価した。気温、風などの自然条件の効果への影響を含め、熱帯の現場で使用した時の効果の持続性に関する基礎データが得られた。顕微鏡では検出の難しい少数のガメトサイトをろ紙サンプルから検出する手法の実施を行った。マラリア調査地の免疫動態調査を行った。媒介蚊の動態とともにマラリア感染者の免疫動態が複合感染の有無に影響を与える可能性が示唆された。平成18-20年の3年間に実施する蚊の補修計画を確認し日越両国で実施するウイルス分離方法を確認し統一した。

III. 経口感染症研究班

小児病院としてハイフォン小児病院、カンホア総合病院を設定し、検体を収集するシステムを構築した。ハイフォン小児病院より検体の収集を開始した。ウイルス、細菌、原虫の解析ができるプロトコールを作成した。NIHEの研究者にロタウイルスのスクリーニング、genotypingの技術移転を行った。

IV. ヒト-ヒト感染症研究班

カンホア県ニャチャン市およびニンホア郡において人口世帯調査、各世帯の感染症罹患リスク因子調査、ならびに地理的位置情報調査を実施し、対象地域住民の人口および背景情報を正確に把握した(約7万6千世帯、36万人)。更に主要な小児感染症実態調査を行うとともに、その主要症状がある小児を持つ家族の疾病行動調査を行った。カンホア県病院小児科病棟へ感染症臨床に精通した医師を常駐させ、呼吸器感染症診断指導を行うとともに、臨床情報および患者検体を採取するシステムを構築した。6種類の細菌性呼吸器感染症病原体を迅速に同定および定量できる検査系を確立した。

6. 4 フィジープロジェクト拠点

大洋州予防接種事業強化プロジェクト(J-PIPS)は、大洋州の13カ国を対象としたJICAの広域技術協力プロジェクトであり、平成17年3月に5カ年の予定で始まった。長崎大学は技術協力契約を受託し、熱帯医学研究所病原体解析部門の森田公一教授を業務主任者として、専門家4名がフィジー国スバ市にあるフィジー拠点に赴任し活動している。

本プロジェクトの主たる目的は、ポリオ、麻疹、B型肝炎、インフルエンザ桿菌等ワクチンで予防可能な疾病を対象とした予防接種の強化(政策、疫学、モニタリングシステム、検査システム等の強化)、および、ワクチンのロジスティックス、コールドチェーン機材維持管理、EPI(予防接種拡大計画)関連廃棄物処理に関する地域内研修システムの構築および対象各国における人材の能力向上である。人材育成に関しては、各国の予防接種事業指導者を対象とした「地域研修」をスバ市において、および各国の末端レベルの医療従事者等を対象とした「国別研修」(技術補完研修)をそれぞれの国において毎年実施している。

第三年次にあたる平成18年度の主な活動は以下の通りである。

I. 地域研修拠点の整備(フィジー医薬品供給センター(FPS))

平成18年4月から延べ6名の専門家をフィジー国のFPSへ派遣し、太平洋諸島地域の研修拠点となるフィジー保健省のプロジェクトカウンターパートに対して、各専門分野における技術移転を実施してきた。技術移転の対象者は、フィジー保健省のEPIマネージャー、コーディネーターおよびコールドチェーン技術者等であり、将来的には現在、技術協力の受益者であるフィジー保健省側が地域内協力として他国に対する技術移転を行っていくことが期待されている。

II. 2006年度PIPS年次会議の共催

平成18年5月8日～12日にフィジー国ナンディにおいて、WHO、UNICEF、SPCなどの国際機関やAusAID、NZAIDとの共催により、大洋州諸国のEPI担当者を招き第二回PIPSワークショップ(PIPS年次会議)を開催した。

同会議では、J-PIPSによる研修実施実績と今後の計画の発表を行ったほか、J-PIPS参加の13カ国と全体会合、個別会合を実施し、各国への技術協力計画の進行状況、今年度の支援計画を総括した。地域研修の持続可能性、および自立性を確保するため、関係国の政府(保健省)高官で構成されるExecutive Boardの設立を提起した。

III. 第二回地域研修

平成18年11月20日～24日にフィジー国スバ市において、WHO、UNICEFなどの国際機関との

協力のもと、フィジー保健省との共催により開催した。研修には14カ国から38名の研修生が参加した。

地域研修では、「予防接種プログラム管理（予防接種疫学，ワクチンロジスティックス，安全注射および廃棄物処理を含む）」および「コールドチェーン機材維持管理」の2コースを開設した。

IV. 国別研修の支援

マーシャル，クック，トンガ，パラオ，ナウル，フィジーに専門家を派遣し，予防接種疫学，予防接種対象疾患，ワクチンロジスティックスおよびコールドチェーン維持管理の分野における講義および技術指導を行った。また，ミクロネシアで行われた，第6回年次予防接種会議ではプロジェクトのワクチンロジスティックス専門家が招聘され，ワクチンの適正な温度管理，ワクチン廃棄率のモニタリング手法および廃棄率軽減のための取り組み，コールドチェーン整備計画の策定，ワクチン需要予測能力等の分野にかかる講義，グループワーク等を実施した。

V. 教育教材の開発支援

初年度に開発した地域研修用の教材の改良を支援する一方，フィジー国で平成17年より導入された新ワクチン（5種混合ワクチン，DTP-HepB+Hib）の特徴，温度管理および取り扱い手法等につき，フィジー国保健省カウンターパートとともに医療従事者向けパンフレットを作成し，また，研修という形で技術支援を行った。さらに，トンガ国が2005年に小児の予防接種スケジュールに導入した4種混合ワクチン（DTP-Hib）につき，Hib凍結乾燥ワクチンとDTP液体ワクチンの混合を徹底させるための公衆衛生看護師向けパンフレットを作成し，トンガへ配布した。

VI. 各国での調査と個別指導

マーシャル，クック，トンガ，ミクロネシア，パラオ，キリバス，ナウル，フィジーに専門家を派遣し，予防接種事業にかかる現地調査および関係者協議を実施した。現地調査のため関係部署およびヘルスセンター等を訪問した際には，ワクチンロジスティックス，疫学，コールドチェーン維持管理，安全注射等にかかる個別指導を行った。プロジェクト対象国13カ国のうち，12カ国の調査が完了した。

VII. EPIサーベイランス向上に関する支援

平成18年2月にフィジーで発生した麻疹流行に対し，4月以降も引き続き疫学担当専門家がフィジー保健省EPI部門とマタイカハウス（フィジー国立公衆衛生検査所）にて，麻疹流行の

継続的なモニタリング，疫学的解析，補足的予防接種キャンペーンの実施，および今後の改善等にかかる技術支援を行った。また，今期に発生した流行性耳下腺炎の流行に関し，サーベイランス強化を支援した。さらに，フィジー保健省のEPI対象疾病発症データの管理能力の向上を図るべく，フィジー保健省と各地域保健局が実施するEPI関連のモニタリング，データ管理，およびスーパービジョンについて支援を行った。フィジー以外の国については，EPI対象疾病の発生状況をモニタリングするための域内サーベイランスシステムである，Hospital Based Active Surveillance System（HBASS）に関し，WHOと連携して技術支援を行った。なお，パラオ，フィジー，ナウル等の国別研修に際して，EPI対象疾患の特徴，鑑別診断，ワクチンの推奨スケジュール，未接種小児に対する追加予防接種，ワクチンの副作用などの講義を行った。

7 文部科学省科学研究費補助金等による研究

7. 1 文部科学省科学研究費補助金（平成18年度）

研究種目	職名・研究代表者	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
基盤研究(A) 一般	教 授・平 山 壽 哉	20,300	6,090	ヘリコバクター・ピロリが産生する VacA 毒素の受容体の機能と毒性発現	17～18年度
基盤研究(A) 海外	教 授・有 吉 紅 也	14,100	4,230	北タイにおける HIV 伝播とエイズ病態に関する宿主遺伝子多型研究	18～20年度
基盤研究(B) 海外	教 授・平 山 謙 二	2,600	—	南米のジャーガス病の重症化を規定するヒトおよび原虫の遺伝子解析	15～18年度
基盤研究(B) 海外	助 手・都 野 展 子	5,200	—	アフリカマラリア媒介蚊の吸血宿主選択性決定機構の解明	18～21年度
基盤研究(B) 海外	教 授・平 山 壽 哉	6,900	—	フィリピン及びタイにおけるヘリコバクター・ピロリの病原因子の多型比較調査	18～19年度
基盤研究(B) 海外	教 授・森 田 公 一	3,700	—	デング出血熱重症化に関与するウイルス遺伝子多型性の研究	18～20年度
基盤研究(C) 一般	講 師・和 田 昭 裕	1,800	—	コレラ毒素 B サブユニット結合蛋白質の精製および同定	18～19年度
萌芽研究	教 授・門 司 和 彦	1,100	—	熱帯における人口・健康・栄養転換に差異をもたらす人類生態要因の検討	17～18年度
萌芽研究	教 授・平 山 謙 二	1,100	—	臍帯血造血幹細胞移植免疫不全マウスを用いたヒトマラリアモデルの作製	17～18年度
萌芽研究	教 授・青 木 克 己	1,800	—	レーザー細胞破壊技術を用いた寄生蠕虫感染型幼虫の特殊細胞・器官の機能と役割の検証	18～19年度
萌芽研究	教 授・森 田 公 一	2,000	—	アジアで流行している未知の蚊媒介性脳炎ウイルスの網羅的解析	18～19年度
萌芽研究	助教授・本 田 純 久	1,600	—	スマトラ沖地震津波被災地域における心的外傷後ストレス障害のマルチレベル分析	18～19年度
若手研究(B)	助 手・谷 村 晋	800	—	小児人口の受療機会における不平等性の時空間分布	17～18年度
若手研究 (スタートアップ)	助教授・西 浦 博	1,350	—	個人の行動及び個人保護具による新興感染症予防に関する理論疫学的研究	18～19年度
合 計	14 件	64,350	10,320		

7. 2 厚生労働科学研究費補助金(平成18年度)

研究事業名	職名・研究者名	研 究 課 題 名	研究経費 (千円)	区 分
国際健康管理 危機管理 ネットワーク強化	教授・森 田 公 一	国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得のための人材育成のあり方に関する研究	5,983	主任研究者
新興・再興感染症	教授・森 田 公 一	ウエストナイルウイルス侵入に備えての診断, 予防対策への基盤的研究	10,000	分担研究者
新興・再興感染症	教授・平 山 謙 二	動物由来感染症のコントロール法の確立に関する研究	5,000	分担研究者
エイズ対策	教授・有 吉 紅 也	HIV 感染とエイズ発症の阻止および治療に関わる基礎研究	9,000	分担研究者
エイズ対策	助手・久 保 嘉 直	HIV の増殖・変異の制御に関する研究	2,500	分担研究者
がん臨床	助教授・本 田 純 久	難治性白血病に対する標準的治療法の確立に関する研究	500	分担研究者
合 計	6 件		32,983	

7. 3 受託研究費等（平成18年度）

7. 3. 1 受託研究費

委 託 者	職名・氏名	研 究 課 題	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究 推 進 事 業	教 授・森 田 公 一	糖鎖機能によるデングウイルス感染の制御	900	270	
国立国際医療 セ ン タ 国際医療協力 研究委託費	教 授・門 司 和 彦	ミレニアム開発目標達成のための よりよいパートナーシップに関する 分析	1,800	—	
国立国際医療 セ ン タ 国際医療協力 研究委託費	教 授・神 原 廣 二	インドネシア国ロンボク・スンバ ワにおけるマラリアコントロール と住民教育効果	3,500	—	
文 部 科 学 省 科学技術振興 調 整 費	教 授・森 田 公 一	科学技術連携施策群の効果的・効 率的な推進 BSL-4 施設を必要とす る新興感染症対策	2,049	615	
文 部 科 学 省 ナショナルバイ オリオソース プロジェクト	教 授・神 原 廣 二	病原微生物遺伝資源の収集、保存、 提供体制の構築(病原性原虫の収 集・株保存と分析・その提供)	3,000	—	
アサヒビール 株 式 会 社	教 授・平 山 壽 哉	ピロリ菌毒素の性状解析に関する 研究	770	230	
興 和 創 薬 株 式 会 社	助 手・久 保 嘉 直	NIK-333 のヒト免疫不全ウイルス (HIV) 感染に及ぼす影響	769	231	
シントーファイ ン 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	ゴキブリに対する野外での殺虫剤 効力評価	200	60	
合 計	8 件		12,988	1,406	

7. 3. 2 受託事業費

委 託 者	職名・氏名	研 究 課 題	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
独立行政法人 日本学術振興会 拠 点 大 学 交 流 事 業	所 長・青 木 克 己	熱帯医学 熱帯性感染症の新興・ 再興の要因とそれに基づく防除対 策	25,119	—	
独立行政法人 国際協力機構	所 長・青 木 克 己	平成 17 年度集団研修「熱帯医学 研究Ⅱ」	27,120	—	
合 計	2 件		52,239	—	

7. 3. 3 研究拠点形成補助金

補助金名	職名・氏名	拠点のプログラム名	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
21 世 紀 COE	教 授・青 木 克 己	熱帯病・新興感染症の地球規模制 御戦略拠点	194,760	19,476	15～19年度

7. 3. 4 民間等の共同研究

民間等機関名	職名・氏名	研 究 題 目	民 間 等 (千円)	大 学 (千円)	備 考
住 友 化 学 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	熱帯病媒介昆虫の防除に関する共 同研究	2,000	—	

8 海外活動

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
事務員	本 田 志 保	ケニア拠点プロジェクトにおける事務処理のため	ケ ニ ア	H18. 4. 9 ～ H18. 5. 2	大学運営経費
助教授	西 浦 博	研究打ち合わせ及び資料収集	ド イ ツ	H18. 4. 11 ～ H18. 8. 10	大学運営経費
教 授	森 田 公 一	ベトナム拠点プロジェクトに関する研究打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H18. 4. 17 ～ H18. 4. 20	受託研究費
教 授	一 瀬 休 生	新興・再興感染症研究に関する調査及びラボ整備、情報収集	ケ ニ ア	H18. 4. 21 ～ H18. 5. 19	大学運営経費
助 手	都 野 展 子	ニュージーランドにおける外来菌根菌のナンキョクブナ林侵入定着に関する研究	ニュージーランド	H18. 4. 22 ～ H18. 5. 15	科学研究費補助金
教 授	皆 川 昇	ケニア拠点における調査・研究	ケ ニ ア	H18. 4. 24 ～ H18. 7. 25	大学運営経費
プロジェクト研究員	二 見 恭 子	ケニア拠点における調査・研究および実験室管理業務	ケ ニ ア	H18. 4. 24 ～ H18. 7. 25	大学運営経費
教 授	門 司 和 彦	研究指導	ガ ー ナ	H18. 4. 25 ～ H18. 5. 9	先方負担(国際協力機構)
教 授	青 木 克 己	Nagasaki-Singapore Medical Meeting に出席するため	シンガポール	H18. 5. 4 ～ H18. 5. 8	C O E
教 授	小 林 信 之	Nagasaki-Singapore Medical Meeting に出席するため	シンガポール	H18. 5. 4 ～ H18. 5. 8	C O E
講 師	川 田 均	熱帯病媒介昆虫の防除に関する共同研究及び資料収集	タンザニア	H18. 5. 12 ～ H18. 5. 27	受託研究費
助 手	江 原 雅 彦	EURO SCI CON 学会出席、発表及び研究打ち合わせ	イ ギ リ ス	H18. 5. 14 ～ H18. 5. 19	C O E
教 授	有 吉 紅 也	会議出席及び研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18. 5. 17 ～ H18. 5. 20	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
講 師	和 田 昭 裕	第106回ASMに参加、発表のため	ア メ リ カ	H18. 5. 21 ～ H18. 5. 26	他機関経費(PRESTO)
教 授	平 山 壽 哉	共同研究打ち合わせ	ア メ リ カ	H18. 5. 23 ～ H18. 5. 27	委任経理金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
大 学 生	依 田 健 志	マラリア調査研究	インドネシア	H18. 5.25 ～ H18. 6. 9	受託研究費
教 授	神 原 廣 二	マラリア調査研究	インドネシア	H18. 5.25 ～ H18. 6. 9	受託研究費
教 授	平 山 謙 二	海外研修の受入打ち合わせ(タイ・ベトナム)	ベ ト ナ ム	H18. 5.31 ～ H18. 6. 4	C O E
教 授	平 山 壽 哉	インドコレラ腸管感染症研究所で発表を行う	イ ン ド	H18. 6. 7 ～ H18. 6.11	日印コレラシンポジウム組織委員会
大 学 生	阿 部 朋 子	研究打ち合わせ及び現地調査	韓 国 ベ ト ナ ム	H18. 6. 7 ～ H18. 8.22	科学研究費補助金
COE 研究員	竹 中 宏 平	拠点大学方式による学術交流事業	ベ ト ナ ム	H18. 6. 7 ～ H18. 6.25	J S P S
助 手	砂 原 俊 彦	共同研究及びフィールド調査	ベ ト ナ ム	H18. 6. 7 ～ H18. 7.23	J S P S
教 授	有 吉 紅 也	ランパンコホート研究の代表研究者会議に参加するため	タ イ	H18. 6. 8 ～ H18. 6.10	科学研究費補助金
講 師	川 田 均	拠点大学方式による学術交流事業	ベ ト ナ ム	H18. 6. 9 ～ H18. 6.24	J S P S
教 授	平 山 謙 二	マラリアワクチンの研究打ち合せ	ガ ー ナ セ ネ ガ ル	H18. 6.11 ～ H18. 6.19	C O E
助 手	都 野 展 子	アフリカマラリア蚊の吸血宿主選好性決定機構の解明	ケ ニ ア	H18. 6.12 ～ H18. 7.13	科学研究費補助金
助 手	柳 哲 雄	第12回国際感染症学会に出席する	ポルトガル	H18. 6.13 ～ H18. 6.21	大学運営経費
教 授	平 山 壽 哉	アジョウ大学医学部ストレスシンポジウム	韓 国	H18. 6.16 ～ H18. 6.18	アジョウ大学
教 授	森 田 公 一	NIHE国立衛生疫学研究所にてベトナムプロジェクト拠点に関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18. 6.15 ～ H18. 6.17	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
教 授	高 木 正 洋	NIHE国立衛生疫学研究所にてベトナムプロジェクト拠点に関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18. 6.15 ～ H18. 6.17	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 講 師	松 林 格	カンホア郡衛生局にて、住民調査及び疾病行動パターン研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18. 6. 13 ～ H18. 8. 1	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
教 授	平 山 謙 二	研究打ち合わせと海外研修の打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H18. 7. 2 ～ H18. 7. 5	C O E
教 授	高 木 正 洋	蚊媒介感染症研究所におけるデング熱基礎調査	ベ ト ナ ム	H18. 7. 3 ～ H18. 7. 8	受託研究費
教 授	高 木 正 洋	蚊媒介感染症研究におけるデング熱基礎調査	韓 国	H18. 7. 3 ～ H18. 7. 8	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
教 授	一 瀬 休 生	新興・再興感染症に関する調査及びラボ整備のため	ケ ニ ア	H18. 7. 10 ～ H18. 8. 14	大学運営経費
助 手	後 藤 健 介	カンホア郡衛生局にて人口調査及び、疾病行動パターン研究のパイロットスタディーを行う	韓 国	H18. 7. 10 ～ H18. 7. 22	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
教 授	有 吉 紅 也	会議出席「第2回 Investigators」及び研究のレビューと今後のリサーチテーマについての協議を行う	ベ ト ナ ム	H18. 7. 11 ～ H18. 7. 14	新興・再興感染症研究拠点形成プログラム
助 手	柳 哲 雄	病原体と情報の収集	タ イ ネ パ ー ル	H18. 7. 14 ～ H18. 7. 30	受託研究費
教 授	森 田 公 一	デング出血熱の研究打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H18. 7. 23 ～ H18. 7. 29	C O E
助 手	宮 城 啓	感染症医療研修の引率および指導	フィリピン	H18. 7. 23 ～ H18. 7. 29	C O E
教 授	有 吉 紅 也	熱帯医学修士課程の海外臨床実習の引率及び監督	タ イ	H18. 7. 31 ～ H18. 8. 4	C O E
助 手	中 岡 大 士	熱帯医学修士課程の海外臨床実習の引率及び監督	タ イ	H18. 7. 31 ～ H18. 8. 13	C O E
教 授	平 山 謙 二	南米シャーガス病研究での打ち合わせ	イ ギ リ ス	H18. 8. 7 ～ H18. 8. 13	科学研究費補助金
教 授	平 山 謙 二	WHO/TDR主催の「Refresher Course on Good Clinical Practices for TDR Clinical Monitors」に出席し、研究打ち合わせをする。	タ イ ミ ャ ン マ ー	H18. 8. 16 ～ H18. 8. 23	先方負担 (WHO/TDR)
COE 研究員	竹 中 宏 平	マラリア発生環境のベトナム・ケニア間での比較研究。感染症媒介蚊の形態・分子系統解析についての研究打ち合わせを行う	イ ギ リ ス ケ ニ ア	H18. 8. 28 ～ H18. 9. 12	寄 付 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	平 山 謙 二	南米のシャーガス病の研究打ち合わせ	アメリカ合衆国	H18. 9. 3 ～ H18. 9. 9	科学研究費 補 助 金
教 授	一 瀬 休 生	新興・再興感染症に関する調査及びラ ボ整備のため	ケ ニ ア	H18. 9. 9 ～ H18.10. 9	大学運営経費
教 授	有 吉 紅 也	研究打合せ	タ イ	H18. 9.11 ～ H18. 9.15	科学研究費 補 助 金
助教授	本 田 純 久	スマトラ沖地震津波被災地域における 心的外傷後ストレス障害のマルチレベ ル分析	シンガポール	H18. 9.12 ～ H18. 9.20	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 壽 哉	科学研究費による共同研究遂行のため の打ち合わせ	タ イ	H18. 9.16 ～ H18. 9.20	科学研究費 補 助 金
助 手	井 上 真 吾	デングウイルスおよび日本脳炎ウイル ス感染症の海外学術共同研究	フィリピン	H18. 9.21 ～ H18.10. 5	科学研究費 補 助 金
教 授	森 田 公 一	NIHEにてベトナムプロジェクト拠点 形成に関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18. 9.27 ～ H18. 9.30	新興・再興感 染症研究拠点 形成プログラム
COE 研究員	斉 藤 麻理子	フィリピンにてデング熱における血小 板減少機序解明に関する研究活動を行 うため	フィリピン	H18.10. 1 ～ H18.12.28	C O E
教 授	金 子 聰	学会参加, 研究打ち合わせ	日 本	H18.10. 8 ～ H18.10.17	大学運営経費
助 手	都 野 展 子	囲実験と蚊成虫の採集	ケ ニ ア	H18.10.12 ～ H18.11.28	科学研究費 補 助 金
教 授	有 吉 紅 也	フィールド視察及び研究打ち合わせ	タ イ ベ ト ナ ム	H18.10.16 ～ H18.10.20	J S P S
助教授	森 本 浩之輔	カンフォア県衛生局, カンフォア県病 院, ニンフォア群病院において呼吸器 感染症に関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H18.10.16 ～ H18.10.20	新興・再興感 染症研究拠点 形成プログラム
助 手	金 田 英 子	アジア・熱帯モンスーン地域における 地域生態史の総合的研究	ラ オ ス	H18.10.17 ～ H18.12.28	先 方 負 担 (国立国際医 療センター)
教 授	平 山 謙 二	TDR Stakeholder Counsultionに 参加するため	ス イ ス	H18.10.22 ～ H18.10.25	先 方 負 担 (WHO/TDR)
教 授	平 山 壽 哉	共同研究の打ち合わせ	ア メ リ カ	H18.10.26 ～ H18.10.30	科学研究費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	平 山 謙 二	論文博士号取得希望者の論博研究者と今後の研究の打ち合わせ	ア メ リ カ	H18. 11. 12 ～ H18. 11. 18	他 機 関 経 費 (WHO/TDR)
教 授	皆 川 昇	新興・再興感染症に関する調査, 研究	ケ ニ ア	H18. 11. 16 ～ H19. 2. 4	大学運営経費
プロジェ クト 研究員	二 見 恭 子	新興・再興感染症に関する調査, 研究	ケ ニ ア	H18. 11. 17 ～ H18. 12. 21	大学運営経費
講 師	川 田 均	熱帯病媒介昆虫の防除に関する共同研究および資料収集	タンザニア	H18. 11. 20 ～ H18. 11. 29	受託研究費
COE 研究員	橋 爪 真 弘	研究打ち合わせ	イ ギ リ ス	H18. 11. 26 ～ H18. 12. 5	大学運営経費
助 手	砂 原 俊 彦	マラリア研究打ち合わせ及び調査	ベ ト ナ ム	H18. 11. 28 ～ H18. 12. 27	C O E
教 授	有 吉 紅 也	研究打合せ, 研究の進行状況の確認を行うため	タ イ	H18. 11. 29 ～ H18. 12. 2	科学 研 究 費 補 助 金 ／J S P S
大 学 生	阿 部 朋 子	拠点大学交流事業, 第4回国際セミナーに参加	ベ ト ナ ム	H18. 12. 1 ～ H18. 12. 7	大 学 運 営 経 費 等
助 手	中 澤 秀 介	研究打合せ及びセミナーにて成果発表	ベ ト ナ ム	H18. 12. 2 ～ H18. 12. 6	新興・再興感 染症研究拠点 形成プログラム
教 授	青 木 克 己	拠点大学交流事業 第4回国際セミナー	ベ ト ナ ム	H18. 12. 3 ～ H18. 12. 7	C O E
教 授	高 木 正 洋	21世紀COEプログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点」におけるマラリア媒介蚊の生態に関する共同研究について調査報告および今後の研究に関する打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H18. 12. 3 ～ H18. 12. 16	C O E
助 手	金 田 英 子	共同研究のため	ベ ト ナ ム	H18. 12. 3 ～ H18. 12. 6	大学運営経 費／国立国際 医療センター
講 師	川 田 均	熱帯病媒介昆虫の防除に関する共同研究 (住友化学)	ベ ト ナ ム	H18. 12. 3 ～ H18. 12. 14	受託研究費
教 授	平 山 謙 二	パスツール研究所にて会議出席	ベ ト ナ ム	H18. 12. 6 ～ H18. 12. 10	新興・再興感 染症研究拠点 形成プログラム
教 授	平 山 壽 哉	第46回米国細胞生物学会出席発表	ア メ リ カ	H18. 12. 10 ～ H18. 12. 14	科学 研 究 費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	溝 田 勉	熱帯地域における専門家人材の研修にかか る最終候補者選考	ベトナム ラオス ミャンマー	H18. 12. 11 ～ H18. 12. 18	財国際交通 安 全 学 会
教 授	平 山 謙 二	論文博士号取得希望者の論博研究者と 今後の研究打ち合わせ	フィリピン	H18. 12. 14 ～ H18. 12. 16	J S P S
教 授	有 吉 紅 也	HIV感染者コホートより臨床データを 収集，解析するため	タ イ	H18. 12. 21 ～ H19. 1. 9	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 壽 哉	共同研究遂行のため	フィリピン	H19. 1. 4 ～ H19. 1. 6	科学研究費 補 助 金
教 授	森 田 公 一	二パウウイルスの研究	南アフリカ	H19. 1. 22 ～ H19. 2. 3	受託研究費
教 授	一 瀬 休 生	新興・再興感染症に関する調査・研究 の為	ケ ニ ア	H19. 1. 23 ～ H19. 3. 29	大学運営経費
助教授	鳥 山 寛	タイ国におけるウイルス肝炎の分子病 理学的研究	タ イ	H19. 1. 26 ～ H19. 2. 11	大学運営経費
教 授	神 原 廣 二	マラリアコントロールの実情調査	インドネシア	H19. 1. 27 ～ H19. 2. 8	C O E
助 手	柳 哲 雄	マラリア研究打ち合わせ	インドネシア	H19. 1. 27 ～ H19. 2. 8	受託研究費
事務長	陣 野 勝 久	ケニア中央医学研究所およびJICAへの 表敬訪問を行う	ケ ニ ア	H19. 1. 27 ～ H19. 2. 4	C O E (外部資金 間接経費)
教 授	門 司 和 彦	研究打ち合わせ	タ イ	H19. 1. 29 ～ H19. 2. 4	国立大学法人 等
助 手	都 野 展 子	アフリカマラリア媒介蚊の吸血宿主先 行性決定機構の解明	ガ ー ナ スウェーデン	H19. 1. 29 ～ H19. 3. 22	科学研究費 補 助 金
助 手	金 田 英 子	研究打ち合わせ及び現地調査	ラ オ ス	H19. 2. 6 ～ H19. 3. 16	先 方 負 担 (総合地球 科学研究所)
教 授	森 田 公 一	大洋州予防接種事業強化プログラムの 現地用務実施	フ ィ ジ ー	H19. 2. 12 ～ H19. 3. 4	大洋州予防 接種事業強化 プロジェクト
教 授	高 木 正 洋	国際ワークショップでの講演および打 ち合わせ	タ イ	H19. 2. 12 ～ H19. 2. 14	先 方 負 担 (J S P S)

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	門 司 和 彦	研究打ち合わせ	ラ オ ス	H19. 2. 13 ～ H19. 2. 15	先 方 負 担 (京都大学)
教 授	長谷部 太	実験施設見学, シンポジウム出席のため	オーストラ リ ア	H19. 2. 17 ～ H19. 2. 21	C O E
COE 研究員	斉 藤 麻理子	デングウイルス感染症における血小板 減少機序解明に関する研究	フィリピン	H19. 2. 17 ～ H19. 3. 20	C O E
教 授	溝 田 勉	ミャンマー国に於ける環境毒性物質と しての鉄による肝癌発症若年化に関する 調査研究	ミャンマー	H19. 2. 19 ～ H19. 2. 22	科学 研 究 費 補 助 金
教 授	堀 尾 正 博	情報収集, 新興・再興感染症に関する 調査・研究	ケ ニ ア	H19. 2. 23 ～ H19. 3. 11	大学運営経費
講 師	上 村 春 樹	研究打ち合わせ及びフィールド調査	ケ ニ ア	H19. 2. 23 ～ H19. 3. 11	C O E
助 手	中 澤 秀 介	フィールド調査及び共同研究	ハ ノ イ	H19. 2. 26 ～ H19. 3. 23	J S P S
助 手	中 岡 大 士	海外実習プログラムの要請及び打ち合 わせ(タイ)・疫学調査プロジェクト の打ち合わせ(ベトナム)	タ イ ベ ト ナ ム	H19. 2. 20 ～ H19. 2. 27	受託研究費
教 授	有 吉 紅 也	海外実習プログラムの要請及び打ち合 わせ(タイ)・疫学調査プロジェクト の打ち合わせ(ベトナム)	タ イ ベ ト ナ ム	H19. 2. 21 ～ H19. 2. 27	受託研究費
教 授	平 山 謙 二	住血吸虫症の迅速的診断法確立の為の 共同研究	中 国	H19. 3. 1 ～ H19. 3. 3	C O E
教 授	有 吉 紅 也	HIV伝播とエイズ病態に関する宿主遺 伝多型研究	タ イ イ ギ リ ス	H19. 3. 1 ～ H19. 3. 14	科学 研 究 費 補 助 金
助 手	中 岡 大 士	研究打ち合わせ・修士課程の情報収集, 研究打ち合わせ, 情報交換	タ イ イ ギ リ ス	H19. 3. 1 ～ H19. 3. 12	C O E
助 手	井 上 真 吾	デングウイルス及び日本脳炎ウイルス 感染症の調査研究	フィリピン	H19. 3. 3 ～ H19. 3. 20	C O E
教 授	森 内 浩 幸	共同研究打ち合わせ及び研究技術指導	タ イ	H19. 3. 5 ～ H19. 3. 8	C O E
助 手	宮 城 啓	研究協力者として調査に参加	ラ オ ス	H19. 3. 8 ～ H19. 3. 18	先 方 負 担 (関西医科大学)

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	平 山 謙 二	学会発表および研究打ち合わせ	フランス・ ガ ー ナ	H19. 3. 9 ～ H19. 3. 16	C O E
研究生	ディン チュアン デュク	調査研究	ベ ト ナ ム	H19. 3. 14 ～ H19. 3. 30	科学研究費 補 助 金
教 授	高 木 正 洋	共同研究	ベ ト ナ ム	H19. 3. 15 ～ H19. 3. 23	J S P S
教 授	門 司 和 彦	研究打ち合わせ	中 国	H19. 3. 21 ～ H19. 3. 25	先 方 負 担 (国立大学)
教 授	森 田 公 一	ベトナム拠点プロジェクトに関する研 究打合せ	ベ ト ナ ム	H19. 3. 22 ～ H19. 3. 25	新興・再興感 染症研究拠点 形成ﾌｫﾚﾑ
助 手	井 上 真 吾	バイオハザード対策用ラボシステムに 関する点検等	ケ ニ ア	H19. 3. 22 ～ H19. 3. 29	大学運営経費
教 授	有 吉 紅 也	Keystone Symposiaに出席のため	カ ナ ダ	H19. 3. 24 ～ H19. 3. 31	大学運営経費

9 外国人研究者の受け入れ

9. 1 熱帯医学研究コース

平成18年度、新たに長崎大学大学院医歯薬総合研究科に開設された熱帯医学専攻(熱帯医学修士課程)に、JICA熱帯医学研究コース研修員が入学する形で同コースが実施された。

同専攻は、熱帯地における主として感染症の臨床および公衆衛生に関する幅広い知識と技術を4月から7月にかけての講義及び実習で学び、海外熱帯医学臨床研修をタイで8月に行い、9月から各教室で、研究・修士論文作成を行うことを通して、計1年間で問題発見・解決能力を身につけることを目的としている。

平成18年4月に、同コースから10名(マレーシア1、メキシコ1、ケニア3、タンザニア2、シエラレオネ1、モザンビーク1、ギニア1)が、日本人2名と共に同課程を開始し、平成19年3月には、論文発表会にて修士論文(下記)を発表し、審査の結果、11名が修士を授与されている。

同専攻の特徴的な教授法としては、(1)対象を臨床経験2年以上の医師とし、講義実習を、臨床場面で有用な症候論的アプローチによるカリキュラム編成をしていること、(2)複数国からのJICA研修員と日本人学生がさまざまなグループ学習を通して熱帯医学現場でもある国際環境下での共同作業における技術、態度を身につける事が出来ること、(3)全ての講義及び実習を、英語を用いて行っていることから、英語によるコミュニケーション能力が1年間で著しく向上することなどがあげられる。

(修士論文題目)

- Comparative study of anti-retrovirus therapy management by Provincial and District hospitals in Chiang Mai, Thailand
- Assessment of knowledge and perceptions on hydrocele and Elephantiasis among residents of Dar-es Salaam Region, Tanzania
- A comparative study of control and prevention of HIV/AIDS and Tuberculosis in Japan and Mozambique
- MOLECULAR EPIDEMIOLOGY OF ROTAVIRUS: The Genetic Relationships among VP7 Genes of G1 Rotavirus Strains Dominant in Honjo, Akita, Japan during the 10-year Period between 1986 and 1997
- Establishment of ENTAMOEBA HISTOLYTICA infection in experimental rats
- Decoy effect of non-susceptible snail hosts for the control of Schistosomiasis.

- Functional modification of the NADPH oxidase by complementary peptides
- Chemotaxis of *Brugia pahangi* infective larvae to sodium ion
- Development of a rapid serological screening assay for Yellow Fever Virus infection surveillance in Kenya
- Genetic analysis of HIV-1 Subtype E(CRF 01AE) gag gene of HIV-1 in Thai patients
- Comparative study on surveillance of HIV/AIDS and tuberculosis, problematic issues for effective utilization in Japan and Guinea

(文責：佐藤光)

9. 2 平成18年度に受け入れた外国人研究者

分 野 等	氏 名	国 籍	受入期間	経 費	備 考
分子構造解析	Prisca Susan A.Leano	フィリピン	H19. 2. 26～ H19. 3. 17	C O E	
	Michael O.BACLIG	フィリピン	H18. 7. 9～ H18. 7. 22	C O E	
	Leonora.D.SALDA.GERVACIO	フィリピン	H18. 7. 9～ H18. 7. 22	C O E	
	Huynh Thi Kim Loan	ベトナム	H18. 8. 21～ H18. 9. 9	日本学術 振興会	
	Kyaw-Zin-Thant	ミャンマー	H18. 8. 21～ H19. 3. 31	大学運営経費	
病原因子機能解析	Utpla Mitra	インド	H18. 6. 26～ H18. 8. 18	独立行政法人 国際協力機構	
	Asish Kumar Mukhopadhyay	インド	H18. 6. 26～ H18. 11. 19	独立行政法人 国際協力機構	
	Nguyen Hoai Thu	ベトナム	H18. 11. 24～ H18. 12. 13	J S P S	
感染細胞修飾機構	Ahmad Reza Esmaeli Rastaghi	イラン	H18. 7. 10～ H18. 12. 31	イラン国費	
	Nguen Tran Hien	ベトナム	H18. 10. 8～ H18. 10. 15	C O E	
	I Nyoman Kandun	インドネシア	H18. 10. 9～ H18. 10. 12	C O E	
	Pathom Sawanpanyalert	タイ	H18. 10. 10～ H18. 10. 12	C O E	
	Luningning P.Elio-Villa	フィリピン	H18. 10. 10～ H18. 10. 13	C O E	
	Haward Engers	カナダ	H18. 10. 16～ H18. 10. 22	C O E	
感染症予防治療	Panita Pathipvanich	タイ	H19. 3. 21～ H19. 3. 26	大学運営経費	
	Prattana Leenasirimakul	タイ	H19. 3. 21～ H19. 3. 26	大学運営経費	
	Pacharee Kantipong	タイ	H19. 3. 21～ H19. 3. 26	大学運営経費	
	Atchariya Lukebua	タイ	H19. 3. 22～ H19. 3. 27	大学運営経費	
	Paul Kilgore	アメリカ	H18. 6. 27～ H18. 6. 29	寄付金(JICE)	
	Justin Francis Dohaerty	イギリス	H18. 7. 2～ H18. 7. 10	C O E	
	Phan Le Thanh Huong	ベトナム	H19. 2. 24～ H19. 3. 10	J S P S	
	Nguyen Thi Hien Anh	ベトナム	H19. 2. 24～ H19. 3. 24	J S P S	
生物環境	Le Thi Quynh Mai	ベトナム	H18. 6. 10～ H18. 6. 24	J S P S	
	Nguyen Binh Minh	ベトナム	H18. 6. 10～ H18. 6. 30	J S P S	

分 野 等	氏 名	国 籍	受入期間	経 費	備 考
	Thai Thi Cam Hong	ベ ト ナ ム	H18. 6. 27～ H18. 7. 9	J S P S	
	Dang Tuan Dat	ベ ト ナ ム	H18. 10. 7～ H18. 10. 16	J S P S	
	Nguyen Thi Kim Tien	ベ ト ナ ム	H18. 10. 8～ H18. 10. 15	J S P S	
	Bui Trong Chien	ベ ト ナ ム	H18. 10. 8～ H18. 10. 15	J S P S	
	Dang Duc Anh	ベ ト ナ ム	H18. 10. 8～ H18. 10. 16	J S P S	
	Le Khanh Thuan	ベ ト ナ ム	H18. 10. 9～ H18. 10. 15	J S P S	
	Ngo Tuan Cung	ベ ト ナ ム	H18. 10. 21～ H18. 11. 10	J S P S	
	Pham Quang Thai	ベ ト ナ ム	H19. 2. 24～ H19. 3. 17	J S P S	
疾 病 生 態	Young-Mo KOO	韓 国	H18. 7. 23～ H18. 7. 26	大学運営経費	
	Reidar Krummradt Lie	ノルウェー	H18. 7. 23～ H18. 7. 26	大学運営経費	
	Janis Lazdins	ベネゼエラ	H18. 10. 1～ H18. 10. 2	W H O	
	Prasit Palittapongarnpim	タ イ	H18. 10. 4～ H18. 10. 5	W H O	
	Supornchai Kongpatanakul	タ イ	H18. 10. 6～ H18. 10. 7	W H O	
	Wongwiwat Tassaneeyakul	タ イ	H18. 10. 7～ H18. 10. 14	W H O	
	Lakshmanan Jeyaseelan	イ ン ド	H18. 10. 14～ H18. 10. 17	W H O	
	Luping Qin	中 国	H18. 10. 17～ H18. 10. 22	W H O	
	Wei qing Pan	中 国	H18. 10. 19～ H18. 10. 23	W H O	
	Soisungwan Satarug	タ イ	H18. 10. 24～ H18. 10. 28	W H O	
	Christina Torres	フィリピン	H18. 10. 28～ H18. 11. 2	W H O	FERCAP: The Forum for Ethical Review Committees in Asia and the Western Pacific Region
	Vivi Chokeyvivat	タ イ	H18. 10. 28～ H18. 11. 1	W H O	
	Juntra Karbwang	タ イ	H18. 10. 30～ H18. 11. 2	W H O	
	Jose Fernando Florez Arango	コロンビア	H18. 11. 4～ H18. 11. 8	COE/WHO	
	Chitr Sitti-amorn	タ イ	H18. 11. 5～ H18. 11. 9	C O E	
	Kesara Na-Bangchang	タ イ	H18. 11. 5～ H18. 11. 8	C O E	

分野等	氏名	国籍	受入期間	経費	備考
	Yupin Lawanprasekt	タイ	H18.11.5～ H18.11.9	C O E	
	Sangkae Chamanawakit	タイ	H18.11.5～ H18.11.8	COE/WHO	
	Charcrin Na-Bangchang	タイ	H18.11.5～ H18.11.7	COE/WHO	
	Arunachalam Rajagopal	インド	H18.11.5～ H18.11.7	W H O	
	Janis Lazdins	ベネゼエラ	H18.11.7～ H18.11.9	W H O	
	Douglas Keene	アメリカ	H18.11.30～ H19.12.3	W H O	
	Ivan Velez	コロンビア	H18.11.30～ H18.12.3	W H O	
	Sujith Chandy	インド	H18.11.30～ H18.12.3	W H O	
	Jia He	中国	H18.11.30～ H18.12.3	W H O	
	Jinhong Hu	中国	H18.11.30～ H18.12.3	W H O	
	Supornchai Kongpatanakul	タイ	H18.11.30～ H18.12.3	W H O	
	Cheng WU	中国	H18.11.30～ H18.12.3	大学運営経費	
	Lin Luo	中国	H18.11.30～ H18.12.3	大学運営経費	
	Kesara Na-Bangchang	タイ	H18.12.1～ H19.12.2	国立大学法人等	
	Chitr Sitthiamorn	タイ	H18.12.1～ H19.12.2	国立大学法人等	
	Vichai Chokevivat	タイ	H18.12.1～ H19.12.3	国立大学法人等	
	Juntra Karbwang	タイ	H18.12.1～ H19.12.5	W H O	
センター	Brian Greenwood	イギリス	H18.10.6～ H18.10.14	大学運営経費	
	Alice Margaret Greenwood	イギリス	H18.10.6～ H18.10.14	大学運営経費	
	Pacharee Kantipong	タイ	H18.10.10～ H18.10.15	大学運営経費 / 自費	
	Saiyud Moolphate	タイ	H18.10.10～ H18.10.17	大学運営経費	

10 研究成果の発表状況

10. 1 研究業績

—分子構造解析分野—

- 1) Paresh Sumatilal Shah, Mariko Tanaka, Afjal Hossain Khan, Edward Gitau Matumbi Mathenge, Isao Fuke, Mitsuo Takagi, Akira Igarashi, Kouichi Morita : Molecular characterization of attenuated Japanese encephalitis live vaccine strain ML-17. Vaccine, 24. 402-411, 2006.
- 2) 森田公一：アジアにおける日本脳炎疫学状況. 小児科, 47. 296-302, 2006.
- 3) Islam MA, Ahmed MU, Begum N, Chowdhury NA, Khan AF, Parquet MC, Bipolo S, Inoue S, Hasebe F, Suzuki Y, Morita K : Molecular Characterization and Clinical Evaluation of Dengue Outbreak in 2002 in Bangladesh. Japanese Journal of Infectious Diseases, 59. 85-91, 2006.
- 4) Aoki C, Hidari KIPJ, Itonori S, Yamada A, Takahashi N, Kasama T, Hasebe F, Islam M A, Hatano K, Matsuoka K, Taki T, Guo C -T, Takahashi T, Sakano Y, Suzuki T, Miyamoto D, Sugita M, Terunuma D, Morita K and Suzuki Y : Identification and Characterization of Carbohydrate Molecules in Mammalian Cells Recognized by Dengue Virus Type 2. Journal of Biochemistry, 139. 607-614, 2006.
- 5) 森田公一：ヘニパウイルス感染症. 化学療法の領域, 22(7). 56-60, 2006.
- 6) 森田公一：西ナイルウイルスの現状と問題点. 成人病と生活習慣病, 36(8). 910-913, 2006.
- 7) Fuxun Yu, Nor Shahidah Khairullah, Shingo Inoue, Vijayamalar Balasubramaniam, Stella Joan Berendam, Leok Kin Teh, Nik Shamsiah Wan Ibrahim, Sohayati Abdul Rahman, Sharifah Syed Hassan, Futoshi Hasebe, Mangalam Sinniah and Kouichi Morita : Serodiagnosis Using Recombinant Nipah Virus Nucleocapsid Protein Expressed in Escherichia coli. J. Clin. Microbiol., 44. 3134-3138, 2006.
- 8) 森田公一：西ナイルウイルスとワクチン開発. 感染炎症免疫, 36(3). 242-244, 2006.
- 9) 長谷部 太, 森田公一：デングウイルス研究の最前線. 医学のあゆみ, 21(8). 845-848, 2006.
- 10) Parida M M, Santhosh S R, Dash P K, Tripathi Saxena N K, Ambuj P S, Sahni A K, Rao P V Lakshmana & Morita K : Development and Evaluation of Reverse Transcription-Loop-Mediated Isothermal Amplification Assay for Rapid and Real-Time Detection of Japanese Encephalitis Virus. J.Clin. Microbiol., 44. 4172-4178, 2006.

- 11) Kanzawa N, Nishigaki K, Hayashi T, Ishii Y, Furukawa S, Niino A, Yasui F, Kohara M, Morita K, Matsushima K, Le M Q, Masuda T & Kannagi M : Augmentation of chemokine production by severe acute respiratory syndrome coronavirus 3a/X1 and 7a/X4 proteins through NF- κ B activation. FEBS Letters, 22. 6807–6812, 2006.

— 病原因子機能解析分野 —

- 12) Yamasaki E, Wada A, Kumatori A, Nakagawa I, Funao J, Nakayama M, Hisatsune J, Kimura M, Moss J, Hirayama T : *Helicobacter pylori* vacuolating cytotoxin induces activation of the proapoptotic proteins Bax and Bak, leading to cytochrome c release and cell death, independent of vacuolation. J Biol Chem, 286(16). 11250–11259, 2006.
- 13) Nakayama M, Hisatsune J, Yamasaki E, Nishi Y, Wada A, Kurazono H, Sap J, Yahiro K, Moss J, Hirayama T : Clustering of *Helicobacter pylori* VacA in lipid rafts, mediated by its receptor, receptor-like protein tyrosine phosphatase beta, is required for intoxication in AZ-521 cells. Infect Immun, 74(12). 6571–6580, 2006.
- 14) Isomoto H, Urata M, Kawazoe K, Matsuda J, Nishi Y, Wada A, Ohnita K, Hirakata Y, Matsuo N, Inoue K, Hirayama T, Kamihira S and Kohno S : Endoscope disinfection using chlorine dioxide in an automated washer-disinfector. J. Hosp. Infect., 63(3). 298–305, 2006.

— 感染細胞修飾機構分野 —

- 15) Putaporntip C, Jongwutiwes S, Iwasaki T, Kanbara H, Hughes AL : Short communication: Ancient common ancestry of the merozoite surface protein 1 of *Plasmodium vivax* as inferred from its homologue in *Plasmodium knowlesi*. Molecular & Biochemical Parasitology, 146. 105–108, 2006.
- 16) Rivera WL, Santos SR, Kanbara H : Prevalence and genetic diversity of *Entamoeba histolytica* in an institution for the mentally retarded in the Philippines. Parasitol Res, 98. 106–110, 2006.
- 17) Talabnin K, Yagi H, Takahashi N, Suzuki T, Kato K, Uemura H, Saicua P, Kaewkes S, Wongkham S, Suzuki Y, Sripan B : Glycobiological study of adult *Opisthorchis viverrini* : Characterization of N-linked oligosaccharides. Mol Biochem Parasitol, 147(2). 230–233, 2006.
- 18) Rubin-de-Celis SS, Uemura H, Yoshida N, Schenkman S : Expression of trypomastigote trans-sialidase in metacyclic forms of *Trypanosoma cruzi* increases parasite escape from its parasitophorous vacuole. Cell Microbiol, 8(12). 1888–1898, 2006.
- 19) Maeno Y, Nakazawa S, Dao LD, Tuan NV, Giang ND, Hanh TV, Taniguchi K : Osteopontin is involved in Th1-mediated immunity against *Plasmodium falciparum* infection in a

holoendemic malaria region in Vietnam. *Acta Tropica*, 98(3). 305-310, 2006.

- 20) Maeno Y, Nakazawa S, Yamamoto N, Shinzato M, Nagashima S, Tanaka K, Sasaki J, Rittling SR, Denhardt DT, Uede T, Taniguchi K : Osteopontin participates in Th1-mediated host resistance against nonlethal malaria parasite *Plasmodium chabaudi chabaudi* infection in mice. *Infect Immun*, 74(4). 2423-2427, 2006.

—寄生行動制御分野—

- 21) 青木克己：住血吸虫症の制圧をめざして。医学のあゆみ別冊，医歯薬出版。133-138，2006。
- 22) 青木克己：アニサキス症。今日の治療指針 2006年版。188-189，2006。
- 23) Kojima S, Aoki Y, Ohta N, Tateno S, Takeuchi T : School-health-based parasite control initiatives: extending successful Japanese policies to Asia and Africa. *Trends Parasitol.*, 23(2). 54-57, 2006.
- 24) Shigeno S, Fujimaki Y, Toriyama K, Ichinose A, Mitsui Y, Aoki Y, Kimura E : Temporary shift of microfilariae of *Brugia Pahangi* from the lungs to muscles in Mongolian Jirds, *Meriones unguiculatus*, after a single injection of diethylcarbamazine. *J. Parasitol.*, 92(5). 1075-1080, 2006.
- 25) 青木克己：糸状虫症。医学大辞典（南山堂） 第19版。1027-1027，2006。
- 26) 青木克己：バンクロフト糸状虫。医学大辞典（南山堂） 第19版。2023-2024，2006。
- 27) 青木克己：バンクロフト糸状虫症。医学大辞典（南山堂） 第19版。2024-2024，2006。
- 28) 青木克己：リンパ系フィラリア症。医学大辞典（南山堂） 第19版。2623-2623，2006。

—炎症細胞機構分野—

- 29) Sakamoto K, Kuribayashi F, Nakamura M, Takeshige K : Involvement of p38 MAP kinase in not only activation of the phagocyte NADPH oxidase induced by formyl-methionyl-leucyl-phenylalanine but also determination of the extent of the activity. *J Biochem*, 140(5). 739-745, 2006.

—病変発現機序分野—

- 30) Obara M, Yoshii K, Kawata T, Hayasaka D, Goto A, Mizutani T, Kariwa H, Takashima I : Development of an enzyme-linked immunosorbent assay for serological diagnosis of tick-borne encephalitis using subviral particles. *J Virol Methods*, 134. 55-60, 2006.
- 31) Shigeno S, Fujimaki Y, Toriyama K, Ichinose A, Mitsui Y, Aoki Y, Kimura E : Temporary shift of microfilariae of *Brugia pahangi* from the lungs to muscles in Mongolian jirds, *Meriones*

- unguiculatus, after a single injection of diethylcarbamazine. J Parasitol, 92(5). 1075-1080, 2006.
- 32) Ichikawa T, Yanagi K, Motoyoshi Y, Hamasaki K, Nakao K, Toriyama K, Eguchi K : Two cases of non-alcoholic steatohepatitis with development of hepatocellular carcinoma without cirrhosis. J Gastroenterol Hepatol, 21(12). 1865-1866, 2006.
 - 33) Senba M, Kumatori A, Fujita S, Jutavijittum P, Yousukh A, Moriuchi T, Nakamura T, Toriyama K : The prevalence of human papillomavirus genotypes in penile cancers from northern Thailand. J Med Virol, 78(10). 1341-1346, 2006.
 - 34) Jutavijittum P, Jiviriyawat Y, Yousukh A, Kunachiwa W, Toriyama K : Genotypes of hepatitis B virus among voluntary blood donors in northern Thailand. Hepatol Res, 35(4). 263-266, 2006.
 - 35) Takeshita S, Nakamura H, Kawakami A, Fukushima T, Gotoh T, Ichikawa T, Tsujino A, Ida H, Toriyama K, Hayashi T, Eguchi K : Hepatitis B-related polyarteritis nodosa presenting necrotizing vasculitis in the hepatobiliary system successfully treated with lamivudine, plasmapheresis and glucocorticoid. Intern Med, 45(3). 145-149, 2006.
 - 36) Kurita S, Koyama J, Onizuka S, Motomura K, Watanabe H, Watanabe K, Senba M, Apicella MA, Murphy TE, Yoneyama H, Matsushima K, Nagatake T, Oishi K : Dynamics of dendritic cell migration and the subsequent induction of protective immunity in the lung after repeated airway challenges by nontypeable Haemophilus influenzae outer membrane protein. Vaccine, 24(3132). 5896-5903, 2006.
 - 37) Yoshikawa T, Iwasaki T, Ide-Hosonuma M, Yoneyama M, Fujita T, Horie H, Miyazawa M, Abe S, Simizu B, Koike S : Role of the alpha/ beta interferon response in the acquisition of susceptibility to poliovirus by kidney cells in culture. J Virol, 80(9). 4313-4325, 2006.
 - 38) Kawada H, Iwasaki T, Loan L, Tien TK, Mai NT, Shono Y, Katayama Y, Takagi M : Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin-impregnated latticework plastic strips against *Aedes aegypti* and analysis of environmental factors affecting its efficacy in My Tho City, Tien Giang, Vietnam. Am J Trop Med Hug, 75(6). 1153-1157, 2006.
 - 39) Putaporntip C, Jongwutiwes S, Iwasaki T, Kanbara H, Hughes AL : Ancient common ancestry of the merozoite surface protein 1 of *Plasmodium vivax* as inferred from its homologue in *Plasmodium knowlesi* . Mol Biochem Parasitol, 146(1). 105-108, 2006.

—感染症予防治療分野—

- 40) Wichukchinda N, Nakayama EE, Rojanawiwat A, Pathipvanich P, Auwanit W, Vongsheree S, Ariyoshi K, Sawanpanyalert P, Shioda T : Protective effects of IL4-589T and

- RANTES-28G on HIV-1 disease progression in infected Thai females. *AIDS*, 20(2). 189–196, 2006.
- 41) **Xiao YQ, Freire-de-Lima CG, Janssen WJ, Morimoto K, Lyu D, Bratton DL, Henson PM** : Oxidants selectively reverse TGF- β suppression of proinflammatory mediator production. *J Immunol*, 176(2). 1209–1217, 2006.
 - 42) **Masaki H, Nagatake T, Asoh N, Yoshimine H, Watanabe K, Watanabe H, Oishi K, Rikitomi N, Matsumoto K** : Significant reduction of nosocomial pneumonia after introduction of disinfection of upper airways using povidone-iodine in geriatric wards. *Dermatology* 212(1). 98–102, 2006.
 - 43) **加地千春, 渡邊 浩** : 災害と新興感染症の危険性. *治療学*, 40(2). 157–160, 2006.
 - 44) **Oishi K, Yoshimine H, Watanabe H, Watanabe K, Tanimura S, Kawakami K, Iwagaki A, Nagai H, Goto H, Kudoh S, Kuriyama T, Fukuchi Y, Matsushima T, Shimada K, Matsumoto K, Nagatake T** : Drug-resistant genes and serotypes of pneumococcal strains of community-acquired pneumonia among adults in Japan. *Respirology* 11(4). 429–436, 2006.
 - 45) **Morimoto K, Janssen WJ, Fessler MB, McPhillips KA, Borges VM, Bowler RP, Xiao YQ, Kench JA, Henson PM, Vandivier RW** : Lovastatin enhances clearance of apoptotic cells (efferocytosis) with implications for chronic obstructive pulmonary disease. *J Immunol*. 176(12). 7657–7665, 2006.
 - 46) **Kurita S, Koyama J, Onizuka S, Motomura K, Watanabe H, Watanabe K, Senba M, Apicella MA, Murphy TF, Yoneyama H, Matsushima K, Nagatake T, Oishi K** : Dynamics of dendritic cell migration and the subsequent induction of protective immunity in the lung after repeated airway challenges by nontypeable *Haemophilus influenzae* outer membrane protein. *Vaccine*, 24(3132). 5896–5903, 2006.
 - 47) **Jehle AW, Gardai SJ, Li S, Linsel-Nitschke P, Morimoto K, Janssen WJ, Vandivier RW, Wang N, Greenberg S, Dale BM, Qin C, Henson PM, Tall A** : ATP-binding cassette transporter A7 enhances phagocytosis of apoptotic cells and associated ERK signaling in macrophages. *J Cell Biol.*, 174(4). 547–556, 2006.
 - 48) **Nakaoka H, Lawson L, Squire SB, Coulter B, Ravn P, Brock I, Hart CA, Cuevas LE** : Risk for tuberculosis among children. *Emerg Infect Dis*, 12(9). 1383–1388, 2006.
 - 49) **Qin L, Watanabe H, Yoshimine H, Guio H, Watanabe K, Kawakami K, Iwagaki A, Nagai H, Goto H, Kuriyama T, Fukuchi Y, Matsushima T, Kudoh S, Shimada K, Matsumoto K, Nagatake T, Mizota T, Oishi K** : Antimicrobial susceptibility and serotype distribution of *Streptococcus pneumoniae* isolated from patients with community-acquired pneumonia and

- molecular analysis of multidrug-resistant serotype 19F and 23F strains in Japan. *Epidemiol. Infect.*, 134(6). 1188-1194, 2006.
- 50) Snoeck J, Kantor R, Shafer RW, Van Laethem K, Deforche K, Carvalho AP, Wynhoven B, Soares MA, Cane P, Clarke J, Pillay C, Sirivichayakul S, Ariyoshi K, Holguin A, Rudich H, Rodrigues R, Bouzas MB, Brun-Vezinet F, Reid C, Cahn P, Brigido LF, Grossman Z, Soriano V, Sugiura W, Phanuphak P, Morris L, Weber J, Pillay D, Tanuri A, Harrigan RP, Camacho R, Schapiro JM, Katzenstein D, Vandamme AM : Discordances between interpretation algorithms for genotypic resistance to protease and reverse transcriptase inhibitors of human immunodeficiency virus are subtype dependent. *Antimicrob. Agents. Chemother.*, 50(2). 694-701, 2006.
- 51) Pumpradit W, Ariyoshi K, Petkanchanapong W, Wichukchinda N, Chaiprasert A, Rojanawat A, Sawanpanyalert P, Pathipvanich P: *Mycobacterium avium* and *Burkholderia pseudomallei* (Meliodosis) coinfection in an HIV-positive patient. *Asian Pac. J. Allergy Immunol.*, 24(4). 239-243, 2006.
- 52) 黒木麗喜, 大石和徳: 肺炎球菌ワクチンを一度接種すると, 再投与してはいけないのか? 治療, 88(-1). 717-719, 2006.
- 53) 吉嶺裕之: 予防接種の安全性と有効性. 今日の治療指針2006. 174-175, 2006.
- 54) 渡邊 浩, 土橋佳子: 臓器感染症の特性と抗菌化学療法: 髄膜炎. 日本内科学会雑誌, 95(11). 2232-2237, 2006.
- 55) 有吉紅也: 教室紹介. ウイルス, 56(2). 261-263, 2006.
- 56) 大石和徳, 陳 蒙: 肺炎球菌ワクチンによる肺炎制御戦略. 分子呼吸器病, 10(6). 443-448, 2006.

—生物環境分野—

- 57) Kawada H, Tatsuta H, Arikawa K & Takagi M : Comparative study on the relationship between photoperiodic host-seeking behavioral patterns and the eye parameters of mosquitoes. *Journal of Insect Physiology.*, 52. 67-75, 2006.
- 58) Tuno N, Githeko A K, Nakayama T, Minakawa N, Takagi M, Yan G : The association between phytoplankton, *Ryopalosolen* species (Chlorophyta;Chloropyceae), and *Anopheles gambiae sensu lato* (Diptera:Culicidae) larval abundance in western Kenya. *Ecological Research* , 21(3). 476-482, 2006.
- 59) Tsuda Y, Suwonkerd W, Chawprom S, Prajakwong S, Takagi M : Different spatial Distribution of *Aedes aegypti* and *Aedes albopictus* along an urban-rural gradient and the rela-

- ting environmental factors examined in three vilages in northern Thailand. Journal of the American Mosquito Control Association, 22(2). 222-228, 2006.
- 60) **Kawada H, Saita S, Shimabukuro K, Hirano M, Koga M, Iwashita T, Takagi M** : Mosquito larvicidal effectiveness of EcoBio-BlockR S: a novel integrated water-purifying concrete block formulation containing insect growth regulator pyriproxyfen. Journal of the American Mosquito Control Association, 22(3). 451-456, 2006.
- 61) **Temu E A, Kimani I, Tuno N, Kawada H, Minjas J N, Takagi M** : Monitoring chloroquine resistance using *Plasmodium falciparum* parasites isolated from wild mosquitoes in Tanzania. American Journal of Tropical Medicine & Hygiene, 75(6). 1182-1187, 2006.
- 62) **Kawada H, Iwasaki T, Loan L L, Tien T K, Mai NT N, Shono Y, Katayama Y, Takagi M** : Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin-impregnated latticework plastic strips against *Aedes Aegypti* (L.) and analysis of environmental factors affecting its efficacy in my Tho city, Tien Giang, Vietnam. American Journal of Tropical Medicine & Hygiene, 75(6). 1153-1157, 2006.
- 63) **Higa Y, Hoshino K, Tsuda Y, Kobayashi M** : Dry-ice trap and human bait collection of mosquitoes in the eastern part of Hokkaido, Japan. Medical Entomology and Zoology, 57(2). 93-98, 2006.
- 64) **川田 均** : 新規常温揮散性ピレスロイド化合物メトフルトリンを応用した疾病媒介蚊防除製剤の開発. 殺虫剤研究班のしおり, 77. 46-56, 2006.
- 65) **Tuno N, Kazuo H T, Yamashita H, Osawa N, Tanaka C** : Tolerance of Drosophila Flies to Ibotenic Acid Poisons in Mushrooms.. Journal of Chemical Ecology, 33(2). 311-317, 2006.
- 66) **Tsuda Y, Higa Y, Kurahashi H, Hayashi T, Hoshino K, Komagata O, Isawa H, Kasai S, Sasaki T, Tomita T, Sawabe K, Nihei N and Kobayashi M** : Dry-ice trap collection of mosquitoes at urban areas surrounding Tokyo, Japan in 2003 and 2004. Med. Entomol. Zool., 57(2). 75-82, 2006.
- 67) **Tsuda Y, Higa Y, Kasai S, Isawa H, Hoshino K, Hayashi T, Komagata O, Sawabe K, Sasaki T, Tomita T, Nihei N, Kurahashi H and Kobayashi M** : Results of mosquito collection at four areas near Narita International Airport, Japan, in 2003 and 2004. Med. Entomol. Zool., 57(3). 211-218, 2006.

—社会環境分野—

- 68) **磯 望, 後藤健介, 黒木貴一, 大平明夫** : 台風14号による大淀川下流域の氾濫被害—衛星画像と現地調査による分析—. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集(30). 0. 25-28, 2006.

- 69) 田中芳樹, 後藤健介, 後藤恵之輔: 衛星リモートセンシングを用いた台風9918号による熊本災害の調査解析. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集(30). 0. 73-76, 2006.
- 70) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: アンケートとGISによる福岡県西方沖地震の実態調査の試み. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集(30). 0. 127-130, 2006.
- 71) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: GISによる2万5千分の1地形図からの詳細土地利用データ作成とその利用. 福岡教育大学紀要(55). 0. 39-48, 2006.
- 72) 依田健志, 樂得康之, 溝田 勉: タイ国パンガー県におけるスマトラ沖地震での津波による健康被害. 東京医科大学雑誌, 64(2). 181-182, 2006.
- 73) Tanimura S, Mizota T : Regional difference in Specialization coefficients of physicians in Nagasaki, Japan. Acta Medica Nagasakiensia, 49(3). 99-105, 2006.
- 74) Mizota T, Shin L, Watanabe H : Antimicrobial susceptibility and genetic characteristics of *Haemophilus influenzae* isolated from patients with respiratory tract infections between 1987 and 2000, including β -lactamase-negative ampicillin-resistant strains. Epidemiol.Infect. 665-668, 2006.
- 75) 溝田 勉, 後藤恵之輔: 感染症に関係した世界三大土木事業. 日本土木学会雑誌. 60-69, 2006.
- 76) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介, 張 麻衣子: 2003年九州豪雨時の御笠川における実体鏡による流速推定. 地図, 44(4). 1-8, 2006.
- 77) Qin L, Watanabe H, Yoshimine H, Guio H, Watanabe K, Kawakami K, Iwagaki A, Nagai H, Goto H, Kuriyama T, Fukuchi Y, Matsushima T, Kudoh S, Shimada K, Matsumoto K, Nagatake T, Mizota T, Oishi K : Antimicrobial susceptibility and serotype distribution of *Streptococcus pneumoniae* isolated from patients with community-acquired pneumonia and molecular analysis of multidrug-resistant serotype 19F and 23F strains in Japan. Epidemiol. Infect., 134(6). 1188-1194, 2006.
- 78) Tanimura S, Kuroiwa C : Proportional Symbol Mapping in R. Journal of Statistical Software, 15(5). 2006.
- 79) 谷村 晋: 地理情報システム(GIS)とヘルスリテラシー. からだの科学, 250. 76-79, 2006.
- 80) 谷村 晋: 推定汚染源とその周辺住民の健康を評価する統計モデル. 放射線科学, 49(4). 123-132, 2006.
- 81) Anh DD, Thiem VD, Fischer TK, Canh DG, Minh TT, THo LH, Man NV, Luan LT, Kilgore P, Seidlein LV, Glass RI, Goto K, Tanimura S : The burden of Rotavirus Diarrhea in Khanh Hoa Province, Vietnam. The Pediatric Infectious Disease Journal , 25(1). 37-40, 2006.
- 82) Bangoura L, Goto K : Comparative study on Surveillance system of HIV/AIDS and Tuberculo-

sis, Problematic issues for utilization in Guinea and Japan. ITM-Nagasaki., 21(6). 2-45, 2006.

- 83) **Amiel OCN, Tanimura S** : A Comparative study of Control and Prevention of HIV/AIDS and Tuberculosis in Japan and Mozambique. ITM-Nagasaki., 21(6). 48-92, 2006.

— 疾病生態分野 —

- 84) **Yoshiura KI, Kinoshita A, Ishida T, Ninokata A, Ishikawa T, Kaname T, Bannai M, Tokunaga K, Sonoda S, Komaki R, Ihara M, Saenko VA, Alipov GK, Sekine I, Komatsu K, Takahashi H, Nakashima M, Sosonkina N, Mapendano CK, Ghadami M, Nomura M, Liang DS, Miwa N, Kim DK, Garidkhuu A, Natsume N, Ohta T, Tomita H, Kaneko A, Kikuchi M, Russomando G, Hirayama K, Ishibashi M, Takahashi A, Saitou N, Murray JC, Saito S, Nakamura Y, Niikawa N** : A SNP in the ABCC11 gene is the determinant of human earwax type. *Nat Genet*, 38(3). 324-330, 2006.
- 85) **Sakihama N, Ohmae H, Bakote'e B, Kawabata M, Hirayama K, Tanabe K** : Limited allelic diversity of *Plasmodium falciparum* merozoite surface protein 1 gene from populations in the Solomon Islands. *Am J Trop Med Hyg*, 74(1). 31-40, 2006.
- 86) **平山謙二** : シャーガス病—中南米の厄病神. 別冊・医学のあゆみ 現代寄生虫病事情. 医歯薬出版. 7-12, 2006.
- 87) **Ishii K, Hisaeda H, Duan X, Imai T, Sakai T, Fehling HJ, Murata S, Chiba T, Tanaka K, Hamano S, Sano M, Yano A, Himeno K** : The involvement of immunoproteasomes in induction of MHC class I-restricted immunity targeting *Toxoplasma* SAG1. *Microbes Infect.*, 8(4). 1045-1053, 2006.
- 88) **Yu Chuanxin, Yin Xuren, Mihoko Kikuchi, Hirayama Kenji, Zhu Yinchang** : Sequence analysis of full length cDNA of *Schistosoma japonicum* egg miracidia genes harboring signal sequence. *Chinese journal of Schistosomiasis Control*, 18(1). 10-14, 2006.
- 89) **Jiang-Bing Mu, Toshio Sone, Tetsuo Yanagi, Isao Tada, Mihoko Kikuchi, Kenji Hirayama** : Population Polymorphism of *Trypanosoma cruzi* in Latin America indicated by Proteome analysis and by in vitro amastigote proliferation. *Tropical Medicine and Health*, 34(4). 167-174, 2006.
- 90) **Chen Hong-gen, Zeng Xiao-jun, Ge Jun, Jiang Wei-sheng, Mihoko Kikuchi, Kenji Hirayama** : Study of the efficacy of a monoclonal antibody biotin-avidin system for the diagnosis of schistosomiasis japonica. *Chin J Prev Med*, 40(4). 244-247, 2006.
- 91) **Shibata H, Yasunami M, Obuchi N, Takahashi M, Kobayashi Y, Numano F, Kimura A** : Direct determination of single nucleotide polymorphism haplotype of NFKBIL1 promoter

- polymorphism by DNA conformation analysis and Its application to association study of chronic inflammatory diseases. *Human Immunology* , 67. 363-373, 2006.
- 92) **Takahashi M, Yasunami M, Kubota S, Tamai H, Kimura A.** : HLA-DPB1*0202 is associated with a predictor of good prognosis of Graves' disease in the Japanese. *Hum Immunol*, 67. 47-52, 2006.
- 93) **Sone T, Oshiro S, Matsushita S and Hirayama K** : Proteome Analysis of *Trypanosoma cruzi* CL Brener; A reference strain of genome project. 11th International Congress of Parasitology ICOPA XI, Glasgow (Scotland, United Kingdom), August 6-11, 2006. *International Proceedings*, Ed by MEDIMOND, 2006. 593-596, 2006.
- 94) **Kenji Hirayama.** : Launch of a New Diploma, MSc & PhD Programme in Research & Development of Products to meet Public Health Needs. 2nd Korea-Japan Joint Symposium of Clinical Pharmacology and therapeutics 2006. November 10-11, Ed by Koreas Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics, pp123-126, 2006. 123-126, 2006.
- 95) **平山謙二** : マラリア. ベッドサイドで役立つ微生物検査ガイド, 編集: 河野茂・平潟陽一, 文光堂, 2006年11月15日発刊. 239-242, 2006.

—熱帯感染症研究センター—

- 96) **Okamoto N, Saruki N, Mikami H, Yamashita K, Maruyama Y, Yano T, Imamura Y, Kaneko S, Tanaka H** : 5-year survival rates for primary cancer sites at cancer-treatment-oriented hospitals in Japan. *Asian Pac J Cancer Prev*, 7(1). 46-50, 2006.
- 97) **太田保之, 荒木憲一, 本田純久** : 雲仙・普賢岳噴火災害被災住民の長期経過後の精神的問題. *精神医学*, 48. 241-246, 2006.
- 98) **Minakawa N, Tanaka S, Bogatov VV** : Occurrence of *Eurycercus* (Teretifrons) *glacialis* (Liljeborge, 1887) (Cladocera, Chydoridae) on Sakhalin. *Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin*, 2. 111-114, 2006.
- 99) **Mushinzimana E, Munga S, Minakawa N, Feng L Li, Bian C L, Kitron U, Schmidt C, Beck L, Zhou G, Githeko AK, Yan G** : Landscape determinants and remote sensing of anopheline mosquito larval habitats in the western Kenya highlands. *Malar J* , 5(13). 2006.
- 100) **Minakawa N, Omukunda E, Zhou G, Githeko A, Yan G** : Malaria vector productivity in relation to the highland environment in Kenya. *Am J Trop Med Hyg*, 75. 448-453, 2006.
- 101) **Munga S, Minakawa N, Zhou G, Barrack OJ, Githeko AK, Yan G** : Effects of larval competitors and predators on oviposition behavior of *Anopheles gambiae* sensu stricto. *J Med Entomol* , 43. 221-224, 2006.

- 102) **Munga S, Minakawa N, Zhou G, Mushinzimana E, Barrack OJ, Githeko AK, Yan G :** Association between land cover types and production of malaria vectors in the western Kenyan highland. *Am J Trop Med Hyg* , 74. 69-75, 2006.
- 103) **Ndenga B, Githeko A, Omukunda E, Munyekenye G, Atieli H, Wamai1 P, Mbogo C, Minakawa N, Zhou G, Yan G :** Population dynamics of malaria vectors in Western Kenya Highlands. *J Med Entomol*, 43. 200-206, 2006.
- 104) **Tuno N, Githeko AK, Nakayama T, Minakawa N, Takagi M, Yan G :** The association between phytoplankton, Rhopalosolen species (Chlorophyta; hlorophyceae), and *Anopheles gambiae sensu lato* (Diptera: Culicidae) larval abundance in western Kenya. *Ecological Research*, 21. 476-482, 2006.
- 105) **Toba N, Sakai A, Aoyagi K, Yoshida S, Honda S, Nakamura T :** Prevalence and involvement patterns of radiographic hand osteoarthritis in Japanese women: the Hizen-Oshima Study. *J Bone Miner Metab*, 24. 344-348, 2006.
- 106) **Taguchi J, Miyazaki Y, Tsutsumi C, Sawayama Y, Ando K, Tsushima H, Fukushima T, Hata T, Yoshida S, Kuriyama K, Honda S, Jinnai I, Mano H, Tomonaga M :** Expression of the myeloperoxidase gene in AC133 positive leukemia cells relates to the prognosis of acute myeloid leukemia. *Leuk Res*, 30. 1105-1112, 2006.
- 107) **Kanagae M, Abe Y, Honda S, Takamura N, Kusano Y, Takemoto T, Aoyagi K :** Determinants of self-rated health among community-dwelling women aged 40 years and over in Japan. *Tohoku J Exp Med* , 210. 11-19, 2006.
- 108) **Hanada H, Honda S, Tokumaru T, Ozawa H :** Association between mother's concern about child rearing and their parenting stress. *Acta Med Nagasaki* , 51. 115-120, 2006.
- 109) **Satou K, Nishiura H :** Basic reproduction number for equine-2 influenza virus A (H3N8) epidemic in racehorse facilities in Japan, 1971. *J Equine Vet Sci*, 26. 310-316, 2006.
- 110) **Nishiura H :** Analysis of a previous smallpox vaccination study: Estimation of the time period required to acquire vaccine-induced immunity as assessed by revaccination. *Southeast Asian J Trop Med Public Health*, 37. 673-680, 2006.
- 111) **Hashizume M, Kondo H, Murakami T, Kodama M, Nakahara S, Lucas M, Wakai S :** Use of rapid diagnostic tests for malaria in an emergency situation after the flood disaster in Mozambique. *Public Health*, 120. 444-447, 2006.
- 112) **Nakamura S, Sarker SA, Wahed MA, Wagatsuma Y, Oku T, Moji K :** Prebiotic effect of dairy fructooligosaccharide intake on weight gain and reduction of acute diarrhea among children in a Bangladesh urban slum : A randomized double-masked placebo-controlled study. *Tropical*

- Medicine and Health, 43. 125-131, 2006.
- 113) Takeuchi S, Li Y, He Y, Zhou H, Moji K, Ohtsuka R, Watanabe C : Behaviors associated with water contact and *Schistosoma japonicum* infection in a rural village, the Dongting Lake region, China. Tropical Medicine and Health , 43. 117-123, 2006.
- 114) Nishikiori N, Abe T, Costa DG, Dharmaratne SD, Kunii O, Moji K : Timing of mortality among internally displaced persons due to the tsunami in Sri Lanka: cross sectional household survey. BMJ , 332. 334-335, 2006.
- 115) Nishikiori N, Abe T, Costa DG, Dharmaratne SD, Kunii O, Moji K : Who died as a result of the tsunami? -Risk factors of mortality among internally displaced persons in Sri Lanka: a retrospective cohort analysis. BMC Public Health, 6(73). 2006.
- 116) Zhunussova T, Shibata Y, Honda S, Musinov D, Tanatova Z, Masadikov A : A case-control study of breast cancer in women living around Semipalatinsk Nuclear Test Site. Nagasaki Med J, 81. 288-292, 2006.
- 117) 横田賢一, 三根真理子, 近藤久義, 本田純久, 朝長万左男, 田川眞須子, 柴田義貞 : 長崎原爆被爆者の健診受診行動. 広島医学, 59. 315-317, 2006.
- 118) 山田真生, 本田純久, 岩永正子, 近藤久義, 三根真理子, 横田賢一, 柴田義貞 : リンパ・造血組織の悪性新生物により死亡した被爆者における白血球数等の経時変化. 広島医学, 59. 333-335, 2006.
- 119) 三根真理子, 柴田義貞, 横田賢一, 鳥山ふみ子, 本田純久, 近藤久義, 太田保之 : 被爆者証言の分析. 広島医学, 59. 348-351, 2006.
- 120) 花田裕子, 本田純久, 小野ミツ : 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度作成についての検討. 子どもの虐待とネグレクト, 8. 247-257, 2006.
- 121) 花田裕子, 本田純久, 小野ミツ : 母親の養育態度に影響する家族・母親・子どもの属性の検討-潜在的児童虐待リスク尺度と属性との関連性-. 子どもの虐待とネグレクト, 8. 258-267, 2006.
- 122) 青柳 潔, 吉田雅文, 錦織信幸, 阿部朋子, 國井 修 : スマトラ沖地震・津波後のスリランカ南部における飲用水および衛生状況. 長崎医学会雑誌, 81(1). 1-4, 2006.
- 123) 近藤裕子, 波川京子, 山本加奈子, 阿部朋子, 大利昌久, 國井 修, 古賀才博, 別所誠一, 門司和彦, 錦織信幸, 広瀬 茂 : 突然の肉親との死別体験における悲嘆の回復過程に関する要因の分析-スマトラ沖大地震・インド洋津波の被災家族の面接調査から. The Journal of Nursing Investigation , 4. 57-61, 2006.
- 124) 國井 修, 錦織信幸 : スマトラ島沖地震津波と感染症.. 医学のあゆみ, 217. 1196-1203, 2006.

- 125) 錦織信幸：スマトラ沖地震津波災害における感染症発生リスクと健康被害. 最新医学, 61(6). 1196-1203, 2006.
- 126) 三根真理子, 柴田義貞, 横田賢一, 濱田 茂, 本田純久, 近藤久義, 太田保之：被爆者証言の分析－健康と被爆の関連から－. 長崎医学会雑誌, 81. 206-209, 2006.
- 127) 山川大介, 三根真理子, 太田保之, 濱田 茂, 本田純久, 柴田義貞：長崎原爆被爆者における心的外傷後ストレス障害とその要因. 長崎医学会雑誌, 81. 210-212, 2006.
- 128) 横田賢一, 本田純久, 三根真理子, 近藤久義, 柴田義貞：長崎原爆被爆者の急性症状に関する情報の確かさ. 長崎医学会雑誌, 81. 226-228, 2006.
- 129) Crump A, Yamamoto T：Japan's health revolution to be bestowed on Africa. Real Health News, 6. 28-31, 2006.
- 130) Yamamoto T, Crump A：Proactive plan to help contain pandemic influenza in Asia. Trop. Med. Health, 34(2). 75-76, 2006.
- 131) Yamamoto T：Japan's contribution in achieving the health related MDGs- Health and Development Initiative (HDI). Journal of International Health, 20(2). 65-66, 2006.
- 132) 多田三千代, 金子 聰, 今村由香, 祖父江友孝：地域がん診療拠点病院における標準的院内がん登録の運用：腫瘍見つけ出し(Casefinding)の重要性について. 診療録管理, 17(3). 27-32, 2006.

－共同研究室－

- 133) 一ノ瀬 昭豊, 和田昭裕：PTA及びモリブデン酸アンモニウムを用いたネガティブ染色の細菌への応用と染色像の比較. 医学生物学電子顕微鏡技術学会会誌, 20(1). 24-27, 2006.
- 134) Shizugi Shigeno, Yasunori Fujimaki, Kan Toriyama, Akitoyo Ichinose, Yoshinori Mitsui, Yoshiki Aoki, and Eisaku Kimura：Temporary shift of microfilariae of *Brugia pahangi* from the lungs to muscles in Mongolian jirds, *Meriones unguiculatus*, after a single injection of diethylcarbamazine. J. Parasitol., 92(5). 1075-1080, 2006.

10. 2 学会発表演題

- 1) 吉居廣朗, 神山陽香, 大石和徳, 田中勇悦, 佐藤裕徳, 山本直樹, 久保嘉直: HeLa細胞におけるCD4非依存性HIV-1の細胞侵入抑制機構. 日本ウイルス学会, 名古屋, 2006年11月19-21日
- 2) 久保嘉直, 横山 勝, 吉居廣朗, 神山陽香, 田中勇悦, 佐藤裕徳, 山本直樹: CXCR4糖鎖付加によるHIV-1感染防御と, その回避機構. 日本ウイルス学会, 名古屋, 2006年11月19-21日
- 3) 神山陽香, 吉居廣朗, 田中勇悦, 佐藤裕徳, 山本直樹, 久保嘉直: ビタミンA類似体 geranylgeranoic acid (GGA)によるHIV-1感染の抑制. 日本ウイルス学会, 名古屋, 2006年11月19-21日
- 4) 中村三千男, 高橋 敬, 前川知之, 栗林 太, 中村三千男: gp91phox細胞内領域のin silico構築. 日本生体防御学会, 北海道大学, 2006年7月27-29日
- 5) 栗林 太, 高田英俊, 原 寿郎, 有賀 正, 藤井仁人, 中村三千男, : 慢性肉芽腫症で見られたnonsense-mediated altered splicingの解析. 日本生体防御学会, 北海道大学, 2006年7月27-29日
- 6) 栗林 太, 中村三千男, 高田 英俊, 大賀正一, 原 寿郎, 川村信明, 有賀 正: 慢性肉芽腫症で見られたnonsense-mediated altered splicingの解析. 第14回食細胞機能異常症研究会, 2006年12月8日
- 7) 前野芳正, 中澤秀介, Dao LD, Tuan NV, Giang ND, Hanh TV, 谷口孝喜: 脳マラリアにおけるマラリア肉芽腫形成へのオステオポンチンの病因的意義. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 8) 上村春樹, 神原廣二, Basuki S, Dachlan YP: アルテスネート・アモディアキン併用療法の遺伝子解析. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 9) 神原廣二, 吉永一未, 前川芳秀, 高木正洋, Dachlan YP, Gerudug IK, Suryanata AAN, Iskandar S: ロンボク, スンバワ島におけるマラリア流行の考察. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 10) 吉川尚男, 呉 志良, 柳 哲雄, パンディ キショール, パンディ バス デブ, ジーバン B. シェルチャンドウ, 神原廣二: ネパール, カトマンドウの小児から分離したブラストシスチス株の遺伝子型と感染由来について. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 11) 井上雅広, 八坂奈津美, 安田幸一, 中村康男, 上村春樹, 神原廣二, 福間利英: Characterization of N-terminal unique amino acid sequences of *Trypanosoma brucei* 14-3-3 proteins

required for dimerization. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日

- 12) 上村春樹, 神原廣二, Schenkman S, Rubin-de-Celis SSC, Yoshida N : *Trypanosoma cruzi* のトランスシアリダーゼはparasitophorous vacuoleからのエスケープに重要である. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 13) 神原廣二, 上村春樹, Basuki S, Dachlan YP : インドネシア, スンバワ島入植地における急速なマラリア流行発生. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 14) 大橋 眞, 上村春樹, 中澤秀介, 神原廣二 : マラリア感染における好中球遊走性レクチンの役割. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 15) Pandey K, Pandey BD, Mallik AK, Sherchand JB, 柳 哲雄, 神原廣二 : Characterization of Leishmania isolates from visceral leishmaniasis (kala-azar) patients in Nepal. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 16) 橘 裕司, 柳 哲雄, Pandey K, 程 訓佳, 神原廣二 : アカゲザルから単離された赤痢アメーバの性状解析. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 17) Nakazawa S, Dao LD, Tuan NV, Maeno Y, Uemura H, Vien HV, Hanh TV, Thuan LK, Moji K, Sunahara T : An outline of the project and case reports of people with a high slidepositive rate in the research site. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 18) Sunahara T, Hung VV, Nam ND, Chinh VD, Trung HD, Thuan LK, Takagi M, Moji K, Nakazawa S : Variability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus*, among and within villages. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 19) Abe T, Tuong TD, Thieu NQ, Hung LX, Thuan LK, Sunahara T, Nakazawa S, Moji K : Mosquito avoidance practice and malaria infection in a minority's community in southern Vietnam. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 20) Maeno Y, Nakazawa S, Dao LD, Tuan NV, Giang ND, Hanh TV, Thuan LK, Taniguchi K : Molecular Epidemiologic Studies of *Plasmodium falciparum* Gametocytes and Analysis of Factors on the Gametocyte Carriage in Vietnam. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 21) Iwagami M, Nakazawa S, Dao LD, Tuan NV, Phuc BQ, Giang ND, Kano S : Microsatel-

- lite DNA polymorphisms of chloroquine resistant *Plasmodium falciparum* in southern part of Vietnam. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 22) 依田健志, 峰松和夫, 阿部朋子, Basuki S, Dachlan YP, 門司和彦, 神原廣二, 樂得康之, 溝田 勉: インドネシア・ロンボク島及びスンバワ島におけるマラリアコントロールプロジェクトの事後評価. 第47回日本熱帯医学会, 第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 23) 上村春樹, Rubin-de-Celis SSC, Yoshida N, 神原廣二, Schenkman S: *Trypanosoma cruzi* のトランスシアリダーゼはparasitophorous vacuoleからのエスケープに重要である. 第59回日本寄生虫学会南日本支部大会, 第56回日本衛生動物学会南日本支部大会 合同大会, 福岡, 2006年10月28-29日
- 24) 川上健司, 木村由美子, 原田義高, 田中健之, 山領 豪: 結核ユニット化病棟におけるGFT-2Gキットの使用経験. 第30回長崎感染症研究会, 長崎市, 2006年3月4日
- 25) 渡邊 浩: インフルエンザ菌によるバイオフィームとマクロライド. 第80回日本感染症学会総会, 東京, 2006年4月20-21日
- 26) 吉嶺裕之, 渡邊 浩, 大石和徳, 有吉紅也: 当院における海外旅行外来の現状と問題点. 第80回日本感染症学会総会, 東京, 2006年4月20-21日
- 27) 小山 純, 鬼塚正三郎, 大間敬太, 有吉紅也, 大石和徳: インフルエンザ菌株特異的抗原の肺感染防御能における役割. 第80回日本感染症学会総会, 東京, 2006年4月20-21日
- 28) 大間敬太, 小山 純, 渡邊 浩, 渡邊貴和雄, 大石和徳: 肺気腫発症マウスにおけるインフルエンザ菌感染モデルの作製の試み. 第80回日本感染症学会総会, 東京, 2006年4月20-21日
- 29) 陳 蒙, 黒木麗喜, 吉嶺裕之, 有吉紅也, 大石和徳: ウガンダのHIV感染者に対する7価肺炎球菌コンジュゲートワクチンと23価肺炎球菌ワクチン併用接種の血清免疫学的効果に関する研究. 第80回日本感染症学会総会, 東京, 2006年4月20-21日
- 30) 杉田麟也, 山中 昇, 渡邊 浩, 杉田 玄, 舟木俊成: 結膜炎-中耳炎症候群の成因としての鼻汁の役割. 第54回日本化学療法学会総会, 京都, 2006年5月18-19日
- 31) 松木 啓, 真崎宏則, 池田秀樹, 倉本剛史, 麻生憲史: 特別養護老人ホームから入院した患者における各種感染症の頻度および抗菌化学療法に関する実態調査. 第54回日本化学療法学会総会, 京都, 2006年5月18-19日
- 32) 渡邊貴和雄, 渡邊 浩, 吉嶺裕之, 本田章子, 大石和徳: 呼吸器感染症における肺炎球菌及びインフルエンザ菌の各種抗菌薬に対する薬剤感受性に関する検討. 第54回日本化学療法学会総会, 京都, 2006年5月18-19日

- 33) 田中健之, 原田義高, 山領 豪, 川上健司: 当院における肺アスペルギルス症の検討. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 34) 池田秀樹, 大石和徳, 有吉紅也: マウス肺炎球菌性肺炎モデルにおけるリコンビナントPs-pA経鼻接種の感染予防効果. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 35) 森本浩之輔, 寺田真由美, 有吉紅也: HMG-CoA reductase阻害剤は, マクロファージによるアポトーシス細胞の貪食除去を亢進させる. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 36) 川上健司, 原田義高, 田中健之, 山領 豪: 当院における多剤耐性結核の臨床像. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 37) 鋤崎利貴, 千住秀明, 力富直人, 大石和徳, 有吉紅也: 塩酸プロカテロールの単回投与がCOPD患者の運動能力に及ぼす影響. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 38) 北川知佳, 力富直人, 千住秀明: 呼吸器リハビリを目的に開業した有床診療所の患者背景とその効果. 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006年6月1-3日
- 39) 有吉紅也: 長崎大学熱帯医学研究所における熱帯医学研修. 第10回日本渡航医学会学術集会, 東京, 2006年7月7-8日
- 40) 渡邊 浩: 内科領域におけるワクチン接種の問題点. 第10回日本渡航医学会学術集会, 東京, 2006年7月7-8日
- 41) 渡邊 浩, 宮城 啓: 長崎県の旅行会社への旅行医学に関するアンケート調査の解析. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 42) 宮城 啓, 津守陽子, 渡邊 浩: 入院を要したラオス在留邦人及び同国への邦人渡航者についての検討. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 43) 野内英樹, 石川信克, 有吉紅也: 結核・エイズ・アジア・アフリカのフィールド研究活動と人材育成のネットワーク構築へ向け. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 44) 土屋菜歩, Panita P, 安田直史, 向山由美, Pathom S: タイ国ランパン県におけるHAART療法治療失敗の関連因子とアドヘレンスモニタリング・評価方法に関する研究. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 45) 齊藤麻理子, 井上真吾, 本田章子, 有吉紅也, 大石和徳: デングウイルス二次感染症における血小板減少への静注用γグロブリン大量療法の効果. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日

- 46) 陳 蒙, 黒木麗喜, 吉嶺裕之, 有吉紅也, 大石和徳: ウガンダのHIV感染者に対する7価肺炎球菌コンジュゲートワクチンと23価肺炎球菌ワクチン併用接種の血清免疫学的効果に関する研究. 長崎, 2006年10月11-13日
- 47) 中岡大士: こどもの結核感染リスク. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 48) 有吉紅也: HIV・エイズ～熱帯地における感染症研究の新たなアプローチ～. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 49) 高木理博, 馬場基男, 藤田紀代, 天野秀明, 畑地 豪, 松本桂太郎, 永安 武, 森本浩之輔, 有吉紅也: 咽後膿瘍から降下性壊死性縦隔炎を来した1症例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 50) 土橋佳子, 黒木麗喜, 森本浩之輔, 有吉紅也: Gefitinibが奏効した肺原発多形癌の一例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 51) 栗田伸一, 迫 隆紀: GEM+VNR併用療法によりQOLが維持できた進行肺腺癌の1例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 52) 原田義高, 小山和彦, 山領 豪, 川上健司, 森本浩之輔, 有吉紅也: 肺野型サルコイドーシスの1例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 53) 森本浩之輔, 土橋佳子, 寺田真由美, 有吉紅也, 嬉野紀夫, 杉原 充, 小柳孝太郎: GM-CSF吸入療法と全肺洗浄の併用が奏功した難治性特発性肺胞蛋白症の一例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 54) 田中健之, 土橋佳子, 本田章子, 寺田真由美, 森本浩之輔, 有吉紅也: 当科でGM-CSF吸入療法を施行した特発性肺胞蛋白症5例の検討. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 55) 川上健司, 原田義高, 小山和彦, 山領 豪, 高橋孝郎, 森本浩之輔, 有吉紅也: 結核性胸膜炎のドレナージ部位に皮膚瘻を生じた一例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 56) 松木 啓, 麻生憲史, 有吉紅也, 森本浩之輔: カラードプラにて診断し得た肝性胸水の一例. 第58回日本結核病学会九州地方総会・第57回日本呼吸器学会九州地方会総会, 福岡, 2006年11月17-18日
- 57) 本田章子, 黒木麗喜, 土橋佳子, 森本浩之輔, 渡邊 浩, 有吉紅也: 重篤な経過をたどっ

た鼻性頭蓋内合併症（脳膿瘍）の一例．第76回日本感染症学会西日本地方会総会，岡山，2006年11月23－24日

- 58) **土橋佳子，黒木麗喜，森本浩之輔，有吉紅也**：蜂窩織炎を認めたMSSA硬膜外膿瘍の一例．第76回日本感染症学会西日本地方会総会，岡山，2006年11月23－24日
- 59) **小山和彦，原田義高，山領 豪，川上健司，森本浩之輔，有吉紅也**：当院における過去4年半の埋め込み型中心静脈カテーテル（ポート）感染症．第76回日本感染症学会西日本地方会総会，岡山，2006年11月23－24日
- 60) **黒木麗喜，齊藤若菜，土橋佳子，森本浩之輔，渡邊 浩，有吉紅也**：産褥熱に伴うToxic shock syndromeの一例．第76回日本感染症学会西日本地方会総会，岡山，2006年11月23－24日
- 61) **青木克己，渡部幹次，浜本 満**：ビルハルツ住血吸虫感染にともなう排尿異常：治療の効果．第75回日本寄生虫学会大会，弘前市，2006年5月19－20日
- 62) **菊池三穂子，渡部幹次，Ekhlas H，奈良武司，荒川 武，青木克己，平山謙二**：ミニブタを用いた住血吸虫感染動物モデルの開発．第75回日本寄生虫学会大会，弘前市，2006年5月19－20日
- 63) **伊藤 誠，Njeri W，高木秀和，Kiliku FM，青木克己，木村英作**：フィラリア症の尿診断法におよぼすビルハルツ住血吸虫感染の影響．第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 64) **阿部眞由美，Muhoho N，門司和彦，嶋田雅暁，青木克己**：ケニア国沿岸州クワレ地区ムサンガタム村における医療協力プロジェクト終了後のビルハルツ住血吸虫症の現状．第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 65) **一ノ瀬昭豊，モハメド アリムル イスラム，森田公一**：酢酸ウラニルに代わるウイルスのネガティブ染色技法の開発．第22回 医学生物学電子顕微鏡技術学会学術講演会，浜松，2006年5月12－13日
- 66) **千種雄一，井上 徹，Lydia Leonardo，Ronald Lim，Lea Agsolid，菊池三穂子，桐木雅史，加藤尚子，平山謙二，松田 肇，吾妻 健**：フィリピンソルソゴン州における未治療の日本住血吸虫症患者の肝臓超音波所見．厚生労働科学研究費・国際医学協力研究事業「寄生虫症の病態・治験及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究（H17－国医－7）班」平成17年度班会議 日米医学協力寄生虫疾患専門部会・平成17年度国内会議，東京，2006年2月18日
- 67) **高木明子，菊池三穂子，Mirani Weerasooriya，木村英作，伊藤 誠，安波道郎，吉浦孝一，新川詔夫，平山謙二**：スリランカの象皮病多発家系を用いた罹患同胞対解析による疾患感受性遺伝子マッピング．平成17年度班会議 日米医学協力寄生虫疾患専門部会・平成17年

- 度国内会議 厚生労働科学研究費・国際医学協力研究事業「寄生虫症の病態・治験及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究(H17-国医-7)班」, 東京, 2006年2月18日
- 68) 平山謙二: The necessary things for hosting the diploma course of clinical product development at Nagasaki University, 薬剤開発のための大学院設立準備委員会議, 長崎, 2006年3月19-20日
- 69) 田辺和祐, 先濱直子, Ingegend Rooth, Anna Famert, Anders Bjorkman, 平山謙二: 現生熱帯熱マラリア原虫集団における抗原多型の進化. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 70) 平山謙二, 菊池三穂子, 安波道郎, 塚原高広, 石井一成, Lum J Koji, 金子 明: Malaria selection pressure might influence on the frequencies of several polymorphic markers for immune related genes in Vanuatu. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 71) 肥後廣夫, 三浦左千夫, 吾妻 健, 三森龍之, 平山謙二, 竹内 勤, 多田 功, 姫野國祐: *Trypanosoma cruzi* のPCRおよびSSCPによる分類. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 72) 曾根敏雄, 肥後廣夫, 大城 聡, 松下 祥, 平山謙二: プロテオームによる *Trypanosoma cruzi* I と *Trypanosoma Cruzi* II 由来タンパク質の異同の解析. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 73) Songthamwat Dujdow, 梶原和夫, 菊池三穂子, 柳 哲雄, 肥後廣夫, 平山謙二: Structure and expression analysis of a multigene family of Gp82 of *Trypanosoma cruzi*. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 74) 菊池三穂子, 渡部幹次, Hamed Ekhlās, 奈良武司, 新川 武, 青木克己, 平山謙二: ミニブタを用いた住血吸虫感染動物モデルの開発. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 75) 高木明子, D W Mirani, 菊池三穂子, 伊藤 誠, 木村英作, 安波道郎, 吉浦孝一郎, 新川 詔夫, 平山謙二: スリランカの象皮病多発家系における罹患同胞対解析を用いた疾患受性遺伝子の探索, 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 76) 千種雄一, 井上 徹, Lydia Lennardo, Ronald Lim, Lea Agsolid, 菊池三穂子, 桐木雅史, 加藤尚子, 平山謙二, 松田 肇, 吾妻 健: フィリピン・ソルゴン州における日本住血吸虫症患者の肝臓超音波画像: 特にNetwork pattern形成状況について. 第75回日本寄生虫学会大会, 弘前, 2006年5月19-20日
- 77) 大谷仁志, 安波道郎, 有村卓郎, 寺崎文生, 北浦 泰, 清水賢己, 木村彰方: 家族性肥大型心筋症 (FHCM) の新しい原因遺伝子座はHLA領域にマップされる. 東京都千代田区,

2006年9月24－26日

- 78) 柴田宏樹, 安波道郎, 中島敏晶, 木村彰方: NFKBIL 1 (IKBL) 遺伝子の機能解析. 第15回日本組織適合性学会大会, 東京都千代田区, 2006年9月24－26日
- 79) Nguyen TPLan, 菊池三穂子, Vu T Q. Huong, Vu T T Ngu, Hoang N Dao, Vo D Tham, Tran V Dat, Do Q Ha, 小山寿文, 森田公一, 安波道郎, 平山謙二: デングウイルス感染症のHLA解析. 第15回日本組織適合性学会大会, 東京都千代田区, 2006年9月24－26日
- 80) 安波道郎, 菊池三穂子, 奥田尚子, 塚原高広, 佐藤智生, 松尾 恵, Ratawan Ubalee, Koji J Lim, 金子 明, 平山謙二: 遺伝子多型の地理的分布と感染因子による選択圧. 第15回日本組織適合性学会大会, 東京都千代田区, 2006年9月24－26日
- 81) 菊池三穂子, 安波道郎, 奥田尚子, 塚原高広, 佐藤智生, 松尾 恵, Ratawan Ubalee, Koji J Lim, 金子 明, 平山謙二: バヌアツにおける遺伝子多型の地理的分布とマラリア感染による選択圧. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11－13日
- 82) 高木明子, W V Mirani, 菊池三穂子, 伊藤 誠, 木村英作, 安波道郎, 吉浦孝一郎, 新川詔夫, 平山謙二: スリランカの象皮病多発家系における罹患同胞対解析を用いた疾患感受性遺伝子の探索. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11－13日
- 83) Nguyen Lan PT, 菊池三穂子, 安波道郎, Vu Ngu TT, Hoang Dao N, Vo Tham D, Tran Dat V, Do Ha Q, 小山寿文, 平山謙二: デングウイルス感染症のHLA解析. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11－13日
- 84) Songthamwat Dujdow, 梶原和夫, 菊池三穂子, 上村春樹, 柳 哲雄, 肥後広夫, 安波道郎, 平山謙二: クルーストリパノソーマ感染に関与する分子であるGp82遺伝子の機能解析. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11－13日
- 85) 日野原邦彦, 安波道郎, 柴田宏樹, 田中弓子, 高橋めぐみ, 宝田 茂, 猪子英俊, 和泉徹, 中島敏晶, 木村彰方: 心筋梗塞感受性遺伝子座M1-1の解析. 第51回日本人類遺伝学会大会, 鳥取県米子市, 2006年10月17－20日
- 86) 安波道郎, 菊池三穂子, 奥田尚子, 塚原高広, 佐藤智生, 松尾 恵, Ratawan Ubalee, Koji J Lim, 金子 明, 平山謙二: マラリア感受性を規定する遺伝子多型の地理的分布. 第51回日本人類遺伝学会大会, 第51回日本人類遺伝学会大会, 鳥取県米子市, 2006年10月17－20日
- 87) 平山謙二, 高木明子, W V Mirani, 菊池三穂子, 安波道郎, 奥田尚子, 伊藤 誠, 木村英作, 吉浦孝一郎, 新川詔夫: スリランカの象皮病多発家系における罹患同胞対解析を用

- いた疾患感受性遺伝子の探索. 第51回日本人類遺伝学会大会, 第51回日本人類遺伝学会大会, 鳥取県米子市, 2006年10月17-20日
- 88) 成瀬妙子, 安波道郎, 俣富康宏, 宮澤正顕, 永井美之, 木村彰方: ヒトおよび実験動物サルにおける免疫応答関連遺伝子群のゲノム多様性. 第51回日本人類遺伝学会大会, 第51回日本人類遺伝学会大会, 鳥取県米子市, 2006年10月17-20日
- 89) 菊池三穂子, 安波道郎, 奥田尚子, 塚原高広, 佐藤智生, 松尾 恵, Ratawan Ubalee, Koji J. Lim, 金子 明, 平山謙二: 遺伝子多型野地理的分布とマラリア感染による選択圧. 第5回分子寄生虫・マラリア研究フォーラム, 東京都千代田区, 2006年10月28-29日
- 90) 高木明子, 石井一成, 山崎朗子, 菊池三穂子, 坪井敬文, 平山謙二: PlasmoDBデータベースを用いた赤血球期における熱帯熱マラリアワクチン候補分子の探索. 第59回日本寄生虫学会南日本支部大会・第56回日本衛生動物学会南日本支部大会 合同大会, 福岡県福岡市, 2006年10月28-29日
- 91) 山崎朗子, 石井一成, 高木明子, 菊池三穂子, 安波道郎, 平山謙二: 熱帯熱マラリア高度浸淫地における重度貧血症の発症メカニズムの解析. 第59回日本寄生虫学会南日本支部大会・第56回日本衛生動物学会南日本支部大会 合同大会, 福岡県福岡市, 2006年10月28-29日
- 92) Nakamura Minoru, Matsuyama Mutsumi, Komori Atsumasa, Migita Kiyoshi, Kamihira Takashi, Abiru Seigo, Yatsushashi Hiroshi, Ishibashi Hiromi, Lan Nguyen T P, Kikuchi Mihoko, Hirayama Kenji, Yasunami Michio: Study of HLA DR and genetic polymorphism for predictive-antibody production in primary biliary cirrhosis. 第36回日本免疫学会総会・学術集会, 大阪府大阪市, 2006年12月11-13日
- 93) 安波道郎, Nguyen T P Lan, 菊池三穂子, Vu T Q Huong, Vu T T Ngu, Hoang N Dao, Vo D Tham, Dat V Tran, Do Q Ha, 森田公一, 平山謙二: デングウイルス感染症のHLA解析. 第36回日本免疫学会総会・学術集会, 大阪府大阪市, 2006年12月11-13日
- 94) 依田健志, 峰松和夫, 阿部朋子, Sukmawati Basuki, Yoes Prijatna Dachlan, 門司和彦, 神原廣二, 樂得康之, 溝田 勉: インドネシア・ロンボク島及びスンバワ島におけるマラリアコントロールプロジェクトの事後評価. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会 合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 95) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: 人工衛星データとDEMによる地表の季節変動の観察. 日本第四紀学会2006年創立50周年大会, 東京, 2006年8月4-6日
- 96) 西木真緒, 磯 望, 後藤健介, 黒木貴一: LANDSATデータによる北部九州の地表の季節変動. 日本第四紀学会2006年創立50周年大会, 東京, 2006年8月4-6日
- 97) 磯 望, 黒木貴一, 後藤健介, 黒田圭介: 2005年台風14号による大淀川下流浸水域の特

- 徴. 2006年日本地理学会秋季学術大会, 静岡, 2006年9月23日
- 98) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: ランドサットデータによる斜面の地形区分の試み. 2006年日本地理学会秋季学術大会, 静岡, 2006年9月23日
- 99) 都築 中, Vu Trang Duoc, 比嘉由紀子, Le Viet Lo, 後藤健介, Le Trung Nghia, 野内英樹, Nguyen Thi Yen, 高木正洋: ベトナム国中部ニャチャン市の乾季におけるデング熱媒介蚊 *Aedes aegypti* 幼虫・蛹の発生源とその分布. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会 合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 100) 後藤健介, 谷村 晋, 都築 中, Vu Dinh Thiem, Mohammad Ali, 野内英樹: 途上国のGISマッピングにおける高解像度衛星データの適用. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会 合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 101) 後藤健介, 磯 望, 黒木貴一, 溝田 勉: 2005年台風14号による宮崎水害から考える感染症リスクマネジメント. 日本安全教育学会第7回福岡大会, 福岡, 2006年10月28-29日
- 102) 磯 望, 黒木貴一, 後藤健介: 福岡県西方沖地震の震動体感とその影響. 日本災害情報学会第8回学会大会, 東京, 2006年10月28-29日
- 103) 鹿嶋小緒里, 山本秀樹, 谷村 晋, 中田敬司, 坂野晶司: スリランカ津波被災地域での, リモートセンシングと地理情報システムの緊急救援活動時における活用とその評価に関する研究. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 104) 谷村 晋, Thiem Vu Dinh, 黒岩宙司, 溝田 勉: デング熱流行に影響を与える地域要因の検討-MCMCによる階層的空間ポアソン回帰モデルの適用-. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会, 長崎, 2006年10月11-13日
- 105) 谷村 晋, 黒岩宙司, 溝田 勉: 長崎市の小児医療における地理的な受療機会格差の時間的変動. 第65回日本公衆衛生学会, 富山市, 2006年10月25-27日
- 106) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: 2005年台風14号による大淀川下流域の氾濫被害. 2005年福岡地理学会, 福岡, 2006年1月29日
- 107) 磯 望, 後藤健介, 黒木貴一, 大平明夫: 2005年台風14号による大淀川下流域の氾濫被害-衛生画像と現地調査による分析-. 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会, 福岡, 2006年2月18日
- 108) 田中芳樹, 後藤健介, 後藤恵之輔: 衛生リモートセンシングを用いた台風9918号による熊本災害の調査解析. 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会, 福岡, 2006年2月18日

- 109) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: アンケートとGISによる福岡県西方沖地震の実体調査の試み. 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会, 福岡, 2006年2月18日
- 110) 後藤恵之輔, 田中芳樹, 後藤健介: 台風による塩害停電対策のためのリモートセンシングの活用. 第15回生研フォーラム「宇宙からのモニタリング」, 東京, 2006年3月16-17日
- 111) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介, 宗 建郎: 衛生データとGISによる大宰府市の環境変化解析. 2006年日本地理学会春季学術大会, 埼玉, 2006年3月27-30日
- 112) 西木真織, 後藤健介, 磯 望, 黒木貴一: ランドサットデータに現れる季節変動解析-北部九州の事例. 2006年日本地理学会春季学術大会, 埼玉, 2006年3月27-30日
- 113) 磯 望, 黒木貴一, 後藤健介, 田中夢見, 水本 茜, 沖原美央, 佐々野理恵, 藤原あや: アンケートによる福岡県西方沖地震の影響調査. 2006年日本地理学会春季学術大会, 埼玉, 2006年3月27-30日
- 114) 川田 均, 高木正洋: ネットアイシマカとヒトスジシマカの寄主探索行動の違いに関する室内実験. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 115) 川田 均, Luu Le Loan, Tran Khanh Tien, Nguyen Thi Nhu Mai, 高木正洋: メトフルトリンを含む常温揮散製剤の蚊に対する空間忌避効果に関する検討(5) ベトナム・ミト市の民家におけるネットアイシマカを対象とした新樹脂製剤の残抗性試験. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 116) 川田 均, 岩崎智則, Luu Le Loan, Tran Khanh Tien, Nguyen Thi Nhu Mai, 庄野美德, 片山泰之, 高木正洋: メトフルトリンを含む常温揮散製剤の蚊に対する空間忌避効果に関する検討(6) ベトナム・ミト市の民家におけるネットアイシマカを対象とした新樹脂製剤の残抗性試験. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 163) Tran Vu Phog, 都野展子, 川田 均, 高木正洋: Fecundity related to mating frequency in six freshwater copepods (Copepoda: Cyclopidae). 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 117) 杉浦正昭: エアゾールの溶剂量が粒子径・付着量および効力に与える影響. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 118) 杉浦正昭: 溶剤低減エアゾールにおける粒子径制御が付着量および効力に与える影響. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日
- 119) 沢辺京子, 星野啓太, 伊澤晴彦, 中口 梓, 佐々木年則, 比嘉由紀子, 津田良夫, 高崎智彦, 小滝 徹, 井上真吾, 森田公一, 川田 均, 高木正洋, 永野博明, 藤井猪一郎, 千屋誠造, 渡辺 護, 斉藤一三, 小林睦夫: 2005年国内捕集コガタアカイエカからの日本脳炎ウイルスの分離. 第58回日本衛生動物学会大会, 長崎市, 2006年4月6-8日

- 120) 川田 均, 比嘉由紀子, Nguyen Thi Yen, Nguyen Thuy Hoa, 前川芳秀, 大橋和典, 高木正洋: BG-センチネルTMトラップによる蚊成虫の捕集成績. 第59回日本寄生虫学会南日本支部大会・第56回日本衛生動物学会南日本支部大会, 福岡市, 2006年10月28-29日
- 121) 都野展子: サハラ以南アフリカのマラリア媒介蚊ガンビエハマダラカの個体群動態の研究. 動物学会・植物学会・生態学会 長崎地区合同例会, 長崎市, 2006年12月9日
- 122) 都築 中, Duoc Vu Trang, 比嘉由紀子, Le Viet Lo, 後藤健介, Le Trung Nghia, 野内英樹, Nguyen Thi Yen, 高木正洋: ベトナム国中部ナチャン市の乾季におけるデング熱媒介蚊 *Aedes aegypti* 幼虫・蛹の発生源とその分布. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 123) 砂原俊彦, Vu Viet Hung, Nguyen Dinh Nam, Vu Duc Chinh, Ho Dinh Trung, 高木正洋, 門司和彦, 中澤秀介: Variability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus*, among and within villages. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 124) 門司和彦: 熱帯医学と国際保健における人類生態学的アプローチ. Human Ecological Approaches in Tropical Medicine and Health. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 125) 國井 修: インド洋津波災害における感染症の危機管理. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 126) 神谷保彦: 災害後の緊急援助における越冬対策ー避難民キャンプでの感染症対策を中心に, Winterization in post-disaster emergency aid with focus on infection control in displacement. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 127) 金田英子: 「教科」としての感染症対策 Prevention of infectious diseases as school curriculum. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 128) 國井 修, 中村安秀: MDGs目標4: 子供の死亡低減のために何をすべきか, What should we do for the reduction of child mortality? - Millennium Development Goals -. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 129) 國井 修: MDGs目標4に向けたUNICEFの戦略と実践そして課題, UNICEF's strategies, actions and challenges for achieving MDGs Goal 4. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会, 長崎市, 2006年10月11-13日
- 130) 松山章子: 国際保健の人材育成と確保: 長崎大学の人材人育戦略, Enhancement of human resource development in international health: Strategy of Nagasaki University. 第47回日本熱帯医

- 学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 131) Kaneda E, Pongvongsa T, Bounngong B, Moji K : The prospect of the Lahanam demographic surveillance system, Lao PDR. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 132) Kaneko S, Shimada M, Karama M, Minakawa N, Komazawa O, Mushinzimana E, Moji K, Ichinose Y, Kaneda E : 熱帯感染症並びに健康関連問題解決のために必要とされる研究の基盤となる人口統計・保健情報システムの整備について. A platform development for demographic and health information system to support research and control of infectious diseases and health-related problems. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 133) Sunahara T, Vu VH, Nguyen DN, Vu DC, Ho DT, Le KT, Takagi M, Moji K, Shusuke N : Variability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus*, among and within villages. マラリア媒介蚊アノフェレス・ダイラスの村落内外の空間における量的変異. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 134) 西浦 博：症候期年齢に対する天然痘感染性の逆計算法による最尤推定. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 135) 山田紀男，山田紀男，野内英樹，今津里沙，石川信克：エイズと結核の国際共同研究と人材育成システムとの連携：タイ国チェンライ県での経験より-Human Resource Development and International Cooperative Research: Experiences from Chiang Rai, Thailand-. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 135) 中尾優子，徳永瑞子，大石和代，西浜佳子，永富由紀子，門司和彦：出生時健康状態からみた出産後2時間までの児の意識レベルと授乳行動－中央アフリカ共和国・バンギ市診療所での観察結果より－. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 136) 神谷保彦：国際保健協力における保健システムのマネジメント強化に関するシステム理論的検討. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 137) 竹内昌平，Yuesheng Li, Yongkang He, Huan Zhou, Kazuhiko Moji, Ryutaro Ohtsuka, Chiho Watanabe : Behaviors associated with water contact and *Schistosoma japonicum* infection in a rural village, the Dongting Lake region, China. 中国，洞庭湖周辺地域の漁村における水接触行動と日本住血吸虫症感染. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 138) Masahiro Hashizume, Ben Armstrong, Yukiko Wagatsuma, Asg Faruque, Taiichi

- Hayashi：バングラデシュにおけるコレラの季節変動を制御する気象因子。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 139) 中村禎子，SA Sarker, MA Wahed, 我妻ゆき子，奥 恒行，門司和彦：フラクトオリゴ糖継続摂取がバングラデシュ都市部スラム街小児の体重増加および下痢発症抑制に及ぼすプレバイオティク効果-無作為二重盲検プラセボ試験-。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保険医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 140) 阿部朋子，Tuong TD, Thieu NgQ, Hung LQ, Thuan LK, 砂原俊彦，中澤秀介，門司和彦：Mosquito avoidance practice and infection in a minority's community in Vietnam. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 141) 砂原俊彦，Vu Viet Hung, Nguyen Dinh Nam, Vu Duc Chinh, Ho Dinh Trung, Le Khanh Thuan, 高木正洋，門司和彦，中澤秀介：Valiability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus*, among and within villages. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会合同大会，長崎市，2006年10月11－13日
- 142) 門司和彦：感染症による環境評価：熱帯アジア・オセアニアにおける環境改変と節足動物媒介性疾患の興亡。平成18年度総合地球環境学研究所研究プロジェクト発表会，京都，2006年12月13－15日
- 143) 松山章子：女性の教育が妊婦検診受診行動に与える影響－医療人類学的研究。第17回国際開発学会，東京，2006年11月25－26日
- 144) 西浦 博：デングウイルス伝播に関する基本再生産数の推定。第3回生物数学の理論とその応用，京都，2006年12月4日
- 145) 松山章子：妊娠，出産，育児におけるネパール女性の意志決定。日本助産学会国際助産協働セミナー，東京，2006年1月28日
- 146) 二見恭子，皆川 昇：潜っても逃げられない？ コモリグモによるボウフラの捕食。第25回日本動物行動学会，岡山，2006年10月27－29日
- 147) 砂原俊彦，Vu DC, Vu VH, Nguyen DN, Ho DT, Le KT, 高木正洋，門司和彦，中澤秀介：蚊成虫採集用低コスト・ライトトラップの開発。第56回日本衛生動物学会南日本支部大会，福岡，2006年10月28－29日
- 148) 江原雅彦：コレラ菌の線維状ファージfs2のattL, attR領域の解析。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年10月11－13日
- 149) 山崎栄樹，和田昭裕，中山真彰，久恒順三，西 義人，平山壽哉：*H. pylori* が産生する空胞化毒素VacAのRPTP・のフォスファターゼ活性に与える影響。第79回日本細菌学会総会，金沢，2006年3月29－31日
- 150) 久恒順三，中山真彰，山崎栄樹，西 義人，和田昭裕，片方陽太郎，平山壽哉：*H. py-*

- lori* VacAはp38 MAP kinase及びErk1/2シグナル伝達系を介してシクロオキシゲナーゼ-2 mRNAの発現を亢進する。第79回日本細菌学会総会，金沢，2006年3月29－31日
- 151) 中山真彰，和田昭裕，山崎栄樹，西 義人，久恒順三，八尋錦之助，平山壽哉：*H. pylori* 空胞化毒素（VacA）の毒性発現機序。第79回日本細菌学会総会，金沢，2006年3月29－31日
- 152) 和田昭裕，高橋 章，山崎栄樹，藤原由似子，中山真彰，久恒順三，西 義人，平山壽哉：*H. pylori* 空胞化致死毒素（VacA）の毒性機序へのRPTP・の役割。第79回日本細菌学会総会，金沢，2006年3月29－31日
- 153) 重松和人，河合紀生子，入江準二，中谷 晃，鳥山 寛，田口 尚，高原 耕：副腎腫瘍におけるIGF-II発現の検討。第95回日本病理学会，東京，2006年4月30－5月2日
- 154) 藤田修一，千馬正敬，林徳真吉，池田 通，鳥山 寛：口腔疣贅性癌のhuman papilloma virus（HPV）遺伝子型の解析。第95回日本病理学会，東京，2006年4月30－5月2日
- 155) 鳥山 寛，千馬正敬，Jutavijittum Prapan, Yousukh Amnat：タイ国北部の献血者におけるB型肝炎ウイルス遺伝子型の分布。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎市，2006年10月11－13日
- 156) 森田公一：Hokkaido University International Symposium on Sustainable Development, Japanese Encephalitis Molecular Epidemiology Implies Possible Rapid West Nil Virus Expansion: Development of West Nile Fever Vaccines. Hokkaido University International Symposium on Sustainable Development, 北海道，2006年8月7－8月9日
- 157) 余 福勲，井上真吾，長谷部 太，Parquet del Carmen，森田公一：SARS（新型肺炎）の血清疫学的診断法確立並びに血清疫学的研究。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年10月11－13日
- 158) 井上真吾，Nemani Talemaitoga, A Aryati, Mohammed A Islam, Efren M Dimaano, Ronald R Matias, Wimal Abeyewickreme, 大石和徳，Filipinas F Natividad，森田公一：東南アジアおよび太平洋州におけるチクングニアウイルス感染症の分布。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年10月11－13日
- 159) Mohammed A Islam, Muzahed U Ahmed, Nasima Begum, Naseem A Chowdhury, Afjal H Khan, Maria del C Parquet, 井上真吾，長谷部 太，鈴木康夫，森田公一：バンラデシュにおける2002年のデング流行に関する分子生物学的ならびに臨床学的解析。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年10月11－13日
- 160) 森田公一，Santhosh SR, Dash PK, Tripathi NK, Saxena P, Ambuj P, Sahni AK, Lakshmanarao PV, Parida Manmohan：日本脳炎迅速診断のためのReal Time RT-LAMP法の開発とその評価。第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年

10月11－13日

- 161) Mathenge Edward G M, Nawa Masaru, 森田公一：Evidence of a pH-dependant conformation specific structural epitope in Japanese encephalitis Virus. 第47回日本熱帯医学会・第21回日本国際保健医療学会，長崎，2006年10月11－13日
- 162) 余 福勲，井上真吾，長谷部 太，Parquet Maria del Carmen, 森田公一：Development of IgM capture ELISA system of SARS-CoV by using recombinant truncated nucleocapsid protein as antigen. 第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 163) 左 一八，森田公一，長谷部 太，鈴木康夫，鈴木 隆：ウイルス結合性糖鎖誘導体を用いたデングウイルス感染阻害作用の検討，第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 164) 林 昌宏，高崎智彦，根路銘令子，伊藤美佳子，田島 茂，森田公一，石川豊数，倉根一郎：日本脳炎ウイルス中和抗体保有マウスのウエストナイルウイルス不活化ワクチンによる免疫応答の検討．第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 165) Parida Manmohan, 森田公一：Development and Evaluation of Reverse Transcription Loop Mediated Isothermal Amplification Assay for Japanese Encephalitis Virus. 第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 166) 井上真吾，長谷部 太，森田公一：デングウイルス感染症における一次感染および二次感染診断法の開発．第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 167) 神澤範行，西垣一男，林 隆也，新納亜也子，石井聡一，安井文彦，小原道法，森田公一，松島綱治，増田貴夫，神奈木真理：SARS-CoV 3a/X1および7a/X4はNF- κ Bを介して炎症性サイトカインの産生を増強する．第54回日本ウイルス学会，名古屋，2006年11月19－21日
- 168) Morita K, Nga PT, Parida M, Ito T, Parquet MDC, Thuy NT：Identification of a novel mosquito-borne virus in Vietnam. 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress, 京都，2006年6月18－6月23日
- 169) 森田公一：ニパウイルスの血清診断法の開発と応用．九州微生物研究会，福岡
- 170) 森田公一：糖鎖機能によるデングウイルス感染の制御．戦略的創造研究推進事業(CREST) 糖鎖全体会議，大阪
- 171) 井上真吾，Nemani Talemaitoga, Aryati, Mohammed A Islam, Efren M Dimaano, Ronald R Matias, Wimal Abeyewickreme, 大石和徳，Filipinas F Natividad and 森田公一：第12回トガ・フラビ・ペスチ研究会，東京

10. 3 国際会議における研究発表

- 1) **Putaporntip C, Seethamchai S, Siripoon N, Suekorn A, Harnyuttanakorn P, Jongwutiwes S, Kanbara H** : Novel mutations in the chloroquine resistant transporter gene of *Plasmodium falciparum* (Pfcr) in Thailand. The 15th Japanese-German Symposium on Protozoan Diseases, Sep 16-21, 2006, Obihiro, Japan
- 2) **Kanbara H, Uemura H, Dachlan YP, Basuki S, Iskandar Y** : Epidemiological data in Sumbawa and Lombok islands, Indonesia revealed early acquisition of malaria immunity with increasing age. The 15th Japanese-German Symposium on Protozoan Diseases, Sep 16-21, 2006, Obihiro, Japan
- 3) **Seethamchai S, Putaporntip C, Kob-Asa T, Areekul C, Hongsri-muang T, Charoenkorn M, Malaivichitnond S, Jongwutiwes S, Kanbara H** : Search for *Plasmodium knowlesi* in Thailand: a study in macaque population. The 15th Japanese-German Symposium on Protozoan Diseases, The 15th Japanese-German Symposium on Protozoan Diseases, Sep 16-21, 2006, Obihiro, Japan
- 4) **Jongwutiwes S, Seethamchai S, Kob-Asa T, Putaporntip C, Kanbara H** : Search for *Plasmodium knowlesi* in Thailand: a study in human population. The 15th Japanese-German Symposium on Protozoan Diseases, Sep 16-21, 2006, Obihiro, Japan
- 5) **Kanbara H** : Progress Report of the Collection and Supply System for Parasitic Protozoans by Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University. 9th International Symposium of the Research Center for Pathogenic Fungi and Microbial Toxicoses [RC-PFMT], Dec 15, 2006, Chiba, Japan
- 6) **Pandey K, Pandey BD, Mallik AK, Sherchand JB, Yanagi T, Kanbara H** : Homogeneity of recent isolates of *Leishmania donovani* from visceral leishmaniasis (Kala-azar) patients in Nepal. 9th International Symposium of the Research Center for Pathogenic Fungi and Microbial Toxicoses [RC-PFMT], Dec 15, 2006, Chiba, Japan
- 7) **Oishi K** : Role of strain-specific surface antigen in pulmonary defense against nontypeable *Haemophilus influenzae* (NTHi) in a murine model. US/Japan Cooperative Medical Science Program Acute Respiratory Infections Panel Meeting, Jan 24-25, 2006, Texas, USA.
- 8) **Watanabe H** : Prevalence and transmission of acute respiratory tract infections caused by *Streptococcus pneumoniae* and *Haemophilus influenzae* among the internally displaced persons in tsunami disaster evacuation camps of Sri Lanka. , Jan 24-25, 2006, US/Japan Cooperative Medical Science Program Acute Respiratory Infections Panel Meeting, Texas, USA.
- 9) **Aoki Y, Hien NT.** : Research center for clinical epidemiology of Emerging and re-emerging

infectious diseases. MEXT "Program of founding research centers for emerging and re-emerging infectious diseases". Asian Research Forum on Emerging and Re-emerging infection – 2006, Feb 19, 2006, Tokyo, Japan

- 10) **Takaki A, Weerasooriya M, Kikuchi M, Yasunami M, Kimura E, Ito M, Yoshiura K, Niikawa N, Hirayama K** : Linkage Analysis of elephantiasis by affected Sib-pairs in Sri Lanka, University of Glasgow, 11th International Congress of Parasitology ICOPA – XI, Aug 6–11, 2006, Glasgow, UK.
- 11) **Sone T, Oshiro S, Matsushita S and Hirayama K** : Proteome Analysis of *Trypanosoma cruzi* CL Brener, A Reference Strain of Genome Project. University of Glasgow, 11th International Congress of Parasitology ICOPA – XI, Aug 6–11, 2006, Glasgow, UK
- 12) **Yasunami M, Kikuchi M, Okuda N, Okusa N, Tsukahara T, Sato C, Matsuo M, Ratawan Ubalee, Koji J Lim, Kaneko A, Hirayama K**: Geography-dependent difference in allele frequencies of immune-related loci presumably under malarial selection in Vanuatu. Earnest N. Morial Convention Center, New Orleans, The American society of Human Genetics, 56th Annual Meeting, Oct 9–13, 2006, Louisiana, USA
- 13) **Kenji Hirayama** : Research Ethics: Through the Activity of FERCAP (Forum for Ethical Review Committee in Asia and the Western Pacific). Convention Center of Ramada Plaza, 2006 Joint Symposium of Korean society for Clinical Pharmacology and therapeutics & Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics, Dec 11, 2006, Jeju, Korea
- 14) **Lan T P Nguyen, Kikuchi M, Huong Q Vu, Ngu T Vu, Dao N Hoang, Tham D Vo, Dat V Tran, Ha Q Do, Oyama T, Morita K, Yasunami M, Hirayama K** : HLA may control virus serotype specific immunity in Dengue infection. Atlanta Marriott Marquis, American society of Tropical Medicine and hygiene 55th Annual Meeting, Nov 12–16, 2006, Atlanta Georgia, USA
- 15) **Nguyen Thi Phuong Lan, Kikuchi M, Vu T Q Huong, Vu T T Ngu, Vo D Tham, Tran V Dat, Do Q Ha, Morita K, Hirayama K** : Emerging and Re-emerging Viral Infections, Genetic Analysis for Susceptible gene to Dengue Hemorrhagic Fever in Vietnam. National Institute of Hygiene and Epidemiology, Scientific Conference of the Pasteur Institute International Network, Nov 27–28, 2006, Hanoi, Vietnam
- 16) **Kenji Hirayama** : The concept of the International Product R&D post-graduate Course. Faculty of Medicine Experimental Research Bldg, Diploma Course on Research & Development of Products to meet Public Health Needs Meeting of stakeholders, Dec 1–2, 2006, Hongo Campus, The University of Tokyo, Japan
- 17) **Kenji Hirayama** : Final recommendations and conclusion of the meeting. Faculty of Medicine

- Experimental Research Bldg, Diploma Course on Research & Development of Products to meet Public Health Needs Meeting of stakeholders. Dec 1-2, 2006, Hongo Campus, The University of Tokyo, Japan
- 18) **Kenji Hirayama** : Group presentations, discussion and recommendations. Faculty of Medicine Experimental Research Bldg, Diploma Course on Research & Development of Products to meet Public Health Needs Meeting of stakeholders. Dec 1-2, 2006, Hongo Campus, The University of Tokyo, Japan
 - 19) **Kenji Hirayama** : Ethical considerations in the community based study. Institute of Tropical Medicine (ITM), 5th Nagasaki International Course on Research Ethics, Jul 24-26, 2006, Nagasaki University, Nagasaki, Japan
 - 20) **Kenji Hirayama** : An International Course on Surveying and Evaluating Ethical Review Practices. Forum for Ethical Review Committees in Asia & the Western Pacific(FERCAP)/ An International Course on Surveying and Evaluating Ethical Review Practices, Apr 23-27, 2006, Seoul National University, Seoul, Korea
 - 21) **Takeshi Yoda, Kazuo Minematsu, Tomoko Abe, Sukmawati Basuki, Ketut Artasutra, Yoes Prijatna Dachlan, Kazuhiko Moji, Hiroji Kanbara, Yasuyuki Rakue, and Tsutomu Mizota** : The Effects of the Malaria Control Program in West Nusa Tenggara Province, Indonesia. The Joint International Tropical Medicine Meeting 2006, Nov 29-Dec 1, 2006, Bangkok, Thailand
 - 22) **Tanimura S** : Physical accessibility to pediatricians in time and space in Nagasaki city. Institute Statistical Mathematics,
 - 23) **Zhao H, Tanaka Y, Goto K, Gotoh K** : Investigation Analysis of the Kumamoto High-Tide Damage by Typhoon 9918 Using Satellite Remote Sensing. The 13th Australasian Remote Sensing and Photogrammetry Conference, Nov 20-24, 2006, Canberra, Australia
 - 24) **Kawada H** : Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin-impregnated plastic strips against vector mosquitoes. 11th IUPAC International Congress of Pesticide Chemistry, Aug 6-11, 2006, Kobe, Japan
 - 25) **Hasegawa M, Tuno N, Yen N, Takagi M** : Influence of multi-species host distribution on abundance and blood-feeding of JE vectors in a northern Vietnam village. 6th International Congress of Dipterology, Sep 23-28, 2006, Fukuoka, Japan
 - 26) **Takagi M** : Viral Encephalitis and Hemorrhagic Fever. Asian Research Forum on Emerging and Reemerging infections-2006, Feb 19-20, 2006, Tokyo, Japan
 - 27) **Takagi M** : Special Workshop for "Mosquito Control". 11th IUPAC International Congress of

Pesticide Chemistry, Aug 6-11, 2006, Kobe, Japan

- 28) **Nishiura H, Eichner M** : Estimating the Illness Stage-Specific Infectiousness of Smallpox. XXII-Ird International Biometric Conference(IBC), Jul 17, 2006, Montreal, Canada
- 29) **Nishiura H** : Modeling force of infection dengue on age-specific incidence of dengue hemorrhagic fever. Japan-Korean Joint Meeting for Mathematical Biology, Sep 18, 2006, Fukuoka, Japan
- 30) **Sunahara T, Moji K, Kaneda E, Takagi M, Ho DT, Le KT, Boupha, Pongvongsa T** : Water, Mosquitoes and Malaria in the Indochina Peninsula: Towards a Predictive Model. RIHN 1st International Symposium Water and Better Human Life in the Future, Nov 6-11, 2006, Kyoto, Japan
- 31) **Sunahara T, S Vu VH, Nguyen DN, Vu DC, Ho DT, Le KT, Takagi M, Moji K, Shusuke N** : Variability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus*, among and within villages. JSPS Core University Program 4th International Seminar on Emerging and Re-Emerging Infectious Diseases, Dec 1-2, 2006, Hanoi, Vietnam
- 32) **M Ehara, B M Nguyen, D T Nguyen, N T Cuong** : Analysis of the right and left junction region of intergrated filamentous phage fs2. 41st Joint Conference on Cholera and Other Bacterial Enteric Infections Pannel, Nov 5-7, 2006, Gifu, Japan
- 33) **Wada A, Yamasaki E, Moss J, Hirayama T** : *Helicobacter pylori* Vacuolating Cytotoxin (VacA) Induces Activation of Bax and Bak Independent of Vacuolation. 106th General Meeting of American Society for Microbiology, May 5-7, 2006, Florida, USA
- 34) **Toshiya Hirayama** : Mechanism of Action of *Helicobacter pylori* VacA toxin in Disease: Role of Protein Tyrosine Phosphatases. 8th Japan Korea Microbiology Meeting, Mar 29, 2006, Kanazawa, Japan
- 35) **Toshiya Hirayama** : Mode of Action of *Helicobacter pylori* Vacuolating Cytotoxin, VacA. Ajou International Symposium hosted by Genome Research Center for Gastroenterology, Jun 17, 2006, Ajou University, Suwon, Korea
- 36) **Toshiya Hirayama, Akihiro Wada, Hisao Kurazono, and Joel Moss** : *Helicobacter pylori* VacA clustering in lipid rafts, mediated by its receptor, RPTP $\cdot$, is required for intoxication in AZ-521 cells. 7th International Workshop on Pathogenesis and Host Response in Helicobacter Infections, Jul 1-4, 2006, Helsingør, Denmark
- 37) **Toshiya Hirayama, Masaaki Nakayama, Hisao Kurazono and Joel Moss** : RPTP $\cdot$, is required for intoxication and activation of intracellular signaling pathways in AZ-521 cells. 2006 US-Japan Cholera Meeting, Clustering of *Helicobacter pylori* VacA in lipid rafts, mediated by its receptor, Nov 5-7, 2006, Gifu, Japan

- 38) **Toshiya Hirayama, Jyunzo Hisatsune, Joel Moss** : *Helicobacter pylori* VacA enhances PGE2 production through the induction of COX-2 expression via p38 MAP kinase/ATF-2 cascade in AZ-521 cells. The American Society for Cell Biology 46th Annual Meeting, Dec 9–13, 2006, San Diego, USA
- 39) **Hirayama T** : Mechanism of Action of *Helicobacter pylori* VacA toxin in Disease: Role of Protein Tyrosine Phosphatase. 8th Japan-Korea International Symposium on Microbiology, Mar 29, 2006, Kanazawa, Japan
- 40) **Maria Parquet** : 7th Asia-Pacific Congress of Medical Virology, Identification of a novel virus isolated in Vietnam. 7th Asia-Pacific Congress of Medical Virology, Nov 13–15, 2006, India
- 41) **Hidari K, Aoki C, Yamada A, Hasebe F, Islam MA, Hatano K, Matsuoka K, Guo CT, Takahashi T, Sakano Y, Suzuki T, Miyamoto D, Terumura D, Morita K, Suzuki Y** : Identification and characterization of carbohydrate determinant that is recognized with domain III of dengue virus envelope glycoprotein. 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress, Jun 18–23, 2006, Kyoto, Japan
- 42) **Morita K** : Studies on anti-dengue compounds that inhibit cell entry. International Symposium on Dengue, Nov 10, 2006, India
- 43) **Morita K** : Japanese encephalitis virus ecology in Asia Implies possible rapid region-wide West Nile virus expansion: Needs of Development of West Nile fever vaccines. Scientific Conference of the Pasteur Institute International Network on Emerging and Re-emerging Viral Infections, Nov 27–28, 2006, Vietnam
- 44) **Hasebe F, Yu F, Khairullah N S, Inoue S, Balasubramanian V, Berendam S J, The LK, Ibrahim N S, Abdul R S, Hassan S S, Sinniah M, Mai Le Q, and Morita K** : Sero-diagnosis of Nipah virus infection by using recombinant Nipah virus nucleocapsid protein expressed in *Escherichia coli*. 4th International Seminar on Emerging and Re-emerging Infectious Diseases, Dec 4–6, 2006, Vietnam
- 45) **Nga P T, Thuy N T, Yen N T, Miller BR, Takagi M, Parquet M C and Morita K** : Emerging Nam Dinh virus and its possible subtypes in Vietnam. 4th International Seminar on Emerging and Re-emerging Infectious Diseases, Dec 4–6, 2006, Vietnam
- 46) **Morita k** : Ecology of arbovirus in Asia implies a future rapid expansion of West Nile virus in the region. Development of West Nile fever vaccines, Feb 19–20, 2006, Tokyo, Japan

10. 4 報告書等印刷物

- 1) 神原廣二, 上村春樹, 中澤秀介, 柳 哲雄, 福間利英, 井上雅広, 大橋 眞, 前野芳正, 坪井敬文: 住血原虫の機能と病態. 長崎大学熱帯医学研究所 平成17年度共同研究報告集, 平成18年 8 月, p24-25
- 2) 神原廣二, 上村春樹, 中澤秀介, 柳 哲雄, 宇賀昭二, 井関基弘, 所 正治, 吉川尚男, 橘 裕司, 寺本 勲: 腸管内原虫の種多様性とその疫学. 長崎大学熱帯医学研究所 平成17年度共同研究報告集, 平成18年 8 月, p26-28
- 3) 神原廣二: インドネシアにおけるマラリア薬剤耐性の起源と現状. 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書, 平成18年 4 月
- 4) 青木克己: ビルハルツ住血吸虫症: 感染者の疾病認識に沿った調査により明らかになる多様な病害. 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書, 平成18年12月
- 5) 青木克己, 江原雅彦, 太田房雄, 木村英作, 野田伸一, 辻 尚利: 象皮病患者には何故血中に仔虫が検出されないか. 長崎大学熱帯医学研究所 平成17年度 共同研究報告集, 平成18年 8 月, p29-30
- 6) 平山謙二, 坂下鈴鹿: 国立大学法人化大學はこう変わった. 国際連携研究のための戦略的外部資金導入システム確立に向けて. 文部科学教育通信, No147. pp. 16-17. 平成18年 6 月 11日,
- 7) 平山謙二, 菊池三穂子, 石井一成, 青木克己, 神原廣二, 嶋田雅暁, 森田公一, 太田伸生, 木村英作, 松田 肇, Vu Thi Que Huong: 熱帯感染症に対する宿主感受性を決定する遺伝子多型の解析. 長崎大学熱帯医学研究所(全国共同利用研究所) 平成17年度(2005) 共同研究報告書, 長崎大学熱帯医学研究所, 2006. 平成18年 8 月, p 9-12
- 8) 平山謙二, 菊池三穂子, 青木克己, 加藤尚子, 熊谷 貴: ミニブタを用いたヒト住血吸虫症モデルの確立と応用. 長崎大学熱帯医学研究所(全国共同利用研究所) 平成17年度(2005) 共同研究報告書, 長崎大学熱帯医学研究所, 2006. 平成18年 8 月, p46-48
- 9) 平山謙二: 医学研究における倫理に関する国際セミナー. 長崎大学熱帯医学研究所(全国共同利用研究所) 平成17年度(2005) 共同研究報告書, 長崎大学熱帯医学研究所, 2006. 平成18年 8 月, p51-57
- 10) 平山謙二: 進化する大学院②熱帯医学専攻(修士課程), 「感染症や熱帯医学についてグローバルな研究やプロジェクトを行う」, 長崎大学広報誌「CHOHO」Vol.14, 平成18年 1 月, p 8-9
- 11) 大渡 伸: 「海外活動体験談のデータベース化のお願い」. 長崎大学熱帯医学研究所 同門

会誌. 第35号, 平成18年12月, p60

- 12) 岩崎正美, 平山謙二, 齋藤 明: 研究の国際展開～外部資金獲得・海外拠点～. 大学国際戦略本部強化事業 平成17年度公開シンポジウム報告書 大学の国際戦略—戦略的・組織的な取組を目指して—. pp. 42-64, 独立行政法人日本学術振興会, 2006. 平成18年 3 月
- 13) 平山謙二: ワクチン抗原遺伝子導入住血吸虫株の樹立とその感染動物の検討. 平成14-16年度国際学術研究助成研究成果報告書, 出版(財) 平和中島財団, 平成18年 2 月, p170-171
- 14) 岩崎正美, 平山謙二, 齋藤 明: 研究の国際展開～外部資金獲得・海外拠点～. 大学国際戦略本部強化事業平成17年度公開シンポジウム報告書 大学の国際戦略—戦略的・組織的な取組を目指して—, 発行独立行政法人日本学術振興会, 2006, 平成18年 3 月, p42-64
- 15) 平山謙二: 寄生虫症感受性の宿主因子の検討. 厚生労働科学研究費補助金(国際医学協力研究事業) 寄生虫症の病態・治療及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究(H17-国医-7) 平成17年度 総括・分担研究報告書, 平成18年 3 月, p30-32
- 16) 平山謙二: ミニブタを用いた日本住血吸虫感染動物モデルの開発. 厚生労働科学研究費補助金(新興・再興感染症 研究事業) 輸入蠕虫性疾患の監視と医療対応整備に関する研究(H15-新興-8) 平成17年度総括・分担研究報告書, 平成18年 3 月, p27-29
- 17) 後藤健介: 勝山町の自然的位置と特徴. 勝山町史 上巻, 平成18年 3 月, p 3 - 8
- 18) 後藤健介: 衛星画像で見た勝山. 勝山町史 上巻, 平成18年 3 月, p26-32
- 19) 磯 望, 黒木貴一, 後藤健介: 台風14号による大淀川下流洪水氾濫区域の実態と地形・土地条件の特徴. 科研費補助金(特別研究促進費) 17800003 2005年 9 月台風14号による水災害と土砂災害に関する研究 研究成果報告書, 平成18年 3 月, p182-187
- 20) 後藤健介: 太宰府市の衛星画像解析による土地被覆の経年的変化と解析上の課題. 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 一般) 16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書, 平成18年 3 月, p 3 -15
- 21) 西木真織, 後藤健介, 磯 望: 衛星画像解析による北部九州の土地被覆の経年的変化. 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 一般) 16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書, 平成18年 3 月, p29-43
- 22) 磯 望, 西木真織, 後藤健介: 北部九州で認められた衛星画像の季節的变化. 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 一般) 16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書, 平成18年 3 月, p57-73
- 23) 平山壽哉, 真嶋浩聡: ヘリコバクター・ピロリVacA毒素の毒性発現機序. 平成16年度～平

成17年度科学研究費補助金系晩研究（特定領域研究）研究成果報告書，平成18年3月，平成18年3月

- 24) **森田公一**：国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得のための人材育成のあり方に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 国際健康危機管理ネットワーク強化研究事業 国際的な健康管理に必要なスキル獲得のための人材育成のあり方に関する研究(H16-国際-103) 平成17年度総括・分担報告書，主任研究者森田公一，長崎大学熱帯医学研究所，平成18年3月，p1－7
- 25) **森田公一**：国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得のための人材育成のあり方に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 国際健康危機管理ネットワーク強化研究事業 国際的な健康管理に必要なスキル獲得のための人材育成のあり方に関する研究(H16-国際-103) 平成16～18年度総合研究報告書，主任研究者森田公一，長崎大学熱帯医学研究所，平成18年3月
- 26) **森田公一**(分担)：ウエストナイルウイルス進入に備えての診断，予防対策への基盤的研究。厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業(H17-新興-2) 平成17年度研究成果報告書，平成18年3月，p51－56
- 27) **森田公一**(分担)：デング出血熱の重症化機序の解明と治療戦略。平成16～17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)） 研究成果報告書，平成18年3月
- 28) **森田公一**(分担)：西ナイル熱ウイルスなどのフラビウイルス感染症の診断法，疫学および予防法。平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)） 研究成果報告書，平成18年3月
- 29) **森田公一**(分担)：節足動物媒介性ウイルスに対する診断法の確立，疫学及びワクチン開発に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業(H15-新興-17) 平成17年度研究報告書，平成18年3月，p23－28
- 30) **森田公一**(分担)：SARSコロナウイルス検査法の制度向上および迅速化に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業(H16-新興-11) 平成17年度研究成果報告書，平成18年3月，p15－18

11 講 演 会

11. 1 熱帯医学研究所における所外講師による講演

- 1) Framework for research ethics.

Reidar K. Li

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 2) Informed Consent.

Kenji Matsui

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 3) Evaluation of risks and benefits.

Reidar K. Li

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 4) Research on children or vulnerable persons.

Hidefumi Nakamura

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 5) Inducements, exploitation

Reidar K. Lie

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 6) Private IRBs in the USA

Young-Mo Koo

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 7) IRB on clinical trials in Japan.

Eiji Uchida

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 8) Pharmacogenomics genetics and ethics.

Kiichiro Tsutani

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 9) Issues in international research ethics.

Reidar K. Lie

Jul 24-Jul 26, 2006, 長崎大学熱帯医学研究所修士課程セミナー室 (101号室)

- 10) 新規常温揮散性殺虫成分：②ヤブカ用殺虫剤等

杉浦正昭

Apr 12-Apr 13, 2006, 宝塚市

- 11) Priority information ofn the Culicinae mosquitoes (Diptera: Culicidae) collected in Binh Phuoc province in march 2006

Manh N.D.

Dec 4-Dec 6, 2006, Hanoi, Vietnam

- 12) Variability in species composition of Anopheles mosquitoes in time and space in Binhphuoc Province, Vietnam

Hung V.V.

Dec 4-Dec 6, 2006, Hanoi, Vietnam

- 13) Field evaluation of spatial repellency of metoflufhrin-impregnated plastic strips against vector mosquitoes in Do Son, Hai Phong, Vietnam

Yen N.T.

Dec 4-Dec 6, 2006, Hanoi, Vietnam

11. 2 熱帯医学研究所教員による講演

1) インフルエンザと旅行医学

渡邊 浩

Mar 12, 2006 長崎市

2) MRSAに対する院内感染対策

渡邊 浩

Mar 28, 2006 福岡市

3) 旅行医学と当院での海外旅行外来の現状

渡邊 浩

Sep 5, 2006 長崎市

4) 一般外来で遭遇するHIV・AIDS

有吉紅也

Dec 20, 2006 大村市

5) 長崎大学熱帯医学研究所（熱研）の国際的評価と使命について

青木克己

Nov 20, 2006 長崎グランドホテル

6) ゲノムの個人差の研究から見えてくること、平成18年度創立記念行事進路別研究会 ごじゆうに会が語る一振り返れば30年、今伝えるころー

安波道郎

May 30, 2006 福岡県立修猷館高校，福岡

7) 東西歴史の融合とグローバル社会への対応-地勢学から人間の安全保障を学ぶ-

溝田 勉

Apr 1-Mar 31, 2006 放送大学長崎学習センター

8) International Cooperation

溝田 勉

Oct 27, 2006 The 40th IATSS Forum in Suzuka

9) NPOと私達の暮らし

溝田 勉

May 12, 2006 長崎市民会館 大会議室

10) 日本の教育

溝田 勉

May 2, 2006 京都国際会議場 中会議室

- 11) 我が国が行う国際協力
溝田 勉
Oct 27, 2006 鈴鹿サーキットホテル サクラホール
- 12) 現代社会と科学の方法 I
溝田 勉
Jun 3, 2006 長崎大学総合教育研究棟
- 13) 現代社会と科学の方法 II
溝田 勉
Jun 10, 2006 長崎大学総合教育研究棟
- 14) 経済開発と国際社会
溝田 勉
Jun 17, 2006 長崎大学総合教育研究棟
- 15) 開発と環境 I
溝田 勉
Jul 1, 2006 放送大学長崎学習センター
- 16) 開発と環境 II
溝田 勉
Jul 8, 2006 放送大学長崎学習センター
- 17) 人間の安全保障 I
溝田 勉
Jul 15, 2006 放送大学長崎学習センター
- 18) 人間の安全保障 II
溝田 勉
Jul 22, 2006 放送大学長崎学習センター
- 19) 国際社会環境と長崎平和教育
溝田 勉
Aug 5, 2006 放送大学長崎学習センター
- 20) 長崎平和教育
溝田 勉
Aug 12, 2006 放送大学長崎学習センター
- 21) PKOとODA I
溝田 勉
Aug 19, 2006 放送大学長崎学習センター

22) PKOとODA II

溝田 勉

Aug 26, 2006 放送大学長崎学習センター

23) 大転換期を迎えた我が国と世界の政府開発援助 I

溝田 勉

Sep 2, 2006 放送大学長崎学習センター

24) 大転換期を迎えた我が国と世界の政府開発援助 II

溝田 勉

Sep 9, 2006 放送大学長崎学習センター

25) 東西歴史の融合とグローバル社会への対応

溝田 勉

Sep 16, 2006 放送大学長崎学習センター

26) 国連改革とODA I

溝田 勉

Sep 23, 2006 放送大学長崎学習センター

27) 国連改革とODA II

溝田 勉

Sep 30, 2006, 放送大学長崎学習センター

28) 国連の再生は可能か

溝田 勉

Oct 7, 2006 放送大学長崎学習センター

29) 国連の現状と課題

溝田 勉

Oct 14, 2006 放送大学長崎学習センター

30) NGOとNPO I

溝田 勉

Oct 21, 2006 放送大学長崎学習センター

31) NGOとNPO II

溝田 勉

Jul 28, 2006 放送大学長崎学習センター

32) 国政改革の争点と国際社会への適応

溝田 勉

Nov 4, 2006 放送大学長崎学習センター

- 33) 国政改革の争点と国際社会への適応-フォローアップ-I
溝田 勉
Nov 18, 2006 放送大学長崎学習センター
- 34) 国政改革の争点と国際社会への適応-フォローアップ-II
溝田 勉
Nov 25, 2006 放送大学長崎学習センター
- 35) 国際環境と社会開発 I
溝田 勉
Dec 2, 2006 放送大学長崎学習センター
- 36) 国際環境と社会開発 II
溝田 勉
Dec 10, 2006 放送大学長崎学習センター
- 37) 資本主義経済社会と人間の安全保障
溝田 勉
Dec 16, 2006 放送大学長崎学習センター
- 38) 政策形成に影響を及ぼすマスメディア並びにジャーナリズム
溝田 勉
Feb 10, 2006 放送大学長崎学習センター
- 39) 政策形成と世論
溝田 勉
Feb 17, 2006 放送大学長崎学習センター
- 40) 地理空間分析のためのベクタデータモデル共通基盤 ～spパッケージのクラスとメソッド～
谷村 晋
Dec 8-9, 2006 東京
- 41) NPOと私達の暮らし
溝田 勉
May 2, 2006 長崎市民会館大会議室
- 42) ケニアにおけるマラリア媒介蚊幼虫の摂食生態の研究—窒素炭素安定同位体を用いて—
都野展子
Sep 25, 2006 京都大学生態学研究センター同位体セミナー
- 43) マラリア媒介蚊幼虫の生態とマラリアアウトブレイクの関係
都野展子
Sep 25, 2006 第7回感染症ワークショップイン千葉

44) 疾病媒介蚊の生態とその防除対策

高木正洋

Feb 6, 2006 札幌, 北海道大学

45) マラリアの感染予防および治療に関する研究(H15-新興-22)」における研究成果報告

高木正洋

Mar 25, 2006 東京, 国立国際医療センター

46) 新規常温揮散性殺虫成分：①媒介蚊対策への応用－特にメトフルトリンについて

川田 均

Apr 12-13, 2006 宝塚市

47) ハマダラカが多回吸血について－ケニア西部での野外調査の結果－

都野展子

Apr 12-13, 2006 宝塚市

48) Pupal productivity survey of *Aedes aegypti* (Diptera:Clicidae) in an urban city of middle Vietnam

Tsuzuki A.

Dec 4-6, 2006 Hanoi, Vietnam

49) Study on variations in vector mosquitoes in Vietnam.

Higa Y.

Dec 4-6, 2006 Hanoi, Vietnam

50) Variability in abundance of the malaria vector, *Anopheles dirus* , among and within villages.

Sunahara T.

Dec 4-6, 2006 Hanoi, Vietnam

51) Fecundity and survivorship related to mating frequency in 6 freshwater copepods (Copepoda: Cyclopidae)

Phong T.V.

Dec 4-6, 2006 Hanoi, Vietnam

52) 女性の教育が妊婦検診受診行動に与える影響－医療人類学的研究

松山章子

Nov 25-26, 2006 東京大学本郷キャンパス

53) ねずみ, 昆虫等の防除

堀尾政博

Jul 27, 2006 福岡市

54) 病原体を運ぶ虫

堀尾政博

Aug 26, 2006 諫早市（長崎県医師会）

- 55) Japanese experiences of MCH before and after the World War II

松山章子

Oct 5-7, 2006 天草市民会館

- 56) Safe Motherhood実践的研究とフィールドへの応用

松山章子

Oct 14, 2006 長崎大学医学部記念講堂

- 57) 医療人類学

松山章子

Oct 14, 2006 長崎大学医学部

- 58) Learning about long-term vaccination effects from outbreak data.

Eichner M, Schwehm M, Nishiura H.

Sep 19, 2006 Stockholm, Sweden

- 59) Mosquito avoidance practice and malaria infection in a minority's community in southern Vietnam.

阿部朋子

Dec 1-2, 2006 Hanoi, Vietnam

- 60) Filamentous phages of *Vibrio cholerae* 01 and 0139.

江原雅彦

May 16, 2006 ロンドン

- 61) ヘリコバクターピロリ VacA毒素の受容体とp38MAPK活性化に関する研究

平山壽哉

Mar 15, 2006 日本銀行教会

- 62) Intoxication of *Helicobacter pylori* vacuolating cytotoxin, VacA, through interaction with receptor type protein tyrosine phosphatases.

平山壽哉

Jun 10, 2006 National Institute of Cholera and Enteric Diseases, Kolkata

- 63) 日本脳炎ウイルスの生態と差し迫る西ナイルウイルスの脅威そして対策

森田公一

Apr 6-8, 2006 第58回日本衛生動物学会（長崎大学医学部）

- 64) ウエストナイル熱ワクチン

森田公一

Apr 20-21, 2006 第80回日本感染症学会（東京）

65) 人材育成のカリキュラムについて

平成17年度厚生労働科学研究費補助金，国際健康危機管理ネットワーク強化研究推進事業
研究成果発表会

森田公一

Mar 3, 2006 東京

12 主要な研究設備

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1 回転電動万能ミクロトーム | 20 核酸蛋白質解析合成システム |
| 2 反射型蛍光顕微鏡 | 21 宿主・寄生体相互作用解析システム |
| 3 ウルトラミクロトーム | 22 プラスミド自動分離調整システム |
| 4 落射蛍光位相差顕微鏡 | 23 遺伝子検出システム |
| 5 分離用超遠心機 | 24 感染症病原性解析システム |
| 6 真空高速冷却遠心機 | 25 コロニーアナライザー画像解析装置 |
| 7 クリオスタット | 26 熱帯性病原体成分機能解析システム |
| 8 万能倒立顕微鏡 | 27 多機能ぜん虫行動解析システム |
| 9 走査電子顕微鏡装置 | 28 熱帯性ウイルス感染症診断試薬作成システム |
| 10 プロテインシステム | 29 蛋白質精製システム |
| 11 生態機能解析装置 | 30 病原性ウイルス遺伝子及び蛋白質機能解析システム |
| 12 病理組織標本作製システム | 31 自動炭酸ガス細胞培養装置 |
| 13 超高速ビデオ | 32 超遠心機 |
| 14 細胞自動解析分離システム | 33 核酸オリゴマー感染症治療薬開発システム |
| 15 原虫遺伝子DNA解析システム | 34 生物顕微鏡 |
| 16 レーザースキャン顕微鏡 | 35 細菌毒素活性測定解析システム |
| 17 医用サーモグラフィ装置 | 36 DNAシークエンサー |
| 18 蛋白細胞相互作用解析システム | 37 デジタル画像電子顕微鏡システム |
| 19 白血球機能解析システム | |

13 刊 行 物

1) Tropical Medicine

当研究所が発行した機関誌で、熱帯医学の原著論文のほかに短報や総説などが掲載される。

本誌は長崎大学風土病紀要として昭和34年に創刊されたものであるが、昭和42年に研究所名が改められたときにTropical Medicine（熱帯医学）と変更され、さらに平成元年からは英文のみの雑誌となった。毎年4号分を1巻として平成12年度には第42巻が発行されたが、平成13年度から休刊中である。

2) 長崎大学熱帯医学研究所年次要覧

昭和39年3月、当研究所の沿革および研究活動をまとめた最初の「長崎大学風土病研究所年次要覧、昭和38年度」が刊行された。その後、昭和42年の研究所名改称に伴う標記表題への変更はあったが、昭和45年度まで毎年刊行された。昭和46年度から54年度までの分はまとめて昭和56年3月に発行された。昭和55年度から再び毎年発行されることになり現在に至っている。平成17年度年次要覧は平成18年12月に発行された。

3) 長崎大学熱帯医学研究所Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University

国内及び外国からの来訪者に対する当研究所の紹介パンフレットとして、長崎大学熱帯医学研究所案内(A Guide to the institute of Tropical Medicine, Nagasaki University)が昭和55年12月に最初に発行された。その後一部改訂されたものが随時発行されてきた。平成元年10月には、当研究所が共同利用研究所に改組されたのを機会に、標記のように表題を改めカラー印刷として発行され、その後は毎年発行されることになった。平成6年度に研究所の機構が大部門制に改組されたのを機に、このパンフレットはB5判からA4判に改められ、また和文版と英語版を別々に作成することになった。平成19年度版は、平成19年6月に発行された。

4) 長崎大学熱帯医学研究所共同研究報告集

この報告集は、当研究所が平成元年に全国共同利用研究所に改組されたのに伴い、毎年実施される共同研究と研究集会の概要をまとめたものである。平成18年度の報告集は、平成19年8月に発行された。

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧
平成18年度（2006）

平成21年7月発行

編集者：長崎大学熱帯医学研究所
附属熱帯感染症研究センター

発行者：長崎大学熱帯医学研究所
〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4
☎(095)819-7800（総合案内）

印刷所：株式会社クイックプリント
〒850-0034 長崎市樺島町8-12
☎(095)827-1318